軍師 真田幸村

近藤精一郎



新人物往来社

装丁■川田 幹

〈著者紹介〉



近藤精一郎（こんどう・せいいちろう）

大正十五年大阪生まれ。気象大学校卒。

気象技術員を皮切りに、二十八年間の教壇生活を経て、吹田市教育委員会社会教育課長、吹田市立中央図書館長を歴任、昭和五十九年四月勇退。

日本著作権協議会会友。兵庫歴史研究会会長。

文芸同人誌「直線」を主宰。「航路」同人。

編著書「文学教室」（日月書院）

著書「非常持出」（六月社）「なにわ塚物語」（創芸出版）

現住所　伊丹市高台一―一四九―一九

装丁■川田　幹



軍師 真田幸村

近藤精一郎

新人物往来社

軍師 真田幸村

近藤精一郎

新人物往来社

ISBN4-404-00521-0 C0021 ¥1500E

定価1500円

戦国の本

新人物往来社

信長・秀吉・家康の人間関係学
中西信男・関峋一――2000円

戦国大名家臣団事典（全2巻）
山本大・小和田哲男編――各6800円

関ヶ原合戦の人間関係学
中西信男――2000円

定本 武田信玄
磯貝正義――1800円

武田二十四将伝
坂本徳一――2000円

関ヶ原合戦のすべて
小和田哲男――2000円

石田三成
安藤英男――1300円

武田信玄に学ぶ
上野晴朗――2000円

伊達政宗のすべて
高橋富雄編――2000円

北条早雲のすべて
杉山博編――2000円

武田信玄のすべて
磯貝正義編――1800円

織田信長のすべて
岡本良一編――2000円

豊臣秀吉のすべて
桑田忠親――2000円

徳川家康のすべて
北島正元編――2300円

織田信長に学ぶ
童門冬二――1500円

駿河 今川一族
小和田哲男――2000円

武田信玄に学ぶ
小和田哲男――2000円

房総 里見一族
川名登――2000円

安芸 毛利一族
河合正治――2000円



軍師 真田幸村

近藤精一郎

新人物往来社

軍師 真田幸村



近藤精一郎

新人物往来社

目次

真田家の虚像と実像……一一
松代藩十万石 11　真田の里 13
真田三代記 14　真田幸村論 16
軍師三代……一八
信州真田一族 18　真田幸隆 21
真田昌幸 23　真田信之 26
京わらべ歌に見る幸村像……二八
真打ち登場 28　風貌姿勢 29
不思議なる弓取り 31　わらべ歌の真情 33
六文銭覚書……三四
幸村の初陣 34　六文銭の紋所 36
真田紐 37　幸村の佩刀 39
楠兵法と真田兵法……四一
真田流軍学 41　甲陽軍鑑 42
楠公遺訓 43　真田軍記 45
表裏比興の者……四七
昌幸の汚名 47　犬伏の別れ 48
上田城の攻防 52　関ケ原合戦始末 54
真田庵縁起……五六
九度山詣で 56　真田屋敷 57
赦免の沙汰 59　昌幸死去 61
徘徊行脚……六三
軍師の花道 63　江戸開府 65
紀見峠 68　寄手塚身方塚 69
真田忍妖録……七二
信濃忍法 72　真田入道好白 74
忍者霧隠鹿右衛門 75　最後の戦機 77
挙兵への罠……七八

将軍世襲　78　二条城の会見　79
方広寺の鐘銘　81　且元追放　82

黄金二百枚・銀三十貫……………………八四
閑居遠望　84　阿伝の呼吸　86
使者来訪　88　幸村出陣　90

籠城軍議……………………………………九四
浪人部隊　94　宇治・勢多迎撃　95
出丸構築　97　大御所着陣　98

真田丸攻め…………………………………一〇一
鳴野・今福の合戦　101　奇策縦横　103
もぐら攻め　106　難攻不落　108

張抜筒と銅連火……………………………一〇九
大筒・小筒　109　疑心暗鬼　111
地雷戦術　112　御本丸女中衆　115

和議成立……………………………………一一六
信濃十万石の誘い　116　和睦の勅使　119
客将無視　120　血判取り　122

遺信に滲む幸村像…………………………一二三
二ノ丸壊平　123　よろず気遣い　128
幸村の病苦　132　再戦近し　133

挙兵再び……………………………………一三五
有楽退城　135　客将四天王　136
腰兵粮の心意気　138　先陣争いの功罪　140

赤胴赤指物…………………………………一四二
真田の赤備え　142　熟する戦機　143
客将軍議　144　道明寺の合戦　146

しんがり戦法………………………………一四八
八尾・若江の戦　148　真田隊遅参の謎　151

幸村・大助父子の訣別……………………一五九
誉田の戦 154　撤退指令 157
決戦前夜 159　最後の軍議 160
茶臼山の陣 161　決戦の火ぶた 162
火の玉戦術……………………一六五
合図の狼煙 165　血染めの鎧直垂 166
猪武者越前勢 167　人質推参 171
御陣衆逃散……………………一七二
真田疾風隊 172　踏み躙られた馬印 174
奇襲再び 174　家康の恐怖 176
我こそは幸村なり……………………一七八
突入三たび 178　幸村の奇蹟 180
切腹寸前 181　幸村討死 182
真田日本一の兵……………………一八四
大坂落城 184　大助の自刃 187
東軍真田隊 189　国松君の斬首 191
七人の影武者……………………一九二
首実検 192　旗本詮議 195
六文銭の誇り 197　元和偃武 199
真田幸村考……………………二〇一
『武』の意義 201　最後の武人 203
虚説俗説 206　虚像の軍師 209
真田太平記補遺……………………二一一
真田風雲録 211　幸村の家族 212
真田十勇士 214　真田祭 216
あとがき……………………二一八
真田幸村関係略年表 221　現存遺跡遺品等一覧 228
真田系図 234　参考文献 236

装丁・川田　幹

軍師　真田幸村

真田家の虚像と実像

松代藩十万石

『大名諸家一覧』の慶応元年（一八六五）の記載によれば、真田家は、信濃最大の禄高十万石を領し、第八代藩主幸貫（ゆきつら）は、江戸幕府の老中として幕政に参与し、佐久間象山などの鬼才を世に送って幕末開国論の端緒をなしたとされている。松代町名誉市民の第一号となった旧伯爵真田幸治氏はその裔である。

つまり、真田家の家系は、由緒ある六文銭（正しくは六連銭）の家紋とともに今日にいたっているのである。しかも、昭和四十年には『六文会』と称する会が設立され、真田家に関する文化財・遺品等の歴史的資料の収集・保存のための全国的な調査組織にまで発展しつつあると聞く。

松代は、長野盆地の南東部、千曲川の右岸に位置する城下町で、江戸時代には、蘭学の中心地としても栄えたが、明治維新後、鉄道建設の予定を断わり、対岸の長野市に発展の糸口を譲った格好で衰微した。近年、わずかにその名を想起せしめるところとなったのは、太平洋戦争末期に構築された大本営地下壕と、その遺構で頻発地震の綿密なデータをキャッチした地震観測所の存

在によってである。

松代藩十万石の初代藩主は、真田信之――戦国の一匹狼と言われた真田昌幸の長子で、真田幸村の兄にあたる――以後、第二代信政、幸道、信弘、信安、幸弘、幸専、幸貫、幸教、幸民と世襲し、徳川三百諸侯の一として維新を迎え、旧伯爵真田家の後裔として現代にいたるのである。

とはいえ、真田家は、もともと徳川譜代の臣ではなく、幕府からの監視も厳しく、転封・改易といった危機に晒される恐れがなかったわけではない。関ケ原の合戦後、信之が家康から拝領した所領は、父、昌幸の遺領を含めた上田領十万石だったが、元和八年（一六二二）十月、松代城主酒井忠勝の出羽鶴岡への移封に伴って松代への転封を命ぜられたものである。さらには、信之の隠居後、第二代信政の逝去によって生じた相続争い、支領ともいうべき沼田藩三万石の改易といった憂目をも蒙っている。

が、しかし、信之が関ケ原の合戦に際して、父昌幸や弟幸村と袂を分かって家康への忠誠を誓ったこと、徳川譜代の重臣本多忠勝の息女小松殿を妻に娶ったこと等によって、江戸幕府からの迫害をいささかなりとも柔らげてきたことは確かである。つまり、その後も幕臣諸家（本多・酒井・井伊・松平）との縁戚を深め、外様大名としては破格の扱いを受けてきたのである。

かくして、松代十万石は、徳川二百六十余年の歳月を安堵して維新を迎える。その間の紆余

曲折はともかくとして、信之を祖とする松代の真田こそが、真田家の実像であることは紛れもない事実であろう。

真田の里

真田の姓を名のる者がどれほどの数にのぼるかは審らかではないが、真田という地名については、意外とその数が乏しいようである。『全国地名辞典』を繙いてみても、長野県小県（ちいさがた）郡に、辛うじてその名を認めるのみで、他のいずれの都道府県にもそれと覚しい地名を探り当てることはできない。

真田町は、信越本線上田駅から、国鉄バスまたは上田交通バスに乗って、北東部の山あいへ約四十分の行程にある。以前は、上田丸子電鉄の終点だったが、いまはその電車も廃止され、菅平への有料道路が通じて、殆どがこの町を素通りしてしまうようになった。真田一族発祥の地として、その名を現代にとどめる唯一の町も、いつしか、かくの如くに疎んじ去られようとしているのである。

真田姓については、この信州真田氏とは別に、桓武平氏の三浦一族の流れを汲む岡崎四郎義実の子義忠が、相模国大住郡真田村に住して真田与一と名のったとの伝承があるが、これとて、佐奈田余市が正しいとする異説もある。この真田与一は、治承四年（一一八〇）八月、源頼朝の挙兵に従い、石橋山の合戦に加わって討死したと伝えられ、歴史的には、それほど著名な人物であるとはみなされていない。

とすれば、奥信濃のこの真田の里に発祥をみた真田氏こそが、やはり、真田姓の祖としての由緒ある唯一の存在であるとみなければなるまい。

真田三代記

この松代の真田氏が、信州真田一族の実像であるとするならば、元和元年（一六一五）、大坂夏の陣に華々しく散華した真田幸村・大助父子は、その虚像であるということになる。

幸村は、幼名を源次郎、長じて信繁と名のった。現存する書状にも、自ら信繁と署名している。ただし、当人はどうであれ、幸村という呼称の方が後世への聞こえもよく、また、その人物像を偲ぶにも適しているようである。

出生は、永禄十年（一五六七）――。戦国争乱の真只中に生を享けたわけであり、若年より人質として父昌幸の許を離れねばならぬ定めを負わされてきた。

兄信之とは一つ違いで、この出生の一年の差が、真田家の実像として、また虚像としてのその後の生き方に影響をおよぼす結果となるのである。

だが、この実像と虚像とは、何故か、その虚実を裏腹にしたかの観を抱かせずにはおかない。

真田といえば、まず幸村を思い描き、松代藩十万石の大名を思い浮かべる者は皆無に等しいからである。

幸村の名を、いやがうえにも高からしめた書物として、大正年間、立川文明堂から刊行されて



松代にある旧真田邸

好評を博した『立川文庫』の存在を知らぬ者はないはずである。そして、その後も、織田作之助・富田常雄・村上元三・尾崎士郎・柴田錬三郎といった作家によって小説化されたり、映画・演劇の題材として用いられたり、さらには、最近流行の劇画にまで取り入れられたりといった実績が、ますますその声価を広めてきたことも事実であろう。

いずれもが、『真田三代記』を原本として、奔放な想像力を駆使した所産であるといえようが、幸村は、恐らく、そのいずれとも異なった人物だったにちがいない。

『真田三代記』は、江戸中期に書かれた戦記で、太平記読みによって語られたという『太平記』の成り立ちと、奇妙に似通った

ふしが感じられる。つまりは、俗にいう講釈調の荒唐無稽さで読者の心理を捉えようとする意図が覗えるのである。

が、しかし、幸村の名をより広く天下にゆき渡らせた効果については、この『真田三代記』の功は多とせずばなるまい。幸村の人気が、いまもなお一向に衰えをみせぬ由縁は、やはり、この書によって描かれた幸村のイメージが、容易には拭い去ることのできぬ強烈さで息づき続けているせいであると思えるのだから……。

真田幸村論

中野秀人氏の著作の一つに『真田幸村論』（昭和十三年作）がある。「散文自選集」の中に収められたこの作品は、一流の美学によって論じられた快作でありながら、いまだに孤立的な不遇を受け続けている。紹介をかねて、その一節を引用してみたいと思う。

——真田幸村の前には、強くなることも、忠義を尽すことも、覇業を遂げることも、治国平天下の道に殉ずることも存在しなかった。彼はただ、武人の面目を発揮しただけである。彼は、夾雑物なき純粋無垢の「武」によって立ったのである。そこには、彼の知性の自由と、戦場の美々しさと、スポーツマン・シップとを見ることが出来る。別な言葉で言えば、あの戦国時代に於て、闘争を本当に享楽することが出来るほど不敵であったのは、真田幸村一人であった。即ち、彼よりも強き武人は存在しなかったのである。彼にとっては、宗教も、道徳も、禅学も、精神の修養も、闘争を闘争とする武人の生活を糊塗するために必要としなかった。そのような真田幸村が

軍師であったのは当然なことではあるが、一つの彼にのみ与えられた特殊な運命を担ったことも当然であった——。

——天下無敵にして、しかも勝たない彼の使命！　勝たないことによって益々旺なる彼の「武」の芸術！　天下を取ることの代りに、「武」を取れるもの、それは、そこで「武」よりもより高き未知なる「武」となる。それは、かの戦国の諸将に引導を渡す種類のものであり、罪業をして消滅せしめ得る普ねき結句「アーメン」である。栄冠は、彼の上にある。そのような彼が、闘争日もなお足らざる時代に於て、またそれに次ぐ時代に於て、薄ぼやけた神秘のベールを被せられたことは、また当然と言わなければならない——。

『真田幸村論』は、こうした観点によってその論旨が貫かれており、今日、改めて評価しなおさねばならぬものを備えている。戦国時代を生きた幸村という人物の行為のなかに、意識せずして革命家の論理を展開しようとした革命論文学であるといえよう。

幸村は、確かに難解な人物であったに違いない。だからこそ、幸村という人物を描くには、ある種の妖怪味を負わせることによって足らざる部分を補う必要が生じたのだ。前述の『立川文庫』に、猿飛佐助が登場し、霧隠才蔵が登場したのはそのためである。

『真田幸村論』は、『立川文庫』のそうした記述とは対蹠的に、幸村の周辺に漂う「魔性」を流説ときめつけ、幸村を、「武」に徹した古今に稀なる英雄と看做すことでその論理を展開しよう

と試みたものである。

だが、このいずれの側の観点に立ったとしても、真田幸村の真の人物像は描ききれるものではない。幸村は、確かに、ある場合は「魔性」を漂わせた人物であり、また、ある場合は紛れもなく戦国武将中の英雄たるにふさわしい人物であったはずである。

とすれば、幸村には、まさしく「虚像の軍師」というイメージが最適である。そのイメージを基盤に据え、あくまでも大乗的な見地から幸村という一個の個性に託された真実を探り当ててみたいと希うのである。

軍師三代

信州真田一族

清和源氏の流れを汲む海野氏は、代々、信濃国小県郡海野郷に住したといわれ、戦国のころ、海野小太郎棟綱の子弾正忠幸隆が、小県郡真田庄松尾城に拠って、はじめて真田氏と称したと伝えられる。

海野氏は、信州滋野（しげの）一党の宗家である。海野・禰津・望月を滋野三家といい、滋野の祖が、清

和天皇の皇子貞保親王であることは、真田家の歴史として享保年間に編纂された『真武内伝』によって明らかである。

この滋野一党は、東信濃の佐久・小県（ちいさがた）の両郡に武威を広めるとともに、盲人・巫女・医師などとの関わりをもおろそかにはしなかった。滋野の始祖、貞保親王は、眼病の湯治のために信州に下向したと伝えられ、痛みは治まったものの視力はついに回復せず、土地の娘にかしずかれて、盲目のままにこの地に永住することとなったのである。

我が国では、古来、盲人と医術との関わりは深く、按摩術・鍼灸術とは切っても切れぬ間柄にある。同時に、盲人と妖術・呪術との関連をも見落とすわけにはゆかない。

とすれば、滋野一党が、祭政一致的・原始信仰的な施策によって盲人を支配し、信濃巫子の集団を統括したことが、ひいては忍術・妖術の類と結びつけることによって、真田一族のその後の歩みの難解さを解きほぐすための端緒とみなされたのかも知れぬのである。

幸隆が真田姓を名のったことについては、つぎに掲げる二つの説がもっとも真実味を備えているようである。

幸隆は、海野氏の第二十八代棟綱の二男で、兄幸義が海野家の嫡男として嫡流を嗣ぎ、真田庄へ分家した幸隆がその支族として真田姓を名のったという説がその一である。真田家の系譜を述べた『滋野世記』では、この説をとっている。

一方、『滋野三家系図』では、第十代海野幸氏の孫幸春が真田七郎と称したとあるところから、すでにその頃から真田姓が称えられ、海野家の有力な支族であった真田家へ、棟綱の女が嫁いできて幸隆を生んだとする説がとられている。つまり、幸隆は、棟綱の孫ということになるのである。

が、いずれにしろ、真田氏には幸隆以前には、とくに後世に名をとどめるほどの際立った活躍をみせた者がなかったためと、兄幸義が北信濃の村上義清と戦って討死したのち、幸隆が真田姓のまま海野の嫡流と称したために、その祖についての記録が抹消されてしまったのだろうと推察される。

以上が、真田一族の家系についての概略であるが、さきにものべた通り、真田氏が武門としての真骨頂を発揮するのは、戦国動乱期の訪れ以後のことである。すなわち、江戸中期に書かれた『真田三代記』の時代こそが、真田一族の真価を後世に伝える真の伝承であるというわけである。

真田三代とは、正しくは、幸隆——昌幸——信幸（のちに信之と改めた松代藩十万石の始祖）を指すはずだが、この『真田三代記』の記述ですら、すでに、幸隆——昌幸——幸村の三代を強く前面に押しだしている。つまりは、真田三代というより、軍師三代としての真田一族を描こうとした著述であることが察せられる。

真田幸隆

幸村の祖父真田幸隆は、永正十年（一五一三）の出生だが、これは、天正二年（一五七四）六十二歳で病死した時からの逆算である。前項でものべたように、幸隆は、海野棟綱の二男であるとも、また孫であるともいわれていて、その出生については明らかではない。幸隆の存在が、歴史的に明確に位置づけられることとなるのは、武田信玄の父信虎が、北信濃の村上義清・中信濃の諏訪頼重と和して滋野一党の東信濃に攻め入り、海野棟綱ら一族が上州の同族を頼って流浪する頃からのことである。幸隆は、この時、すでに齢三十に達していた。



真田昌幸画像

江戸時代初期の軍学書『甲陽軍鑑』に、「信玄公御家にて、信

濃に真田、上野に小幡、越後より来る大熊、是三人は牢人の大身とて、信玄公御取立なり」とあるのが、幸隆の、ひいては真田一族の活躍の出発点である。

甲斐の守護大名武田氏は、海野一族を上州に追い払った信虎が、その子晴信（信玄）によって当主の座を奪われ、その後の戦国動乱期への一大飛躍の端緒を切る。幸隆は、武田信虎によって旧領を追われ、その家督を奪った信玄によって浪々の身を拾われたわけであった。

幸隆は、旧領恢復の悲願に燃えて信玄につくし、信玄は、幸隆の才覚と手腕とを認めてその功に報いた。『真武内伝』では、幸隆招請の説得の使者は、武田家随一の軍師山本勘助だったとしている。つまり、信玄の幸隆重用の蔭に山本勘助の助言が如何に寄与したかを見落としてはならぬという含みが持たされているのであろう。

幸隆は、東信濃の地形・人心に通じた利点を活かして、進んで信玄の東信濃侵攻の先鋒をつとめ、武田家の謀将、あるいは策士という別称で呼ばれた。

謀将といわれた由縁は、彼の戦略が、常に後方攪乱、あるいは内部分断といった策によったためである。天正二年（一五七四）の没年までに、信州戸石城をはじめとして、上州岩櫃城・上州白井城等をおとすが、信玄側近の駒井高白斎の日記『高白斎記』その他の文献にも、悉く「乗っ取り」あるいは「奇襲」といった字句によって記されている。

しかし、戦国争乱の当時は、謀略によって敵方を陥れることは、必ずしも、幸隆一人が用いた

卑劣な策ではなかったはずだ。それだけ、軍智・軍略に長けていたとみるのが至当である。

幸隆は、川中島での山本勘助の戦死以後は、信玄にとって、最も頼り甲斐のある軍師として重用される。すなわち、幸隆は、信玄の信濃平定・上州進出の功労者として、数々の献策・武功を賞せられることとなるのである。

信玄は、天下統一の大望を胸に、元亀三年（一五七二）十二月、上洛の大軍を率いて遠江に入る。そして、三方ヶ原に徳川家康の軍を大破するが、壮図半ばにして病に倒れ、再起を期すべき帰国の途次に陣没する。

幸隆は信玄の死後、わずかに一年の余を経て病没する。信玄の家督を引き継いだ勝頼が、幸隆の身を案じて甲斐の名医僥倖軒を差し向けるが、わずかに小康を保っただけでその厚志は報われなかった。

真田昌幸

幸隆を謀将と呼ぶなら、その三男として信玄の側近に仕え、のちに真田の家督を嗣ぐこととなる昌幸には、どのような呼称を冠すべきであろうか。

昌幸は、天文十六年（一五四七）の出生から、慶長十六年（一六一一）、九度山配流のままに世を去るまでの六十四年の生涯を、文字通り戦国群雄割拠の真只中に過ごした武将であった。

幼名を源五郎といい、十一歳で人質として甲府に送られ、信玄の小姓から近侍となり、甲州の名家武藤の姓を与えられて武藤喜兵衛と称した。

信玄の在世中、昌幸は、その側近として再三にわたって重要な役回りを担ってきた。信玄からの信望も、また並々ならぬものであった。

従って、昌幸の地位は、武田氏の隆盛とともに次第に上昇の一途を辿るが、昌幸の軍師としての才は、そうした順調な信玄側近の時代よりは、むしろ、信玄の死後、武田氏が滅亡への第一歩を踏み出した頃から真価が発揮され始めることとなるのである。

信玄の死は、遺言によってその事実が秘められるが、武田氏の衰運は、次第に勝頼の身辺を慌しくさせはじめる。勝頼は、武田一族の総帥として、決して父信玄の器量におよばぬ人物ではなかった。だが、離叛烏合のただならぬ戦国の世の統率は、勝頼には、その若さの故に、まことに容易ならぬ荷の重さを覚えさせたに違いない。勝頼は、血気にまかせて父信玄から託された西上の夢を引き継ごうとしながら、次第にその雄図からはみ出していく結果となる。

天正三年（一五七五）、長篠の合戦で織田・徳川の連合軍に敗れた勝頼は、その衰運を建て直そうとして信濃各地の平定に力を注ぐ。一方、韮崎の要害に武田家の新たな居城を構えて、防備の策にも怠りのない態勢を敷こうとする。

昌幸は、勝頼を援けて、沼田・名胡桃両城の攻略を果たし、自ら甲斐に赴いて、新府城の普請奉行としての諸事にも手腕を揮う。

だが、武田の衰運は止め難く、策動・謀叛といった類の変事が跡をたたずに繰り返される。

天正十年（一五八二）、木曽義昌が織田に属して叛旗を飜したことを知った勝頼は、直ちに兵を率いて諏訪路を目指す。だが、怒濤の織田勢を喰い止める術はなく、一敗地にまみれて甲州の地に舞い戻らざるを得ないのである。

しかも、韮崎の新府城は、いまだに完成をみてはいない。勝頼には、もはや父祖の地を捨てて落ちのびるほかに道はなかった。

真田家の史書『古今沼田記』には、勝頼が新府城に火を放って遁れる途次に、小山田信茂の謀叛に遭って自害したことを伝え聞いた昌幸が、「御最期を見届けられなかったことが残念だ。私がついていたら、どうして小山田ごときの謀計に乗ろうか。御運の末とは言いながら、誠に不本意である」と歎いて涙を流したことが記されている。

勝頼は、昌幸の薦めに従い、織田軍の侵入を遁れて昌幸の居城上州岩櫃城に向かう手筈であった。そして、その変事は、昌幸が勝頼を迎えるべく上州に向けて先発した直後に起こったのである。天正三年（一五七五）の長篠の合戦で二人の兄（信綱・昌輝）を喪った昌幸は、すでに、武藤姓から真田姓に戻って真田家の跡目を継いでいたから、「真田は武田譜代の家臣ではない」とのそしりを、巧みに小山田信茂らに利用されたわけであった。

昌幸は、この変事を境に、強者には帰順、あるいは臣従の礼をつくしつつ、文字通り、戦国の一匹狼としての自立への道を歩みだす。武田から北条、さらには、徳川・上杉・豊臣へと目まぐ

るしく主家を変える。
昌幸が、『表裏比興の者』と呼ばれる由縁はそのためであろうが、列強に伍して孤城を保ち、父祖伝来の地と家名とを恙なく子々孫々に伝えるためには、やはり止むをえぬ手だてだったとみるほかあるまい。

真田信之

昌幸の長子信幸が信之と改名したのは、慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦が落着し、東軍の大勝によって、真田家が、沼田・上田領を安堵して後のことである。

信之は、永禄九年（一五六六）、甲府で生まれた。幼名は源三郎。幸村とは一つ違いの兄であり、松代十万石真田藩の開祖である。

祖父幸隆・父昌幸を、戦国争乱の最中（さなか）に明け暮れながら、その苦難のなかに真田家の武威を保ち通した軍師であったとみなすならば、信之は織田・豊臣・徳川によって果たされた天下統一の流れを乗り切り、その家系を現代に伝えた政略家であったとみるべきであろう。それは、正しく乱世における軍師の才と同等に並ぶべき事績であるとの見方をも可能にさせる。

とすれば、信之は、祖父や父から受けついだ軍師としての素養を活かし、時流を見極め、一族の歩むべき道筋を踏み誤らせぬ方向に、見事に軌道修正させた功労者であるといわねばなるまい。

勿論、信之には、武略の才そのものも充分に備わっていたという事例がある。父昌幸が武田氏

の滅亡によって自立し、徳川・上杉・北条といった強豪に挟まれて戦国の世を生き抜くなかで、止むなく上田城に籠って徳川の大軍を迎え撃つこととなった折、弱冠二十歳の若武者として、名だたる徳川勢を翻弄し、撃破した軍略の手腕が、まことに颯爽たる戦記として書き遺されているのである。

だが、その後の天下の形勢は、刻々と豊臣・徳川の世に移っていった。昌幸は、長男信之を徳川へ、二男幸村を豊臣へ出仕させる。いずれもが、人質としての暗黙の了意を負わされたものであった。

信之が、岡崎城の家康の許に出仕したのは、天正十七年（一五八九）の二月である。この時、信之は、ようやく二十四歳の春を迎えたばかりであった。

信之は、間もなく、家康の重臣本多忠勝の女（むすめ）を妻に娶った。徳川の忠臣としての信之の半生がここから始まるわけである。

父子兄弟が敵味方に分かれて戦うことは戦国の常だが、信之は、真田家の安泰のために、あえて昌幸・幸村と袂を分かつ。関ヶ原の合戦に先立つ上田城攻めがそうであるし、大坂冬の陣・夏の陣での徳川勢としての奮戦また然りである。

信之は、自らを圧え、「忍」の一事に徹することによって、あくまでも真田の家系を支えようとしたのである。しかも、家康の朱印状と引換えに、父昌幸、弟幸村の助命を乞い、九度山配流

後も何くれとなくつくすといった律義さをもみせている。
　この信之の生き方は、決して華々しく喧伝されるべき種類のものではない。幸隆・昌幸・幸村によって具現された真田一族の精いっぱいな生き方に比して、それは、如何にも不本意な地味な生き方であったに相違ない。が、それもまた、真田一族の軍師の才が歩ませた道であることは、やはり、誰しもが否定し難いことなのである。

京わらべ歌に見る幸村像

真打ち登場

　真田一族の名声が、東信濃地方の一豪族としての武名から、全国津々浦々に轟きわたるまでに拡大したのは、やはり、大坂冬の陣・夏の陣における幸村の活躍に負うところが大である。つまり、今日ふうな表現を用うれば、幸村の登場こそが、真打ち登場というわけである。
　幸村の若年時代は、戦国武将昌幸の二男としての不遇を一身に担ったとの観さえある。すなわち、幸村は、前述の徳川勢の上田城攻めに先立ち、上杉景勝との和を結ぶために、十九歳で人質

として上杉領海津城に赴いている。のち、上杉の本拠春日山に移り、景勝の新発田（しばた）攻めには、矢沢三十郎らの従者をその陣に参加させるが、天正十四年（一五八六）六月、上杉景勝上洛の隙に父昌幸に呼び戻され、再び人質として秀吉の許に赴くのである。
　つまり、幸村は、武田家没落によって自立の道を歩まざるをえなかった父昌幸の危機を、自らの身を人質という逆境に置くことによって、辛うじて切り抜けさせることとなるのである。
　武田勝頼滅亡直後の北条氏の東信濃への侵略に際して、すでに十六歳の若年で初陣を飾った幸村にとって、そうした現実が、如何に耐え難い日々であったかは想像に難くない。
　だが、幸村は、こうした不遇のなかにあって、戦国武将の子としての辛酸をつぶさに味わい、やがては、自らが不世出の武将として立つための礎（いしずえ）として、そうした体験のすべてが欠かせぬものであることを体得する。
　そして、関ケ原の合戦に先立つ上田城での見事な采配と、大坂冬の陣・夏の陣での縦横自在な軍師ぶりで、正しく真打ちとしての価値ある登場を見せるのである。

風貌姿勢

　「花のようなる秀頼さまを、鬼のようなる真田がつれて、退きものいたよ加護島へ」
　大坂落城間もない頃から、京童（わらべ）たちの間で歌いはやされたというこのわらべ歌は、当時の庶民たちの密かなねがいを籠めたものであった。当時の平戸商館長リチャード・コックスが、元和二年（一六一六）の二月に、英国東インド会社に宛てて書き送った便りに、「ある者は、

彼（秀頼）が逃れて、薩摩あるいは琉球にいると信じています」と記したことがその事実を裏づけている。

このわらべ歌では、期せずして、幸村のことを鬼のようなる真田と表現しているが、この表現を、単純に幸村の風貌を言い表わしたものであると解するのは誤りである。この鬼のようなるという言葉は、恐らく、大坂の陣での幸村の阿修羅の奮戦を、より現実的な実感として口伝えるための庶民たちの智恵から生みだされたものだったに違いない。

幸村は、兄信之の言を借りれば、「物ごと柔和、忍辱にして強からず。ことば少なにして、怒りはら立つことなかりし」性格であり、また、『肖像史料』その他に遺された容姿のどの一つからも鬼神のごとき猛々しさは感じさせない。

幸村が、小柄な「うそかじけたる風貌」の持主であったことは、史書にみられる表現の殆んどが一致して伝えるところである。また、その人柄についても、京都町奉行与力神沢貞幹の著になる『翁草』には、「生質屈僻ならず。常に交わるに笑語多く和せり」と記されている。幸村が、関ヶ原の合戦後、十四年間の蟄居生活を余儀なくされた高野山麓九度山の『九度山町史』も、幸村の人柄を同様なことばで評し、近村近在との交わりもよく、その事例として、清水村萱野孫四郎・名倉村木村忠政・隅田村葛原某などとの交友を掲げている。

要するに、幸村は、その体格や容貌には決して並みはずれた資質を思わせるものを持ち合わせて

はおらず、平時は鬼神と呼ぶにはふさわしからぬ平凡な好人物だったということなのであろう。

不思議なる弓取り

幸村の祖父幸隆は『謀将』と呼ばれ、父昌幸は『表裏比興の者』と言われたが、幸村自身は『不思議なる弓取り』という表現で評されている。弓取りとは、もちろん、もののふの意である。恐らく、幸村の柔和な人柄を知る者には、その戦場での目ざましい戦いぶりが、如何にも想像し難い不可解さであったに違いないのだ。



真田幸村画像

幸村が、不思議な魅力の持主であったことは、この一事のほかにも、容易にいくつかの事例を掲げることができる。

秀吉は、幸村が上杉景勝の上洛の留守に父

昌幸に呼び戻されて人質として出仕すると、景勝からの抗議には耳を借さず、幸村を自らの直臣として取り立て、豊臣家の近臣大谷刑部吉継の女（むすめ）をその妻として娶らせる。さらには、豊臣の姓を与えて「豊臣信繁」と名のらせ、のち、朝廷に奏して従五位下左衛門佐にも任官させているのである。

秀吉をして、このような措置に駆りたてた幸村の魅力とは、一体如何なるものであったか？　それは、単に、秀吉が、幸村の資質の前途有望さを見抜き、進んで恩恵をほどこそうとしただけのことだったとは受け取れない。

また秀吉の死後、風雲急を告げる大坂城への入城に当たって、九度山近在のすべての村の村人たちが和歌山城主浅野長晟の厳しい監視の眼を遮って幸村の脱出を援け、道筋に当たる町や村の人々が挙って幸村のための支援を惜しまなかった由縁についてもいえることなのである。わずかな人数で九度山を出立した幸村の一隊が、大坂入城の折には数千を越える軍勢にふくれ上がっていたばかりか、甲冑・槍・弓矢の類から騎馬までが整っていたという事実が果たして何を意味するものであったか？

『不思議なる弓取り』とは、恐らく、こうした幸村の人気の秘密といったものに対する言外の比喩をも含んだ呼称だったのではないだろうか。

そこには、史料としては書き遺すことのできぬ奇妙な幸村への羨望といったものが籠められて

おり、幸村の人気が、いまもって巷間に衰えをみせぬいわれも、あるいは、幸村のその不思議な魅力によって醸しだされた虚像の中の真実であるかも知れぬのである。

わらべ歌の真情

古来、庶民たちの描く英雄像には、つぎに掲げる重要な三つの要素があると言われる。

その一つは、優れた才能を備えているということであり、その二つは、私利私欲に走らぬということであり、その三つは、悲劇的な最期をとげるということである。

建武の中興の楠木正成がそうであり、源平の合戦の源義経がそうであり、島原の乱の天草四郎や、西南の役の西郷隆盛また然りである。

庶民たちは、こうした英雄たちの最期に無上の感動を味わいながら、その感動の根源を覆すかのごとくに、彼らが、実はその滅亡の危機を切り抜け、密かに国外に脱出したり、あるいは、人知れぬ隠れ里に落ちのびたりして、その余生を保ったといったふうな流説を編みだそうと試みるのである。

幸村が、大坂落城後の秀頼に随行して薩摩に下ったとする説も、もちろん、こうした妄説の一つに過ぎぬが、それが、大坂落城の直後から、いち早く「わらべ歌」として歌われたということは、やはり、庶民たちの秀頼に寄せる同情と、幸村に対する憧憬の念が、如何に大きなものであったかということを示すバロメーターともいえよう。

『真田三代記』では、幸村は、薩摩へ落ちのびた翌年、長年の辛労がたたって幾度となく血を吐き、秀頼らの手厚い看護を受けながら永眠したということになっているが、これでは、却って幸村のありし日の奮迅の活躍ぶりが減殺されることとなる。

つまり、この京わらべ歌は、幸村に対する庶民たちの秘めやかな真情を、子供たちの口から口へと歌い伝えるために、名もなき町の歌詠みが創りあげた幸村への詠嘆であったとさえ受け取れるのである。

六文銭覚書

真田家の家紋六連銭は、天正十年（一五八二）、幸村の父昌幸によって改められたものである。しかも、それは、幸村の華々しい初陣を讃えるものでもあった。

幸村の初陣

真田父子の軍勢は、武田氏が滅亡した天目山の戦いには参加していない。というよりは、勝頼は、小山田信茂の謀叛によって笹子峠を遮られ、あえなく妻子とともに自害して果てたのである。昌幸が、勝頼を自らの居城に迎えるべく、一足先に韮崎の新府城を発っていたことは前述し

たとおりである。小山田謀叛の報に接した昌幸は、急遽兵を返して天目山に馳せ参じるが、すでに合戦には間に合わず、止むなく上田城に引き揚げることとなるわけである。だが真田父子の四囲には、徳川・織田の連合軍のほかに、北条・上杉といった武将の悉くが合流した敵となって殺到してくる。『真田三代記』は、このくだりをつぎのように記している。

――ああ、是非もなし、武田の微軍人力のおよぶところにはあらず、と昌幸大いに歎じければ、幸村それを聞きて、父君には如何なれば斯く怖れ給ふぞ、某しを以て観る時は、上杉は小勢なれども破り難く、北条は多勢と雖も群集蟲の如し、只一戦に破るべし、と申ければ、昌幸大いに悦び、夫より無紋の旗六旒を取出し、北条方松田尾張守が紋所の、永楽通宝の銭形を画せ置き、其夜子の刻に吶と鬨を揚て北条の陣へ夜討を掛けしかば、北条方大いに駭き、素破や夜討ぞ、と見れば、松田が定紋なれば、扨は尾張守謀反せしと犇きける程に、陣々大いに騒動して、同士討相討上を下へと返しける、仕済したりと、真田は兵を纒めて、此紛れに道を開き、上田を指て帰りける、北条勢は、真田が謀計とは夢にも知らず、狼狽まはりて小田原へと引取けるこそ愚なれ、扨も昌幸は、まだ妙齢なる幸村が、知謀を以て、上杉・北条が大軍の囲を解て、易々と上田へ引籠りければ、昌幸大に感じ、幸村初陣に、僅四百余人にて、北条が四万五千を破りし事、前代未聞の功なれば、今より此吉縁に因みて、我

家の紋所は、持出せし六旒の永楽銭を象り、是までの定紋なる雁金の外に、六連銭に改めんと、弥々是を定紋とは為たるなり——。

この一節が、幸村の軍師としての非凡の才を、如何に如実に示したものであるかは多言を弄するまでもないことである。時に、幸村は、ようやく十六歳の春を迎えたばかりであった。

六文銭の紋所

真田一族との関わりなくして、六文銭を定紋とする家は皆無であるとさえ言われている。六文銭（正式の呼称は六連銭）は、家紋としては、それほどに珍しいものであるともいえそうである。

例えば、伊達家の家臣で六連銭を紋所とした片倉家は、大坂の陣に加わって武功を立てた片倉小十郎が、幸村の女（むすめ）を捕えて妻となし、武名を天下に轟かせた義父幸村にあやかって家紋を六連銭にかえたといわれているがごときである。

高野山麓九度山町の真田庵の門扉には、今も木彫りの六連銭の紋が形取られており、門内には、その六連銭の紋所の由来を記した掲額が掲げられている。

幸村は、この六連銭を旗指物として常に用い、大坂の陣では、赤胴・赤備えの武具に合わせ、六連銭の赤指物を飜して、縦横に戦場を疾駆したのだ。

すなわち、幸村の行くところ、赤地に染め抜かれた六連銭が火の如くに燃え盛り、大坂城平之

口の真田丸は、さながら、満開のつつじに埋めつくされた丘陵を見るかのように色鮮かであったといわれる。

家康は、幸村のために、再三にわたって、あわや切腹という窮地に追い込まれている。とすれば、六連銭の紋章を、眼に触れただけでも嘔吐をもよおすほどに毛嫌いしたとしても不思議はない。にも拘らず、家康は、松代藩十万石真田家の定紋については、その後も一切口をさし挟もうとはしなかった。松代藩主真田信幸が、信之と改名せざるをえなかった事実と考え合わすと、いささか腑に落ちかねることではあるが、これは、家康が、幸村の指物の赤い色彩に幻惑されて、その紋所である六連銭そのものは見過ごしてしまったためであろうと推察される。

恐らく、幸村は、かくあろうことを予知した上で、抜け目なくその旗指物の色を赤く染め換えておいたに相違ないのだ。

かくして、六文銭の紋章が、家康の権威によって抹殺されることなく今日にいたったことは、「六文会」なる組織の誕生とともに、何よりも幸いなことであったと喜ばずにはおれぬ思いがする。

真田紐

六文銭の紋所とは別に、真田一族とのゆかりにおいて今日にいたったとされるものに真田紐があることを忘れてはならない。

真田紐とは、縦糸を細く、横糸を太くして平織または袋織にした幅狭い木綿紐で、しっかりと

したその締まり工合が刀の柄巻や下げ緒に最も適し、また、帯締めや箱紐としても喜ばれる品の一つである。

『立川文庫』などによる俗説では、幸村は、農耕のかたわら、従者たちにこの紐を編ませて行商をさせ、牢人生活に余念のないふうを装いながら諸国の動静を探っていたとされている。

この真田紐についての伝承としては、『本朝世事談綺』に、「天正の頃、浪人時代の真田昌幸が、木綿の打糸を用いて自らの大小の柄を巻き、世人はその木綿の紐を真田打と称した」とあるのが興味深い。

また、『腐饞集』では、「啄木の紐の紃は、彼の鳥の木をついばみたる形をうつしたり。乱世略して永禄の頃、木綿渡りて後、木綿にて緘したり。然るに、信濃上田城主真田安房守昌幸、慶長五年関ヶ原合戦後、高野の九度山に其の子左衛門幸村とともに牢人の時、正宗の刀、貞宗の脇差を彼の木綿の啄木にて柄を巻きたるを、世人真田糸と唱えしより、真田の俗称となれり」と、かなりな詳細さで書き記している。

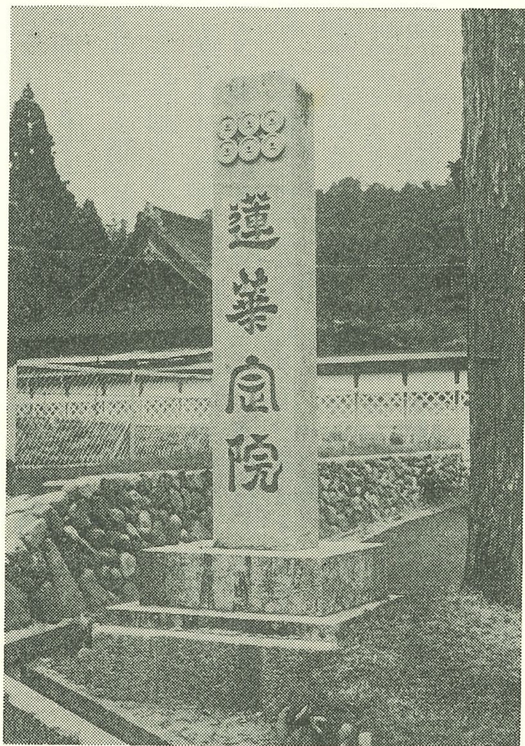
いずれにしろ、昌幸・幸村父子と真田紐との間には、やはり何らかの関わりがあったはずで、九度山閑居のつれづれに、故郷の信濃地方で作られていた紐を改良し、平紐にして用いたというのがその由来なのではないだろうか？

幸村の佩刀

昌幸が、正宗・貞宗の大小を帯したことは、他にもそれらしい伝承がある。

大坂の陣に先立ち、幸村が密かに大野治長の邸を訪れた時のことであるが、幸村のその折の風体が山伏のようにみえたために、番所の若侍たちは、幸村を待たせたまま、その来訪を取り次ぐこともなく刀の目利きをし合っていた。中の一人が、「和僧の刀も見せられよう」と言って幸村の刀の鞘を払い、余りの見事さに驚いてその柄を外すと、刀には正宗、脇差には貞宗と刻まれた銘があった。

大坂城中から退出してきた治長がこの話を聞き、さてはと気づいて幸村を招じ入れ、ただちにその旨を秀頼に報告する。のちに、秀



六連銭の寺紋がある蓮華定院の標柱

頼の使者速水甲斐が、黄金二百枚・銀三十貫を携えて幸村の許を訪れるきっかけとなった逸話とされているが、いささか史実とは異なるようである。

しかし、幸村ならば、恐らくかくもあろうかと思われる話で、如何にも、江戸時代の講釈として創りだされた物語らしいという思いがする。

幸村が昌幸の死後、父の遺品として正宗・貞宗の大小を引き継いだことは事実であろうが、水戸光圀の訓話をまとめた『西山遺事』にも、つぎのような話が遺されている。「真田左衛門信仍（幸村）は、東照宮（家康）へ御敵対したはじめから、村正の大小を常に身を離さず差した。そのわけは、村正の刀は徳川家へ祟るという説を聞き、当家調伏の心でそうしたのである。士たるものは、ふだんから真田のように心を尽くしたいものである」というのである。

正宗にしろ、貞宗にしろ、あるいは村正であるにしろ、我が国の刀剣としては最高級の逸物であることは紛れもない。

いずれにしても、昌幸・幸村父子が、九度山蟄居の生活のなかで、つねに銘刀を帯して、雌伏していたさまが窺える話である。

楠兵法と真田兵法

真田流軍学

この軍学の祖であるという光明院は、幸村の落胤と称した僧であるが、武田家の事績や軍学を述べた『甲陽軍鑑』を否定して、真田一族には、独自の軍学があったことを説こうと試みたようである。

だが、真田の兵法が、楠の兵法との類似を否定できぬように、この『甲陽軍鑑』からの影響をも否定することはできない。

真田の兵法とは、いわばゲリラの戦法である。小勢をもって、多勢を惑わし、わずかな隙をついて、ある種の雪崩現象を誘発するところにその真価が発揮される。武田信玄が、信濃の謀略に幸隆を用い、山本勘助にかわる軍師として昌幸を抜擢したのは、その真田の軍略を存分に活かすためであったと考えられる。とすれば、武田の軍学は、すなわち、真田の軍学であるということに外ならぬはずである。

そもそも、この光明院という者が、幸村の落胤であったという説自体が眉つばもので、一説で

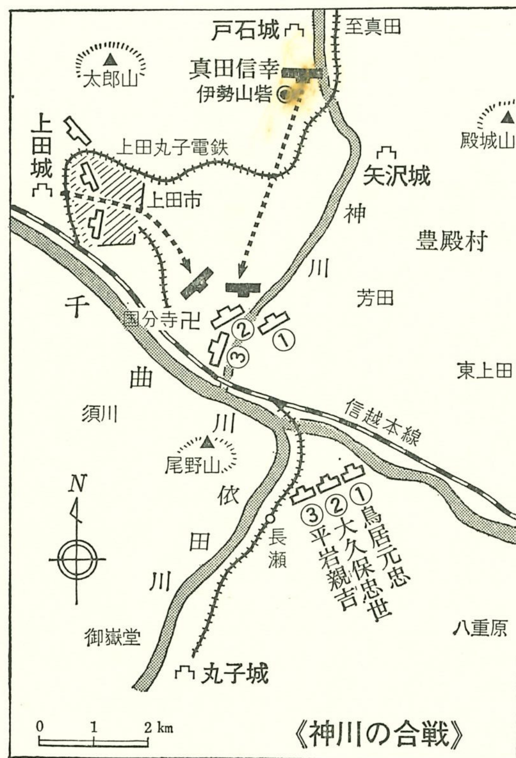
は、真田のわっぱ（召使い）に過ぎなかったともいわれている。従って、真田の子であるがために、武士にはなれずに僧になったという話も怪しい作りごとに思えてくる。
つまりは真田流軍学なるものも、果たして軍学としての存在を認めるべきものであるか否かについては疑問があるということになるのである。

甲陽軍鑑

これに対して、江戸時代初期の軍学書として、全二十冊におよぶ『甲陽軍鑑』は、甲斐武田家の晴信（信玄）・勝頼の事績や、合戦・軍法・政治・武士道について述べた書として、その信憑性は充分である。
この書の成立については、武田家の重臣高坂昌信の著述が、二、三の後継者によって書きつがれ、甲州軍学中興の祖といわれる小幡景憲によって完成したと見る向きが多く、寛永年間（一六二四〜一六四三）には、すでに木版書として刊行され、その後、江戸時代を通じて、武家必読の軍学書の一つとして重用され続けたものである。
ここでは、武田はいうにおよばず、織田・徳川・上杉・北条といった諸将が、さまざまに鎬を削り合うさまが述べられてあるが、もちろん、真田についても、かなりのスペースをさいて、その活躍ぶりに触れている。ただし、幸村については、その生年の年代のずれのために、ほとんどその活動の場が与えられずに割愛されてしまっている。

楠公遺訓

『真田三代記』が、『太平記』との比較によって論じられることが多いのは、真田一族の戦術が、楠正成の赤坂・千早での戦術に、多くの共通点を見出しうるからであろうと思われる。
そうした観点に立ってみるならば、確かに大坂夏の陣における幸村の討死は、湊川における楠正成の討死と一致する状況下にあったといえよう。
だが、幸村と正成とは、必ずしも軌を一にした死を選んだわけではない。もし、幸村が湊川の合戦を戦ったとすれば、その結末は、いささか異なったものとなって、あるいは、あの南北朝の歴史は書



《神川の合戦》

きかえなければならなかったかも知れない。何故なら、正成は、南朝方へのひたすらな『忠』のために死を選んだが、幸村は、自らの『武』に徹するがために死を選んだからである。幸村のことを、「豊臣への孤忠の臣」と解する思考は、明らかに後世のでっちあげであるとみるほかはないのだ。

正成は、元・亨・利・貞の四巻におよぶ『楠公遺訓』を遺している。正成自らが筆を執って書したるもあり、軍用秘術の伝授として語り聞かせた教えもあり、また、恩地・和田といった重臣の問いに対して答えたものもあるが、いずれもが、楠兵法の何たるかを解いた軍学書であることは間違いない。

幸村が、四百余騎の小勢で四万五千の北条勢を破った初陣の策は、この『楠公遺訓』のなかの「寄手の紋付きたる旗を作りて、味方の旗と交へて立てよ。寄手互に疑ひて、味方の中に謀叛人あり、と思ふもの也」という戦法を用いたものであり、天正十三年（一五八五）八月の徳川勢の上田城攻めに、昌幸が、その大軍を、十二分に城下に引き入れて火を放ち、その退路の伏兵に矢・鉄砲の雨を注がせて散々に打ち負かした軍略は、「剛敵に向ふ時は、敵を町へ誘入れて、四方より火を以て攻めよ。敵の落つべき地を察して、備へを設けて是れを討つべし」との火戦法の教えによったものである。

その後、昌幸・幸村父子は、関ヶ原合戦の折の上田城の囲みの時にも巧妙な戦法で秀忠の大軍

をたぶらかし、幸村は、さらに、大坂の陣においても、再三にわたって家康の本陣を脅かすといった戦略を駆使している。

つまり、昌幸・幸村父子は、楠兵法の研究者として、かなりな研鑽を積んでいたという見方も成り立つのである。

しかし、真田の兵法が、楠兵法の単なる模倣に過ぎぬという説には賛成しかねる。すなわち、真田の兵法は、楠兵法の長所を取り入れ、真田一族の軍師としての独創的な機智を加えて、その独自性を、明確に位置づけた兵法であるとの見地に立って論ずる必要があろうと思う。

真田軍記

真田藩士の手によって書かれた戦記に『上田軍記』がある。しかし、この『上田軍記』は、大久保彦左衛門の『三河物語』をもとにして書かれたもので、真田一族の活躍に焦点を合わせた純然たる軍記物語ではないようである。その書名を、『真田軍記』とはせず、『上田軍記』とした理由もそのあたりにありそうである。

信州上田は、上田盆地の中心部に位置し、那須火山地帯からの延長台地のはずれにあって、千曲川の右岸に沿った古代からの交通の要衝である。天正十一年（一五八三）、真田昌幸は、この要衝に上田城を築いて、初めて戦国大名としての自立を果たす。

その意味では、上田は、確かに真田氏とは切っても切れぬ因縁の土地だが、昌幸の嫡男信之は、徳川幕政下の大名としての地位を確保すると同時に松代への転封を命じられてこの地を去

る。そして、その後は、仙石・松平の両家を経て明治維新にいたるのである。
しかし、上田の地名から仙石・松平の両家を思い浮かべる者はなく、上田は、やはり、真田氏の城下であったという印象のみが強烈である。
さて、この『上田軍記』によれば、天正十三年（一五八五）八月、「上田城ごとき何するものぞ。只一もみにもみ崩してくれん」とばかりに攻め寄せた七千余騎の徳川勢は、まんまと昌幸の作戦に引きずり込まれて敗退する。
昌幸は、城下町のいたるところに柵を設けて迷路を形どり、火をかけ、伏兵を忍ばせて、散々に徳川勢を傷めつける。しかも、折からの増水を利用し、地形にうとい徳川方の群兵どもを、千曲川の支流神川の急流に追い落として溺死させるという戦術をも用いて損害を増大させる。これが、数少ない徳川軍の敗戦の一つ神川の合戦の顚末である。
徳川勢は、上田城手強しとみて、その支城丸子城を陥れようとして兵を動かすが、その側面や背後から、自在に襲い掛かっては引き揚げる真田勢の陽動作戦に遭って動きが取れず、ついに、その支城一つをも陥しえずして兵を収める。
いくさ上手の秀吉でさえ持て余したといわれる徳川勢を、寡兵よく本国に追い返した真田の武名が、この一戦によって天下に知れ渡ったのは当然であり、真田の兵法は、その武名の高まりとともに脚光を浴びることとなるのである。

表裏比興の者

昌幸の汚名

徳川との一戦によって、真田の武名は広まるが、同時に、昌幸には、「表裏比興の者」という汚名が冠せられる。
武田氏の滅亡によって自立した昌幸は、確かに、変幻自在にその去就を変えて憚らなかった。しかし、戦国群雄のなかの弱小豪族にとって、それは、当然の自衛策ともいえることなのである。「比興」とは、不都合との意であるが、その程度のことなら、誰しもが身に覚えのあることである。秀吉にしても、そうした不都合な行為を、幾度となく繰り返してきたからこそ、当時の権勢にまでのしあがることができたのではないのか。にも拘らず、どうして昌幸だけがそうした悪評を浴びなければならないのか？
信之・幸村兄弟は、父昌幸の汚名を、何としても雪がねばならぬと思った。二人にとって、父昌幸は、まことに頼り甲斐のある才気に長けた存在だったからなのである。
真田の家は、父のこの才覚による以外に保ちうる方策はなかったに違いない。昌幸が、武田氏

の滅亡以後、織田から北条へ、北条から徳川へ、徳川から上杉へ、そして上杉から豊臣へと渡り歩いたと見るのは、余りにも一面的な誹謗である。その証拠に、昌幸は、決して謀叛を企てたり、主家を奪おうと策したりしたわけではないのだ。上田城での徳川勢との一戦も、家康が北条氏と和を結ぶために、武田の旧領を分与すると称して真田の所領を北条氏に引き渡させようとしたことから持ちあがった争いである。いわば、昌幸が、家康と対等の立場に立って、父祖の地を守ろうとしたための不和なのである。しかも、彼我の勢力の格段の差異にも臆せず、一孤城によって大軍を迎え撃った昌幸の毅然さを、誰よりもよく身に体し得たのは彼ら信之・幸村兄弟だったのである。

だが、この一事に対する二人の受止め方は、必ずしも全く同一であったとはいい難い。汚名を雪ごうとするその思いは、いずれ劣らぬ堅いものであったとしても、そのために、それ以後歩もうとする道筋は、すでに、その時点で全く相反する方途を指向していたのかも知れない。

すなわち、信之は、真田が、決して表裏者でないことを立証しようとするかのように家康への忠節を励み、幸村は、昌幸とともに、最後まで家康に対する意地を張り通そうとしたのだから……。

犬伏の別れ

群雄割拠と下剋上に揺らぎ続けた戦国の世相は、織田信長・豊臣秀吉の出現によって、次第に天下統一の方途に傾きつつあるかにみえた。時には残忍極まる荒療治に

よって顰蹙(ひんしゅく)を買った信長ではあったが、その信長を本能寺に滅ぼした明智光秀の行為を是とするものはなく、光秀は、わずか十一日間の天下人としてその生涯を閉じる。

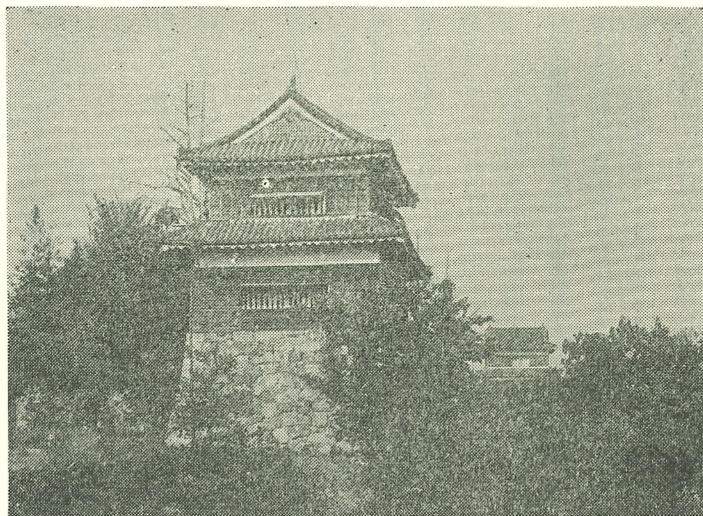
そうした世相の動きを見極めながら、昌幸は、長男信之を家康の許に、二男幸村を秀吉の許に出仕させて真田の家を保ったのである。信之が、家康の重臣本多忠勝の女(むすめ)を、幸村が、秀吉の近臣大谷吉継の女を妻としたのは前述の通りである。

天正十八年(一五九〇)二月、秀吉は、大兵を動員して北条氏の本拠小田原城を攻撃した。北条氏が、秀吉の裁定を破って、真田昌幸の所領名胡桃城を奪ったことがその因である。

秀吉にとっては、この小田原の北条攻めが、国内平定の総決算ともいうべき戦いであり、事実上の天下統一への最後の仕上げだったわけなのである。秀吉は、その後、文禄元年(一五九二)、慶長二年(一五九七)の二度にわたって朝鮮半島に出兵し、その気宇の雄大さを誇示しようとする。

その結末がどうであれ、諸大名の眼を海外に向けさせたことは、ある意味では、国内での内紛の火を鎮めるための効果をみせたことは事実であろう。つまり、秀吉は、国内統一の余力を駆って海外に派兵したわけではなく、海外への派兵という非常手段によって、国内平定の悲願を達成しようとしたのかも知れない。

が、いずれにしても、秀吉は、この慶長の役の最中(さなか)に六十三歳で病没する。後事を五大老・五



真田氏の居城，上田城

奉行に託して大往生した秀吉は、見事に天下平定の偉業を果たしたかにみえて、その実、天下を二分して相まみえる関ケ原合戦への、その後の動きを予知し得なかったわけなのである。

秀吉の天下から家康の天下へ、歴史は、必然の赴く方向に向かってその流れを変えていった。

家康は、信長に譲り、秀吉に譲ってきた天下人への悲願が、秀吉の死によって、自ずと手の届くところにまで近づいたことを悟っていた。

家康には、何としても己の眼の黒いうちに徳川の天下を不動のものにしなければならぬという執念があった。だから、この時期の家康は、およそ家康らしからぬ無理難

題の数々を諸大名に対して吹っかけている。

上杉景勝に謀叛の企てありとして、その上洛を促した家康の要請も、実は、その無理難題の一環として策した陰謀で、いわば、家康の方から売った喧嘩だったのだが、家康は、上杉征伐のための名分を、巧みに諸大名たちの間に煽り立てることを怠らなかった。

慶長五年（一六〇〇）五月、家康は、諸大名に会津への出兵を命じ、自らも兵を率いて江戸に下る。関ケ原合戦の導火線となった石田三成の挙兵は、この家康の東下の隙をついて行なわれたものである。

三成の密使は、家康の罪科十三条を掲げ、秀吉の遺児秀頼への忠節を促した書状を携えて諸国に飛び、上杉討伐の軍に加わって下野国犬伏に到着したばかりの真田父子の陣へも届いた。

真田父子の避け難い別離は、この出征途上の犬伏の地において決せられる。時に、慶長五年（一六〇〇）七月二十一日のことであったといわれる。

人払いをした離れ家に閉じ籠った真田父子は、長時間にわたって真田一族の浮沈をかけた談合を重ねた。余りの長さにしびれをきらした重臣の河原綱家が、そっと離れ家のようすを覗こうとしたところ、昌幸は、「誰もくるなと命じておいたのがわからぬのか」と怒って下駄を投げつけ、綱家は、それを顔に受けて前歯を折ったと伝えられる（『河原綱徳家記』）。

父子三人の間では、さまざまな激論が交わされたに違いない。成り行き次第では、真田の家は

滅亡の淵に追い落とされぬとも限らぬのである。

が、しかし、昌幸・幸村は三成に応じ、信之は家康の許に止まることで態度は決した。幸村は、父昌幸とともに陣を引き払って上田城へ立ちもどることとなるのである。幸村のその後の虚像の軍師としての半生は、実に、この時にその第一歩を踏みだしたわけなのであった。

上田城の攻防

三成の挙兵に応じることが決まると、昌幸・幸村父子は、一刻も早く徳川勢から遠ざからねばならない。上杉討伐の軍に加わった諸大名で、三成に与しようとした者は、昌幸・幸村父子を除いては、誰一人としてなかったのだから尚更である。

一方、信之からは、父昌幸が石田方に加わるべく陣を引いた経緯が、ただちに家康に報じられることになっていた。もちろん犬伏の陣で協議を重ねた結果の措置である。こうした手だてを取らぬかぎり、信之の立場は、この窮状を切り抜けることができぬとの判断からであった。

真田の支城沼田城は、犬伏からおよそ二十里の距離にあって、昌幸が、長男信之にその支領を委ねる形で分与してあった居城である。昌幸・幸村に率いられた軍勢は、強行軍に次ぐ強行軍を重ねた末、その日の夜中に沼田城に辿り着く。だが、沼田城は、固く門を閉ざして昌幸の軍勢を入れようとはしない。昌幸の家臣は怒って、「大殿の御帰りと知りながら城門を開かぬとは何事ぞ。いざ、押し破って通って見せようぞ」とわめいた。信之の妻小松殿が、甲冑を帯し、薙刀を構えて、いざ一戦という気概でそれに答えた。「門を開けというは何者ぞ。殿は、主君家康公の

お供でご出陣中じゃ。その留守を狙って狼藉を働こうとする者は全て曲者。女といえども城主の妻、本多忠勝の娘ぞ。押し入らんとする者は、一人も洩らさず討ち捕えよ」と下知したのである。

昌幸は、やむなく家臣たちを制して、「城主の留守に城を奪おうと申すのではない。久方ぶりに孫共の顔が見たくて上田への帰途に立ち寄ったまでだ」と呼ばわり、そそくさと信之の長子孫六郎（のちの沼田藩三万石藩主信吉）・次子内記（のちの松代藩十万石第二代藩主信政）との面会を済ませて沼田を発った。

のちに、戸川残花によって書かれた『三百諸侯』の真田藩の項には、この折のいきさつがかなり詳細に記されている。また、『真武内伝』や『慶長記』などにも似たような記載があるから、恐らく、沼田での状況はその通りだったのだろうと思われる。

さて、上田城へ帰った昌幸・幸村父子の許へは、続々と三成方西軍の諸将たちからの書状が届けられる。それらの書状は全て西軍方の当たるべからざる勢いの強さを述べているが、昌幸父子が、上杉討伐の軍勢の中から、徳川勢に背を向けた唯一の孤立部隊であることを思うと、さらに西進を続けて西軍方に合流することも適わず、上田の孤城を死守したままに、その天下分け目の合戦の結果を待つほか策はなかった。

九月二日に小諸城に入った徳川秀忠の大軍は、家康の本隊と合する道すがらに、一挙に真田勢

を撃破すべく上田城に襲い掛かったが、その思惑とは逆に、昌幸・幸村の果敢な攻撃に遭って、死傷算なき敗戦に陥れられて天下分け目の関ヶ原の合戦にも間に合わぬ態たらくとなる。

『上田軍記』には、逃げると見せかけては襲い掛かり、火をかけ、矢を放ち、流れの堰を切る等々、幸村の軍師としての秀でた指揮ぶりが生々と描かれている。希代の名将幸村の名は、徳川方の陣中にも、たちまち、疾風のごとくに広まり高まって行ったのである。

関ヶ原合戦始末

信長・秀吉によって描き継がれてきた戦国絵巻の終章・乱世の総決算への長い道は、この関ヶ原の合戦によって一応の決着をうるのであるが、東軍の勝利と西軍の敗北が、吉川広家・小早川秀秋という二人の毛利陣営の大名の寝返りによって果たされたことは皮肉である。西軍の総大将が毛利輝元であったことを考え合わすと、この二人の東軍への内応、西軍への謀叛の真意は合点がゆかぬが、家康との間に、「毛利輝元は見捨てない。毛利の領国は安堵させる」との誓書が交わされていたとすれば、やはり、その行為もうなずけなくはないであろう。つまり、彼らは、不安と不信の戦国以来の乱世に、最後の打算と反逆を弄して終止符を打とうとしたのかも知れない。

いずれにしても、家康は、この東軍の勝利によって、ついに事実上の天下の覇権を掌中にしたのである。だが、家康は、なおも焦らず、この関ヶ原合戦の根源ともいうべき秀頼の存在を許容した。

関ヶ原合戦後の論功行賞で、家康が、東軍に加わったすべての大名たちに、驚くほどの大盤振舞を見せたことは周知の通りである。

真田信之が、父昌幸・弟幸村の徳川方への反逆にも拘らず、その挙に従わなかった忠節を賞され、真田家の本領上田並びに沼田領を安堵されたのは、いうまでもなく家康のその大盤振舞の一半だった。

しかも、関ヶ原合戦の敗戦を知って、やむなく上田城を明け渡した昌幸・幸村父子に対しても、切腹あるいは斬罪といった極刑は科さず、信之の功にかえて、わずかに高野配流という寛刑をもって酬いたに過ぎない。

犬伏の別れに際して、昌幸・信之・幸村の三者が、関ヶ原後の家康の処置を、そこまで読み取っていたかどうかは不明である。恐らく、昌幸たち三人の父子は、激論の末に、東軍・西軍のいずれが敗れると仮定しても、真田家を滅亡させることだけは免れるであろうという程度の結論を得て、あえて、身を裂く思いで互いの離散を認め合ったのではあるまいか？

昌幸・幸村父子が、いよいよ高野に赴くと決した時、信之との対面を許された昌幸が、怖し気な眼からはらはらと涙を流して、「さてもさても口惜しき事かな。内府（家康）をこそ、このようにしてやろうと希うておったものを」と語ったという『真田御武功記』の記述からも、そのことが察せられそうな気がするのである。

だが、幸村には、あるいは、この結末が読み取れていたのかも知れない。いや、それのみならず、大坂冬の陣・夏の陣に到るその後の自己の歩みや、兄信之によって確立される真田藩の行く末についても——。

真田庵縁起

九度山詣で

昌幸・幸村父子は池田長門以下十六名の従者を従え、その年の暮れに高野山一心院谷の蓮華定院に入っている。この蓮華定院と真田家とは、幸村の祖父幸隆が真田姓を名乗る以前から師檀関係を結んでおり、真田家では、高野参詣の時には必ずこの院に宿泊し、日牌・月牌などもこの院に納めることにしていたと言われている。

『蓮華定院』と彫られた門前の石造りの標柱には、六連銭の真田家の定紋が刻まれ、堂内には、『真田坊』と称される仏間や『真田の間』と呼ばれる座敷などが、さながら昔日の姿を偲ばせるかのごとき佇いのまま保存されて現在にいたっている。

高野山は、女人禁制の土地でもあり、妻子や家臣を伴った配流者の一族を、そのままいつまでも院内にとどめておくわけにはゆかず、昌幸・幸村父子は、間もなく山麓の九度山に敷地を与えられて移り住むこととなるのである。

流人とはいいながら、そうした寒村での暮らしぶりは村人たちとのつき合いもあって、簡素ながらも、どこかのんびりとしたゆとりがあったようである。

信之をはじめ、国許にとどまって真田家を安堵した近親者たちは、昌幸・幸村父子に対して、必要な金品を送ったり、書状によってその蟄居生活を慰めたりして礼をつくした。また、家臣のうちにも、わざわざ九度山まで出向く者があったりして、真田家の「九度山詣で」という言葉さえ生まれるといった按配であった。

『九度山町史』や『真田庵略縁起』などの記述によると、この昌幸・幸村父子の九度山への蟄居は、関ケ原合戦での三成方への加担によって科せられた流罪であるとは記されていない。上田城を徳川方に明け渡した真田父子が、家康の視野から身を潜めて、その後の天下の動きを見極める機会をうるためにこの地に逃れ住むことになったとしている。

しかし、事実は、恐らくそうではあるまい。信之の妻小松殿は、徳川の重臣本多忠勝の女(むすめ)であるし、和歌山城主浅野長晟や高野山門主なども怠りなく監視の眼を光らせていたのだから……。

真田屋敷

和歌山県伊都郡九度山町にある善名称院真田庵は、真田家の菩提寺であるとともに、高野山蓮華定院の末寺でもある。これは、また、真田昌幸居館のあとであるともいわ

れ、昌幸・幸村・大助三代の霊を祀った真田地主大権現を併置したこの尼寺の院主智春尼も真田姓である。

幸村の長子として、のちに幸村とともに大坂の陣に加わり、父に劣らぬ勇名を馳せた真田大助は、昌幸・幸村父子がこの九度山に住むこととなった翌年に出生している。

この昌幸の居館を中心に、幸村の妻子や侍臣たちの家が並び、以前は、それらを総称して真田屋敷と呼んでいたようである。

昌幸・幸村たちの九度山での暮らしは流人とはいいながら、それほど厳しい制約を受けてはおらず、ときには付近の川へ出て釣りをしたり、泳ぎ競べをしたりする自由なども与えられていたらしい。『真田ヶ淵』という名が遺されているのもそのためである。

それというのも、国元の長子信之が助力を惜しまず、昌幸の求めに応じて送金したり、その妻、小松殿の生家本多氏を通じて、家康に対し、再三にわたって昌幸の赦免を願い出たりしていたからであろう。

とすれば、真田屋敷の動静が、すでに、この頃から不穏な気配に満ち満ちていたとするのは事実に反する。さすがの昌幸も、還暦を過ぎた老齢には勝てず、この九度山への配流後は、次第に心身ともに衰弱して、病の床に臥っていることの方が多かったということである。

赦免の沙汰

昌幸が、家康からの赦免の沙汰を一日千秋の思いで待っていたことは、国許への幾通かの便りによっても察せられる。

慶長八年（一六〇三）三月十五日、昌幸は、真田の里にある信綱（しんこう）寺の住持に便りを送って、「内府様（家康）は、当夏中に関東へ下向されるそうですが、その折、本多佐渡守が私のことを御披露下さることと思います。下山いたしました暁には、是非貴僧ともお目にかかりたいものです」と述べており、また縁戚に当たる禰津神五郎に宛てた手紙にも、「年も明けましたら、私の下山のことも近づこうと満足しております」としたためている。



高野山蓮華定院『真田坊』

事実、家康の側近本多佐渡守正信へは、信之の妻小松殿や、信之の母山之手殿（すなわち昌幸の室）から、いろいろと働きかけていたようであり、正信も、一応は赦免の努力をしようという気でいたらしい。

関ヶ原合戦後の豊臣・徳川の微妙な関係を考え合わすと、昌幸・幸村を赦免して帰国させることが、果たしてどのような意味を持つのか、幕府としても、やはり一考してしかるべきことだったことだけは確かである。

しかし、家康にとって、昌幸は、二度も煮え湯を呑まされた相手である。恐らく、そう簡単にその罪科を許す気にはなれなかっただろうし、他の関ヶ原浪人たちとのつり合いも考えねばならぬことである。

家康は、この段階で、あるいは、その判断を誤ったのかも知れない。昌幸を赦免することは、真田一族を完全に自らの陣営に引き入れることであり、昌幸という危険人物を取り込んで己の戦力とすることも可能だったはずである。

この一事をこの時機に処理していたとしたなら、家康は、あるいは、昌幸とともに九度山にあった幸村のために、あの大坂の陣で、三度もあの死の窮地に追いやられることはなかったであろうから——。

昌幸死去

『蓮華定院過去帳』の記録によれば、昌幸は、慶長十六年（一六一一）六月四日、九度山の真田屋敷で息をひき取った。享年六十四歳であった。

家康からの赦免の沙汰は、ついに、昌幸の許へは届かなかった。『真田三代記』などでは、昌幸は、その死に臨んで、幸村に、きたるべき大坂の役についての密計を授けたとされているが、事実は、恐らくそうではあるまい。老衰と病苦にさいなまれた昌幸は、赦免という一縷の望みだけを生甲斐として、寂しい配流の日々を過ごしたに違いない。

この昌幸の死に際して、国元の長子信之に宛てられた弔いの便りが現存しているので紹介しておきたいと思う。

その一つは、家康の側近本多佐渡守正信からのもので、「高野においでになっても、何事もなく神妙にお過ごしになっておられたのですから、いずれ御帰国のお許しも出ようかと、御袋様（信之母、すなわち昌幸室）からも時々御依頼があって、私も、御仕合わせを計ろうと思っておりましたのに、かようなこととなり、誠に残念に思います」というのである。

また、今一つは、武田信玄の近臣時代に昌幸と同僚であった幕府の使番城昌茂からのもので、「房州様（昌幸）が御逝去になられた由、承りました。誠に申し上げようもありません。一度は御目にかかろうとお約束し、今日まで年月を過ごしてまいりましたが、今は只涙ばかりです。御苦労なされましたこと、ひとしおいたわしく存じます。心中は紙上に尽くせません。なお、あな

た様（信之）は、よくよく御養生なされて、たとえ、片輪になられても、御家が続きますようお生きなさいますように」と、きびしい戦国の荒波をくぐりぬけて家を保ってきた武士の本音が書かれている。

昌幸の葬儀については、「公儀御はばかりの仁」だから、いずれ、家康・秀忠の意向を聞き、その許可を得て行なった方がよいとの理由から、当面は、その本葬を見合わせることとし、ごく内々の密葬ということで済まされている。生前の武将としての華々しい活躍を思うと、やはり、その寂しさは償い切れぬ思いがする。

昌幸の死後、国許からの十六人の侍臣の大部分は、高野での一周忌を済ませて帰国する。九度山の真田屋敷は、ますます寂しい暮らしとなり、残った家臣は、高梨内記・青柳清庵ら、ほんの二、三名に過ぎなかったという。

のちに、大坂の陣で幸村の影武者となって活躍した穴山小助や望月六郎などは、昌幸の死後、国許から幸村を慕って落ちのびてきた旧家臣や、浪々の身を幸村の許に寄宿させて家臣となった浪人たちだったのだろうと推察される。

徘徊行脚

軍師の花道

幸村は、父昌幸の死を誰よりも悼んだ。戦国に生まれ、乱世に生きた一代の軍師の終焉が、これほどまでに、痛ましく哀れなものであってよいはずはないと思った。家康からの赦免の沙汰を、一日千秋の思いで待ち侘びる昌幸の姿には、徳川の大軍を迎え撃って、一歩も退けをとらなかった嘗ての名軍師ぶりを彷彿させる面影はすでになかった。関ケ原合戦の帰趨を伝え聞いて、上田城を明け渡したその瞬間に、昌幸は、自ら軍師としての花道を降りたのであろうか？

幸村は、兄信之を交えて、真田一族の向背について論じ合った日の犬伏の陣での昌幸の雄姿が忘れられない。石田三成からの書状を前に、昌幸は、「かような時節にこそ、我が真田家の武威を天下に広め、積年の大望をとげねばならぬ」と説いたはずではなかったか？

幸村には、その時、三成との交友や、信之・幸村の姻戚関係（信之の妻は家康側近の本多忠勝の女であり、幸村の妻は故秀吉の側近大谷吉継の女であった）といった私情に、一切惑わされていない昌幸

の態度が、如何にも頼もしい限りだと思えたのだ。いくつになっても、若々しい情熱に燃え続けている昌幸にとっては、その行為こそが軍師の花道を飾るにふさわしいことなのだと頷けたものであった。

とすれば、その若さを、昌幸は、いつ投げ捨ててしまったというのか？　上田城明け渡しの時なのか、それとも高野への配流が決した時なのであろうか？

いや、恐らくは、そのいずれでもあるまい。それは、刻々と移りゆく世情の流れのせいなのだと思われてならない。関ヶ原の合戦以後、家康の権勢は、もはや抜き難い勢いにまで拡張しているのだから……。

昌幸は、野にあってそうした世情の動きを見守るうち、いつしか、かつての家康への意地を見失ってしまったのではあるまいか？

でなければ口惜し涙を流しながら、「内府（家康）をこそ、このようにしてやろうと希うておったものを」と信之に語った高野配流の日の態度や、九度山の真田屋敷への転居に当たって、「もし、大坂に事が起これば、まっさきかけて馳せ参じ、必ず徳川を滅ぼしてくれようぞ」と幸村に告げた胸の凝りが氷解しつくすいわれはないのだ。

幸村は、いまさらのごとくに歳月の重さを思わずにはおれなかった。配流以来、すでに十年余りの年月が過ぎ去っていたのだった。

このくだりの昌幸については、『武将感状記』などでは、死に臨んだ昌幸が幸村を枕辺に呼び、「あと三年、命の延びぬのが残念だ」と語りかけて、来たるべき大坂の役での密計を授ける逸話が述べられてある。

『真田三代記』などは、この話をもとにして書かれており、昌幸に、軍師としての最後の花道を飾らせようとした意図がうかがえるが、これでは、却って昌幸の人間像をちぐはぐにしてしまったという観がある。と同時に、幸村の軍師としての人物像をも、薄め弱めてしまっているのではないだろうか？

いずれにしても、この逸話は、やはり、あとから付け加えた作り話で、いささか事実に反するという気がしてならない。

昌幸が、たとえ、その死に当たって何一つ幸村に語り聞かせることがなかったとしても、幸村は、やはり、老い衰える以前の昌幸の遺志を汲み取り、その虚像の軍師としての花道を歩んだであろうから……。

江戸開府

家康は、二年がかりで関ヶ原合戦の処分を終えると、巧みに朝廷に働きかけて、慶長八年（一六〇三）二月、征夷大将軍に任ずるとの宣下を受ける。

この間、家康は、毛利輝元を大坂城内から退去させ、石田三成・小西行長・安国寺恵瓊らの西軍の諸将を六条河原に処刑し、上杉景勝を上洛させて謝罪させる等の処理を、じつに手際よくや

ってのける。さらには、気骨縦横を持って鳴る薩摩の島津義久にも誓書を出させ、関ヶ原での西軍への加担の真意を糺すといった手だてを講ずることにもぬかりはなかった。そして、この島津一族の忠恒を伏見城に登城させ、藩主義久にかわって家康に謁するという筋書を演じさせて、ついに事実上の徳川の全国制覇を不動のものとしたのである。

幸村は、父昌幸が、家康への意地を喪失したのは、恐らく、この時点においてであったろうと思った。とすれば、昌幸は、あるいは、家康になりかわって天下人になろうとの大望を胸に秘めていたのかも知れぬとも思った。

家康は、征夷大将軍に任ぜられると、幕府を江戸に置くことを決め、ただちに江戸城を中心とした街づくりを諸大名に命じてその財力を消費させる。諸大名の江戸屋敷に人質をとどめ、無言のうちに幕府への臣従の意を表させた参勤交代の制度を、のちに武家諸法度によって確立させるための基となした措置がこれである。

家康の偉大さは、感情や勝敗に捉われることなく、ひたすら大局を収めるという視野に立って事に処した点にある。天正十二年（一五八四）、小牧・長久手の戦において秀吉の軍を破りながら、その後に利あらずとして和を結び、勝者としてのプライドを擲って秀吉に臣従を誓ったのもそのためである。

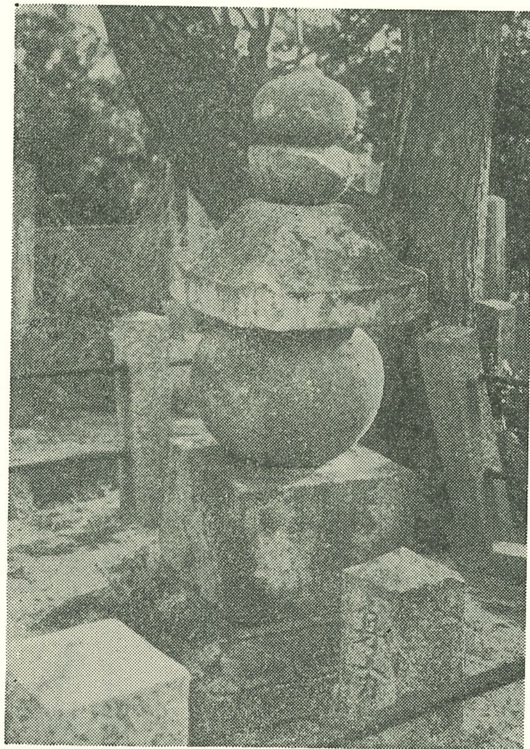
隠忍自重じつに十余年にして手中にした制覇は、それだけ確固不動のものであったことはいう

までもない。家康は、自らに勝つことによって、全ての敵に勝ったのだった。

恐らく、その天下人としての器量においては、父昌幸は、とうてい足許にもおよばなかったに違いない。いや、己とて同様であろう、と幸村は思う。

だが、その『武』においては、昌幸は、確かに家康を凌いだのである。神川の合戦において、また、上田城の攻防において、真田の寡兵は、徳川の大軍をものの見事に打ち破っている。徳川への不敗の実績を持つ一族は、全国津々浦々広しといえども、この真田を措いてはありえないのだ。

とすれば、家康への真田の意地は、全国制覇のこの期において


寄手塚と身方塚

も、まだまだその『武』によって報ゆべき余地だけは残されているはずではないか。

たとえ、父昌幸が、虚しくこの九度山に老死して果てたとしても、また、兄信之が真田家存続のためにその支配下に膝を屈したとしても、幸村は、何としてもその家康への積年の意地を貫かねばならぬのである。

幸村は犬伏での父子離散の日の誓いを思い起こして、あくまでも真田一族の虚像の軍師としての道を歩まねばならぬと思ったのだった。

紀見峠

学文路（かむろ）から清水・橋本を経て紀見峠を越えれば、金剛・千早・赤坂への道は、さほどの労を伴う道のりではなかった。

幸村は、父昌幸の生前から、幾度となくこの峠を越えて和泉・河内の地を行脚して歩いた。堺へも、京へも脚をのばしてみたことがある。

昌幸は、武藤喜兵衛と名乗った武田信玄側近の昔から、常に「楠に学べ」の一語を忘れなかった。それは、昌幸のことばであると同時に、信玄座右の言でもあったのである。

幸村は、幼き頃の父昌幸の言を、いまも豁然と心に蘇らせることができるのである。だからこそ、九度山を離れた行脚の途次には、必ず楠ゆかりの地に脚をのばすことにしているのだ。

紀見峠に立って北の方（かた）に視線を落とすと、千早・赤坂の地は自ずとその視野のなかに往古の佇いを描いてみせる。

過ぐる元弘の乱に際し、この赤坂・千早の孤城に拠って、群がる鎌倉の大軍を翻弄した楠正成とは、果たして如何なる人物であったのか？　名もなき一土豪に過ぎなかった楠一族を南朝北朝の争乱には欠かすことのできぬ名族にまで高揚させたその『武』とは何だったのであろうか？

赤坂・千早の地勢が、金剛・葛城の山並みを背にして、上田・沼田の信州・上州の地形に、極めて類似した自然に囲まれているという事実を、幸村は、自らの眼によってはっきりと確かめてみることができた。ということは、大軍を迎え撃つ戦術において、やはり、多くの共通点を見出しうることとなのである。

だが――、と幸村は考える。正成の『武』は、帝への『忠』という意識によって、その極限には到達することができなかった。すなわち『忠』なるが故の『武』に過ぎなかったのではあるまいか？　とすれば、己が『武』は、あくまでも智に終わらず、情にも終わらぬ万天下への『武』でなくてはならない。

幸村は、昌幸が、ついに機を失したと悟った世情を、必ずや、いま一度、自らの『武』を世に問う時節が到来しうる世情であると信じて疑わなかったのである。

寄手塚身方塚

『楠公遺訓』第一巻、元の巻の中の九には、『自修法』と題する次の七ケ条が記されてある。

一、兵を用ふる事費へを忌む

一、馬を用ふる事分によれ
一、具を用ふる事中を用ひよ
一、食は衆と時を同じくせよ
一、臥す事は後に臥し夙に起きよ
一、衣は厚きをいむ
一、酒は自らを禁ぜよ

幸村は、この七ヶ条を、河内国観心寺を訪れた折に自らの心に刻みつけた。間地定法・地形転変法・火戦法・夜討法・竜陣三段法等の正成の戦術は、この七ヶ条の『自修法』を根底に置くことによって活かしえたのだと思った。

旧主武田信玄には、「人は城、人は石垣、人は堀、なさけは味方、あだは敵なり」という歌があった。要害を要害たらしめ、堅城を堅城たらしめるものは、すべて、守り立てるべき人自体にあるということなのであった。

幸村の千早・赤坂への徘徊行脚は続いた。幸村にとって、昌幸の死後の九度山閑居は、「楠に学ぶ」べき多くの可能性を齎す最大の好機だったわけである。

『楠館』にほど近い森屋の在に、『寄手塚身方塚』と呼ばれる墓地があった。正成は、元弘四年（一三三四）秋九月、二基の五輪塔を刻ませて大供養会を営んだという。身方塚と呼ばれる一基

が、盛土もせぬままに丘の中ほどの平坦部に建てられたのに反して、寄手塚と呼ばれる他の一基が、小高い積石の上からその身方塚を見下ろすふうに築かれてある由縁は、如何なる理に基づくものであったろうか？　千早・赤坂での戦死者は、じつに数万の多きにのぼり、その大半は、北条・六波羅の兵であったが、楠の兵の中にも、武運拙く死にいたったものは少なくなかった。だが、そのいずれの死をも犬死と思わせてはならぬと正成は思ったに違いない。

大供養会は、三日三晩に亘って読経を絶やさず、正成は、「塚は、未来永劫にかけて忘れ去られることはあるまい。この塚にあやかって自らの名を後世にとどめたき者は、この地に自由に自らの墳墓を築くこととお構いなし」との布告を与えたという。

幸村は、二基の五輪塔の周囲に、所狭いまでに建ち並んだ墓標の列を眺めやり、正成は、やはり、一介の田舎豪士ではなかったのだという感慨を深めたのだった。

とすれば、幸村の目指す『武』の極致とは何なのか？　この世に存在するすべての人々の心に、真の武人として、未来永劫に生き抜くこと、それこそが、純粋無垢なる『武』そのものなのではないのか？

幸村は、十余年におよぶ忍従の重さをひしひしとその背に感じ取りながら、あくまでも時のいたるのを待とうと決意したのだ。然も、その時節は、決して遠い未来ではない。恐らく、両三年のうちには、必ず巡りくるであろう近き将来においてであると思えたのだった。

真田忍妖録

信濃忍法

忍法、または忍術の称は、近江国に住した大伴細人が、聖徳太子の物部守屋誅伐に際しておさめた軍功を賞し、その駆使した術を志能便と名づけたのが、忍の術と称えられたはじめであるとされている。

この術は、密偵・潜行を主とした術で、あらゆる手段・方法を用いて敵に近づき、合理的な理法によって、正体を秘したままに敵地・敵陣内に潜入し、敵の機密をさぐり、密書を奪い、あるいは、暗殺・破壊等によって、一挙に敵を打ち破ることを目的とするものである。

伊賀・甲賀の二流が最も著名で、戦国時代の諸大名は、軍略・軍事上の必要から、この伊賀・甲賀の忍びの者を用いて、各地の動静を探らせ、または、敵将を暗殺させる等の密命を与え、激烈な謀略戦を繰り返すこととなったのである。

伊賀者・甲賀者が、殊にこの術に長けていたのは、鈴鹿の山並みの要害を隔てたこの両国が、つねに相手方の動静を極めようとして技を競い合ったためである。

だが、この忍びの術は、必ずしも、伊賀・甲賀の二流派のみを指すのではなく、修験道の山伏たちが、密教の諸法を取り入れて編み出したものであるとも、また秦国からの使者として来朝した徐福が、密かに彼の地の秘術を伝えたのが起こりであるともいわれている。

つまり、さまざまな起源を持つ忍びの術が、戦国の世を背景として、互いに鎬を削り合って発達したというのが真相であり、のちに徳川幕府の隠密をつとめた伊賀・甲賀の忍法のみが、特にその著名度を高めたというに過ぎない。

真田一族に仕えた忍者は、滋野の古族が用いた呪術・妖術の流れを汲む信濃忍法の使い手たちであったという。

『立川文庫』の「真田十勇士」の一人として縦横自在の大活躍を見せる猿飛佐助は、いわゆる、文化年間に講釈師たちによって編みだされた架空の人物なのであるが、いま一人の霧隠才蔵は、幸村の命によって家康の動静を探る霧隠鹿右衛門という忍者がその原型であろうといわれている。

昌幸の死後、幸村は、家康の動きを詳かに読み取る。すでに七十歳の老齢に達した家康は、必ずや、自らの手で、天下統一の実のみならぬ名をも取ろうとして事を構えるに違いない。幸村は、その時にこそ、自らの『武』と意気地とを家康に向かって擲たねばならぬと思うのだった。

る。

真田入道好白

　幸村が、いつ仏門に入ったかは明らかではない。が、父昌幸の死後間もなくのことであったろうことは、つぎに掲げる国許への便りの署名によっても明らかである。

遠路御飛札に預り候。仰せの如く、当春御慶尽期あるべからず候。仍って御祝儀として鮭二尺、御意に懸られ候。忝き次第に候。去り乍ら、其の許よろづ御手透もあるまじき処、御隔心の至り、却って迷惑いたし候。然るにその方向も相替る儀御座なく候由、市右物語具に承り、満足致し候。此方におゐても無事に御座候。うそかぢけたる躰、市右物語申さるべく候間、委しく申し入れ候にも及ばず候、もはや御目に懸り候事あるまじく哉、いつも〱申しつくし候。猶、市右申さるべく候。恐々謹言。

二月八日　　真好白

信繁（花押）

壱岐守殿

御報

　幸村は、この時、すでにきたるべき大坂への出陣を予知して、「もはやお目にかかることもありますまい」と記している。それは、正しく、近い将来死地に赴かんとする己の決意を、いとも淡々たる文面の一端としてしたためたものだったに違いない。

　この淡々たる境地は、その署名にある通りの仏門への帰依によって得られたものであるかも知れない。

　が、あるいは幸村の入道そのものすらが、『武』に向かって指向する幸村自身の決意を隠蔽するための偽りであったのかも知れぬのである。

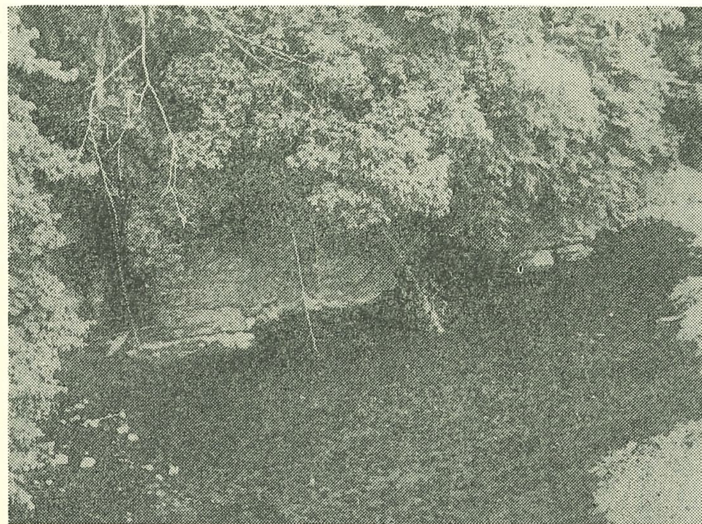
　すなわち、真田幸村なる人物の難解さは、こうした思いもよらぬ意外性の中に真実を忍ばせていることにこそ、その因が秘められているのではないだろうか？

忍者霧隠鹿右衛門

　生命を賭けることは武人の常であり習いである。老境に達して病に臥することはやむをえぬことであるとしても、人生五十年に達しえずして病に倒れることを潔しとはなし得ない。

　幸村は、父昌幸の死後、遽かに襲い掛かった病弱に苦悩した。だが、その幸村の病苦が如何なるものであったかは定かでない。

　国許への便りによれば、「とかくとかく年のより申し候こと、口惜しく候。我々なども、去年より俄かにとしより、殊の外病者に成り申し候。歯なども抜け申し候。ひげなどもくろきはあま



九度山町の真田ケ淵

りこれなく候」と淡々とした口調で述べたてているが、それは、むしろ、そのことによって、自らの病苦の厳しさを悟らせまいとした配慮からだったのではないだろうか？

　いずれにしても、幸村にとって、その病苦は、何としても隠しおおさねばならぬ非情な現実なのであった。幸村は、いまさらのごとくに、虚にいて実を御することの難しさを味わわねばならなかった。

　忍者霧隠鹿右衛門の探索によれば、家康は、齢七十にしてますます矍鑠（かくしゃく）たる日々を過ごしているという。

　幸村は、やむなく信濃忍法の援けを借りて家康をたぶらかす一計を案じた。信濃の忍法は陰陽術をその発祥とする妖術の一種

である。この妖術を用いて、家康の心理に暗示をかけ、その暗示によって家康の焦りを買おうというわけである。

　霧隠鹿右衛門は、前述の通り、霧隠才蔵の原型となる人物ではあるが、決して、変幻自在な魔性のごとき忍者ではない。たかだか、家康の夢枕に忍び寄って呪詛を繰り返すがごとき程度のものである。

　だが、効果はそれで充分なのだ。家康は、次第に不機嫌の度を加えてゆく。そして、その身辺には、いつしか陰欝な翳りが漂い始める。家康は、何かが一つ欠けたような、どうしても思い定めることのできぬような、無意識の中の意識にも似た不安に追い立てられる。そして、その一つの破綻を、幸村は、遙かな九度山の地から瞰めておればよいのだった。

最後の戦機

　幸村は、来たるべき秀頼と家康との不和に備えて、自らの『武』を極める戦機は、その唯一の時節の到来以外にはありえないと考えていた。

　父昌幸は、確かに名だたる乱世の中の武将であった。群雄割拠の戦国の苦難を、あくまでも独立不羈の信念によって生き抜いてきたのだ。そして、それは、上田城の攻防を勝ち終えた段階において、脆くも争乱の場を失してしまったのである。昌幸の不幸は、自らの生命の燃焼のつきぬうちに、つぎなる争乱を迎ええなかった世情の推移の緩慢さにあったとも言いえよう。

　そして、幸村の生涯は、昌幸のその『武』を、自らの誇りとなしえた段階で中断されたまま、

その後の進展をみせてはいない。確かに、幸村自身の『武』の真価も、昌幸と行を共にした上田城の攻防において、その一端を発揮しえたことは紛れもなかろう。だが、それが、幸村自身の生涯のすべてであってよいはずはない。幸村の過去は、消えつくした去年の雪のように、幸村自身の心からも遠去かってしまおうとしているのである。

幸村に科せられた九度山配流の年月の重さは、やはり、幸村以外には理解しえぬものであった。幸村は、この最後の戦機に賭ける決意を、ますます大きく膨らませ続けるばかりだったのである。

挙兵への罠

将軍世襲

家康が、老齢を理由として将軍職を秀忠に譲ったのは、慶長十年（一六〇五）四月半ばのことであった。

だが、江戸幕府の実権は、依然として駿府に隠居したはずの家康の掌中に握られていたのである。

この将軍の世襲は、豊臣家に大きな衝撃を与えるとともに、家康に対して、異常なまでの敵愾心を抱かせることとなった。

豊臣家では、いまだに故太閤の盛時を夢みたまま、依然として、家康は豊臣家の家臣に過ぎぬと考えていたのである。だから、将軍宣下のために上洛した秀忠が、故太閤の正室であった北政所を介して、その祝賀のために秀頼の上洛を促した時にも、頑としてその申し出を拒否したのだった。秀頼が上洛して、秀忠の前で祝詞を述べることが、とりもなおさず、新将軍の膝下に臣従の礼をとることになると解したからであった。

関ケ原の合戦以後、すでに、豊臣・徳川両家の力関係は逆転している。それも、比較にならぬほどの雲泥の差で、ますますその隔たりを大きくしている。この力関係を認識すれば、いやでも辞を低くして接して来ずばなるまいとするのが、家康の豊臣家に対する無言の圧迫政策なのだ。

だが、意外に硬化した豊臣家の態度は、家康に、改めて、対豊臣政策の再考を促す結果となった。

しかし家康は、なおも、頑固に従来からの隠忍自重の態度をとり続けた。駿府の地から、密かに秀頼を取り巻く豊臣家の気配をうかがっていたのである。

二条城の会見

このような家康に、いよいよ最後の決意を固めるきっかけを与えたのは、慶長十六年（一六一一）三月二十八日、二条城において行なわれた秀頼との会見の結果に

よってである。
　この二条城での会見については、『大坂御陣覚書』が、期せずして家康の心境をつぎのように記している。
「大御所すでに七十になり給ふにより、御在世の中に大坂をしづめたく思召し、慶長十六年辛亥三月御上洛、二条の城へ入らせ給ひ、秀頼公に久々御対面ならせられず候間、御上洛あるべき旨仰せつかはさる」
　家康の上洛の表面上の理由は、近く予定される後陽成天皇の皇太子政仁親王への御譲位について、朝廷よりの諮問に応ずることであったが、家康は、この機会を利用して、密かに豊臣家の最後の腹をさぐろうとしたのだった。家康のつもりでは、秀頼が家康の求めに応じておとなしく上洛すればよいが、もし秀忠が将軍になった六年前と同様に、相も変わらず主顔をして上洛を拒むようなことがあれば、その時にこそ幕府に対して叛意ありとして、いよいよ豊臣家を攻め滅ぼさねばならぬと考えていたのである。つまり、秀頼への上洛の要請は、いわば、家康からの豊臣家への最後通牒だったわけなのである。
　豊臣家では、会いたいというのなら、家康自身が大坂へ出向いてくればよいという意見が強く、その時点でも、なお、秀頼が、わざわざ上洛せねばならぬ理由はないとしていた。だが、家康の腹づもりを読み、あくまでも開戦は避けねばならぬと願う片桐且元・加藤清正・浅野幸長ら

の懸命な説得が功を奏して、ようやく秀頼の上洛が実現する。
　家康は、あわよくば大坂攻めの口実ができると期待した計画が崩れ、しかも、久々に逢った秀頼が、思いのほかの偉丈夫となって成長している姿を見て、俄かにその焦躁感を強めたのだった。
　駿府へ戻ってからの家康は、不機嫌に口を噤んでいることが多くなった。そして、幸村の放った忍者霧隠鹿右衛門が、その夢枕に立って焦躁感を掻きたてようと呪詛し始めたのは、丁度その頃からのことだったのである。

方広寺の鐘銘

　家康は、二条城での秀頼との会見以後、ぜひとも自分の眼の黒いうちに大坂攻めを実現させなければならぬという決意を固めていた。
　幕府の諸制は、ぬかりなく進められ、後水尾天皇践祚の儀の大任を終えて駿府に帰った家康は、ただちに、令三条を定めて西国大名の誓書を取り、翌慶長十七年(一六一二)正月には、引き続き同令に基づいて東国大名の誓書を集めた。
　一方、豊臣家では、故太閤の莫大な遺産を利して、諸国の社寺の修復・造営を計り、豊家の威信を、いささかなりとも回復しようとの策を進めた。
　方広寺の鐘銘事件は、こうした両家の思惑のもとで、思いもかけぬ口実を家康に与える結果となった。

豊臣家から方広寺に寄進された新鋳の鐘に、「国家安康　君臣豊楽」と刻まれた銘が、家康を呪詛し、豊臣家の繁栄を願う下心があるというのである。

誰の眼にも、無理難題は、紛れもなく家康の側から吹っかけられたものであると映った。しかし、家康は、そうした世評を承知の上で、あえて、条理をつくした大坂側からの弁明にも耳を貸そうとしなかった。

こうしたいいがかりの遠因となった家康の焦りは、やはり、忍者霧隠鹿右衛門によって煽られた焦躁感以外の何ものでもない。家康は、ついに待ちに待った大坂攻めの下心を露呈してしまったのだが、諸大名たちは、それでも、家康の非を詰ろうとはしなかったのである。

且元追放

片桐且元は、この方広寺の鐘銘事件を境として、さまざまな屈辱と汚名を冠せられた気の毒な人物である。

弘治二年(一五五六)近江に生まれ、秀吉に仕えてその側近となったのち、賤ヶ嶽の合戦に武功を立て、小田原の役や文禄・慶長の役にも従軍して、摂津国茨木一万石の領主となった武将である。

秀吉の没後は、その遺児秀頼に仕え、大坂城内第一の筆頭人としてさまざまな難事に処し続けていた。そして、関ヶ原の合戦以後も、その誠実さを買われて家康からの信頼も厚く、豊臣・徳川両家のなかに立って、よくその折衝につとめてきた。

且元は、秀吉没後の時勢の変化を、持前の誠実さによって見抜いていたから、豊臣の家運を守るためには、この際、家康がどれほど不条理な要求をつきつけて来ようと、涙をのんでその意に従うべきであると考えていた。

時勢の変化を弁えずに、ひたすら血気にはやろうとする大坂方では、そうした且元の態度への憤懣が、いつしか徳川方に通じる裏切者という濡れぎぬにまですり変わっていたのである。

胸に一物ある家康のために、さんざん翻弄された揚句に追い返された且元は、にわかに騒然となった大坂城内の強硬論者によって、ついに、裏切者の汚名を冠せられて追放され



徳川家康画像

る。
　且元が城中で殺されそうだという報告を受けた家康は、誠心誠意豊臣家のために奔走した且元の真意を解せぬ大坂方の愚かさに、にやりとした。
　家康は、且元の大坂城内からの追放は、とりもなおさず、大坂方が家康に絶縁状をたたきつけたことになると解していた。
　京都所司代板倉伊賀守の報告によって、大坂方が急遽開戦の準備に取り掛かったことを伝え聞いた家康は文字どおり躍り上がらんばかりにして喜んだ。前日までの不機嫌さが、まるで偽りであったかのように爽快な気分に浸った。時に、慶長十九年（一六一四）十月一日の午の刻（正午）のことであった。

黄金二百枚・銀三十貫

閑居遠望

「隠れ住で花に真田が謡かな」　与謝蕪村が、九度山の真田庵を訪れた折に詠んだといわれるこの句の通り、真田屋敷は、ひっそりとした佇いのなかに明け暮れていた。

連歌を詠み、謡を口ずさむことが、幸村にとっては、身辺の寂寥を慰めるせめてもの楽しみだったに違いない。
　大坂謀叛という言葉は当たらぬかも知れぬ。だが関白秀吉の世は過ぎ、徳川幕政下の統領が将軍である以上、他に適当な言葉は見当たらない。秀頼の親書を携えた使者は諸国に飛び、たちまち天下の風雲は急を告げる。
　家康は、自らの出陣を十一日と決め、ただちに諸大名への出動を命じた。すなわち、大坂方の使者の派遣に、寸刻の遅れもとってはいなかったのである。
　家康は、七十三歳の老齢にも拘らず、じつに見事な采配をみせる。紀伊・大和の勢は別命を待ち、伊勢・近江・美濃・尾張・三河・遠江の諸勢は即刻出陣、北国勢は大津・坂本・堅田の線へ、西国勢は西宮・兵庫へ、中国勢は多田・池田へ、四国勢は和泉の沿岸、九州勢は待機して後命を待ち、東北勢はただちに軍を率いて江戸へと、いささかの渋滞もなく指令された。そして諸大名は、一糸乱れぬ素早さでその幕命に応じたのだった。
　家康は、死後、諸大名から『神君』という尊称で呼ばれるが、この時、すでに、絶対の君主としての権勢をその手中に収めていたのであろう。でなければ、この神技とも思える統制は不可能だったに違いないのだ。
　幸村は、別天地ともみえる高野山麓の閑居にあって、こうした慌しい世情の動きに、じっと遠

望の眼を向けていたのである。

幸村が示すべき『武』の舞台は、かくして、刻々とその全貌を整えつつあった。万天下の悉くを大向こうに廻しての『武』こそが、幸村の望む広大無辺にして聖なる精神の昂揚に外ならないのだ。幸村は、正に未知なる新しい自己の生涯に直面しようとしていたのである。

阿呍の呼吸

片桐且元を城内から追放した段階では、まだまだ、大坂方の中にも、思慮が足りぬのではないかとする声があった。だが、腹立ちまぎれに軍を集めようとしたことが却ってあとへはひけぬという空気を醸し出した。秀頼の親書も、反徳川の隠然たる勢力を、阿呍の呼吸で結束させる時機を失した。

秀頼の使者を迎えた諸大名は、悉くが迷惑至極といった態で求めに応じようとはしなかった。関ケ原の合戦とは異なり、家康の無理難題に端を発して、秀吉二世の秀頼が自ら陣頭に立って豊臣家の存亡をかけた戦いをするとあれば、かならずやかなりの大名が馳せ参じてくれるに違いないと目算を立てた大坂方の思惑は、完全に覆えされてしまったわけである。

秀吉の縁者であり、少年時代から豊臣家とは親交のあった福島正則でさえ、「使者の趣は、大坂方に味方せよということであろう。しかし、徳川幕府での現在の立場を考えると、それは全く不可能なことであるから、秀頼公のお手紙を拝見するわけにはゆかぬし、使者に会うことも無駄である。こうなった以上は、秀頼公も大坂城で討死なさる外はござるまい。どうぞしっかりと戦

っていただくよう秀頼公にお伝え願いたい」と家臣にいわせて使者を帰したといわれている。

また、骨っぽさでは当代随一といわれた島津藩でも、「関ケ原の一戦では、最後まで楯つき通したにも拘らず、大御所（家康）さまの御恩によって本領を安堵された当藩では、豊臣家への御報恩は、すでに関ケ原にて相済したものと存念いたしている次第。よって、いまは、二心なく徳川家の御恩に報ずるのみでござる」と、藩主義久が贈られた正宗の名刀を返して、事の次第を家康に報告している。

要するに、江戸幕府麾下の現役大名のなかには、ただの一家とて大坂方に加担しようとするものはなかったのである。

と言うよりは、家康が、ここでも、じつに巧妙に手を打ったとみるべきであるかも知れない。家康は、福島正則・加藤嘉明・黒田長政といった、秀吉とは特に関係の深かった大名たちに対しては、大坂出兵の指令を与えず、態よく江戸城留守居役を命じて、人質同様に数人の小姓をかしずかせたまま残留させた。

> そのもと御番きびしく御苦労の由、御迷惑なる儀と申す事に候、左衛門大夫殿（福島正則）左馬殿（加藤嘉明）御きうくつに相見え候由、承りおよび候、御両人へ書状をもって申すべく候へども、今時分は人々不審も候へば、如何候間、その儀なく候、この書状の躰、仰せつかはされ候て給ふべく候。

これは、浅野長晟が、福島正則らとともに江戸に残った平野長泰に宛てた便りの一部で、家康は、福島らには、直接には、慰めの手紙一本出せぬ状態に追い込んでいたのである。

従って、大坂方にとっては、関ヶ原牢人と呼ばれる旧大名や、この機に一旗と目論む浪人の群れが続々と大坂城を目指して馳せ参じて来たのがせめてもの救いだったわけなのである。

使者来訪

秀頼の使者は、九度山の幸村の閑居へも訪れた。その使者は、秀頼側近の速水甲斐守守久であったともいい、また、大坂城への一番乗りで信望をえた明石掃部助全登であったともいう。

当時の大坂城内には、秀吉在世中からの財貨が山と積まれ、金貨九万枚・銀十六万枚のほかに、太閤分銅金と呼ばれる金塊が数知れず蓄えられてあったといわれ、幸村に対しても、当座の贈り物という名目で、黄金二百枚・銀三十貫が手渡された。

幸村にとっては、思いもかけぬ高価な引出物だが、そうした音物の良否や多寡に拘らず、すでに幸村の大坂入城の決意は定まっている。

ただ、和歌山城主浅野長晟や高野山門主たちの監視の眼だけは掻い潜ってみせなければならない。

しかも、大坂方の慌しい動きは、さまざまな風聞となって諸国を駆け廻っているらしく、故郷信濃の町や村から、幸村の身を案じて馳せ訪れる者が引きも切らない。浅野の家臣や高野山衆徒

らの警戒の眼が、一層厳しさを増したとしても当然である。

幸村は、真田屋敷を訪れる旧家臣や縁者たちに、何がしかの金子を握らせて早々に立ち去らせる。手短に、その耳許に囁きかけて、あとは眼と眼を合わせるだけだが、そこは、阿吽の呼吸がその心中を通わせてくれる。来訪者は、そそくさといづこへともなく姿を消すのだ。

幸村は、秀頼から贈られた金銀が、こうしたことに役立とうとは思ってもみなかった。思わず、微苦笑がその頬を過ぎる。そして、その笑みは、自ずと、来るべき出陣への餞けの哄笑を誘おうとするのだった。

大坂方は、決して、家康には勝てはせぬ。



九度山町真田庵の蕪村の句碑

しかし、真田は、必ずや徳川に『武』をもって酬い、三たび天下にその名を知らしめる機をうるであろうと幸村は思った。

幸村出陣

慶長十九年（一六一四）十月八日は奇しくも玄猪の日（上の亥の日）に当たった。

幸村は、この日、高野に登り、亥の子の祝い餅を配って歩いた。諸坊を一廻りしたあとは蓮華定院で持参の玄の子餅を頬ばりながら碁を打って過ごした。諸国廻国の旅から帰った修行僧が、「江戸と大坂の和が破れて、もってのほかの大騒動が持ち上がったものじゃ。いたるところに関所ができ、拙僧なども命からがら逃げ帰ってきたわ」と話した。幸村は、「まことに東西騒然たる世の中じゃが、我らのような閑居の身には関わりもなくて幸いというもの。こうして気楽に餅を食い、碁に興じておれるとは心楽しいかぎりじゃな」と合槌を打ち、やがて厠に立つふりをして高野を下りる。

幸村は、その夜のうちに、厳しい監視の眼をかすめて九度山を発ったのである。

大坂までは、ほぼ十五里。計画通り、学文路（かむろ）・橋本から紀見峠を経て堺へ抜ける。わずかな手勢で九度山を出た一行が、いつしか騎馬を混じえ、甲冑・槍・旗指物を備えた隊列にふくれあがる。街道沿いの並木の蔭から、家並みの路地や軒下から、一人また一人と具足を手挾み、装いを改めた人影が隊列に加わる。金子を与え、耳打ちをして九度山の閑居から追い返した者たちの殆んどが忍び集まってくるのである。

昌幸・幸村父子の高野配流の当初から行をともにした高梨内記や青柳清庵らの家臣のほかに、真田勘解由・大塚清兵衛・海野小平太・望月善太夫・禰津小六・山岡軍平・馬淵六郎大夫といった譜代の士卒が顔を揃え、堀田作兵衛らの縁故者たちも、はるばる信州の地から馳せ集まって来ているのだった。

さらには、一面識も持たぬ新参の武士たちの姿も数少なくはなさそうである。六連銭の旗印の許、彼らとて、必ずや真田の名に恥じぬ働きをみせてくれるに違いないと幸村は思った。

一説によれば、幸村の出陣は、地元大名たちの警戒網を強行突破し、緋紅の鎧冑に身を固め、朱塗りの武具を携えた幸村の軍勢が、六文銭の赤指物を翻して和歌山城下を堂々と進撃、岸和田城下も難なく通過、堺を経て大坂城へ繰り込むという、勇壮な戦記物語として描かれている。『真田三代記』などもこの説を取って、幸村の豪勇ぶりを述べたてているが、やはり、却って軍師としての幸村の真価を弱める絵巻物語でしかありえない。

ちなみに、真田の赤備えについて考えてみても、これは、一旦和議を結んだあとの夏の陣に、初めて幸村が用いさせたものであって、大坂入城の折の真田隊のいでたちは、必ずしも、赤一色に整えられたものではなかったはずである。

が、いずれにしても、いつしか数千名の大部隊に膨れあがった幸村の軍勢は、慶長十九年（一六一四）十月十日、すでに、長曽我部盛親・仙石秀範・毛利勝永・石川康勝・明石全登・後藤基

次といった主だった関ヶ原浪人衆の殆んどが入城を終えた殿（しんがり）を締めくくるように大坂方に加わったのだった。

主だった浪人衆の引き具した人数も、およそつぎのような状況であったから、幸村は、その率いる人数の上でも、決してひけはとらなかったことになる。

長曽我部盛親　兵五千。幟は白地に八藤の紋。
仙石秀範　兵四千。幟は白地に日の丸。
毛利勝永　兵四千五百。馬印は赤いすみ取り紙。
明石全登　兵四千。幟は黒地に白の三つ丸。
後藤基次　兵六千。幟は白黒の段々筋。
織田頼長　兵一万。幟は赤地に菊桐の紋。

このほか、石川三長・康勝兄弟が、それぞれ兵五千、京極備前が兵六千、山川帯刀が兵二千を率い、御宿正友・北川宣勝・塙直之らも小勢ながら手兵を連れて入城していた。

幸村の入城を伝える京都所司代の報告は、家康が浜松に到着したばかりの十月十四日の午の刻（正午）過ぎに届けられた。

「大坂のようす、さして変わったことはございませんが、諸浪人たちをいよいよ多く抱えております。真田源二郎幸村、これは先年関ヶ原御陣の時、御敵となったために御勘気を蒙り、その後、高野山に引き籠っておりましたが、秀頼は、当座の音物として黄金二百枚・銀三十貫目を遣わして招き、大坂に籠城させました。若原右京という播磨の浪人を連れて籠城しました。浅井周防守、これは淀君の縁者、その外根来衆三百騎籠城、いずれも金銀を多く遣わしますので、浪人が馳せ参ずること、その数が知れません」

家康は、真田籠城の知らせを聞くと、驚いてその報告者のいる部屋へ出かけていき、「籠城したという真田は親か子か。親か子か」と慌しく尋ねたが、その時、家康が手をかけていた戸板が、ガタガタと小きざみな音をたてて鳴った。注進の者が、かしこまって、「安房守は昨年の夏に病死いたし、悴の左衛門佐が籠城いたしました」と答えると、家康は、やや安堵の色をみせて居室へ引き返していったという。

これは、『幸村君伝記』に記された話で、「内府（家康）が震えられたのは、真田を恐れられたためではなく、関ヶ原の時に殺すべきであったところ、伊豆守信之の抜群の大忠にかえて助命された恩を忘れ、またもや弓を引くのかと御憤りのあまりに身ぶるいなされたのであろう」という注釈が付されてある。

いずれにしても、家康が、かつての再度の敗北によって受けた負い目は拭い去り難く、幸村

は、家康のその怯えを、遥かな虚空に閃めく霊感として捉え悟っていたのだった。

籠城軍議

浪人部隊

大坂方の勢力は、いつしか十万を越す大軍に膨れあがり、関ヶ原の合戦で領地を奪われた旧大名やその重臣といった百戦錬磨の勇将・武将たちをはじめ、それらに仕えた旧家臣・徒侍（かちざむらい）・雑兵にいたる各階層を網羅して、はなはだ侮り難い勢いとなった。『大坂御陣山口休庵咄』によれば、その内訳は、一万二、三千の騎馬武者と、六、七万にものぼる徒侍、その他五万が雑兵という構成で、他に一万余りの御本丸女中衆がいたといわれる。

こうした浪人たちでふくれあがった大坂の町は、西は東横堀川以東、南は八丁目口以北から、東は黒門口以西にいたる、いわゆる三ノ丸惣構えの内側に市を連ね、わきたつ戦争景気で大もうけをと企む商人たちの呼び声に賑わっていた。

総大将は、いうまでもなく故太閤の第二世としての象徴的存在であった秀頼だが、まだ二十二歳の若さでもあり、幼い頃から雲上人的庇護のもとに育てられ、戦争のことなぞ全くの素人に等

しい貴公子である。とすれば、城中の指令は、殆んどがその母淀君の恣意によって発せられ、気の荒い浪人部隊の反発・反感を招くことは眼にみえている。淀君の叔父織田有楽や、従兄弟の織田常真は、いずれも淀君との縁故で副将格に収まってはいるが、これも、茶道や遊芸に堪能なばかりで十万の大軍を指揮する武将の才にはほど遠い存在である。とすれば、片桐且元追放後の城中の筆頭人大野治長が、唯一の頼みの綱ということになる。

長曽我部盛親・真田幸村・明石全登・毛利勝永・後藤基次の五人が、大坂五人衆の名で称される大物なのだが、秀頼譜代の直臣からみれば、それらの新規召抱えの大物たちが、却って目障りな存在に思えてならない。

徳川方の『駿府記』の記録によれば、「大坂の躰（てい）、三つに分る。大野修理・後藤又兵衛一組、木村長門守・渡辺内蔵助・真田左衛門佐・明石掃部助一組、大野主馬・長曽我部宮内少輔・毛利豊前守・仙石豊前守一組の由申さる」とある。つまり大坂城中は、当初から幾派にも分かれて、自らの力を削減し合っていたというのである。

宇治・勢多迎撃

大坂方の軍議は籠城と決した。幸村は、宇治・勢多迎撃を主張し、孫子の兵法にいう「逸を以て労を待つ」積極策をとろうとしたが、わずかに後藤又兵衛がこの策を推しただけで取り上げられるところとはならなかった。

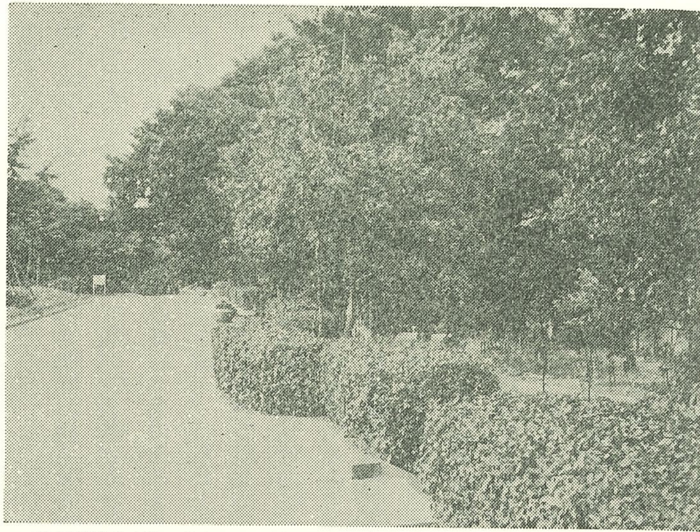
幸村は、九度山蟄居後間もない頃の父昌幸の問わず語りを、ふと心に思い浮かべた。「もし、

事が起これば、わしは、数万の兵を率いて尾張を征する。家康はあわてふためき、関八州から奥羽にまで兵を募ろう。時をかせいで兵を引き、二条城を焼き払って、勢多・宇治の陣に雌雄を決する。わしは必ずや徳川を滅ぼしてみせようぞ」

恐らく、それこそが、当時の昌幸の見果てぬ夢だったに違いない。幸村は、己の策が、奇しくもその昌幸の遺志に一致しえたことを悟ると、思わず、快い父への追想の糸を手繰り寄せずにおれなかった。だから幸村は、宇治・勢多迎撃の策は、必ずしも受け入れられずともよいと思った。籠城戦は、むしろ、幸村の最も得手とするところである。とすれば、籠城と決したことにどうして不服のあるわけがあろうか。殊に、難攻不落とうたわれたこの大坂城の堅固さが絶対無二のものであることを思えば尚更なのだ。

『大坂夏御陣御手先勤方余録』には、「大坂の城は無双の要害にて、西北の方は淀川の水筋をうけ、東の方は平野川・河内川・巨摩川の水一つに落合、鳴野口にて又淀川・大和川一つに落合候につき、三方は天造の堅固にて、唯南一方少々坂ばかりにてさしたる要害御座なく候、これによって乾堀をほり、土居を築き、高津より玉造まで外郭の要害を構え、これを惣堀と名付け候」と記されている。

幸村は、その惣堀の南東、平野口黒門の外に、新たな出丸を構築することを考えていた。家康が、如何ほど野戦の強豪であろうと、この城攻めには、決してその強豪ぶりを発揮させはせぬの



幸村が出丸を築いたところ（真田山公園）

だと幸村は思う。父昌幸とともに、上田城で徳川の大軍を破った記憶の数々が、ありありと脳裡に蘇ってくるのを幸村は瞠めた。

出丸構築

大坂城は、かつて織田信長の大軍が八年にわたって攻囲したにも拘らず、ついに屈することがなかった石山本願寺跡の台地に、秀吉が財力の限りをつくして築いた巨城である。西に難波の海を見下ろし、北は天満川・淀川の自然の要害が遮り、東には幾筋かの大和川の支流を隔てた深田が続いて生駒の山並みに連なっている。そして、わずかに南側の一面だけが、なだらかな丘陵となって展けているのである。

『大坂御陣山口休庵咄』に、「真田左衛門

はどう思ったのか、玉造口御門の南、東八丁目の御門の東に一段高い畑があったのを、三方に空堀を掘り、塀を一重かけ、塀の向こうと、空堀の中と、堀ぎわとに、柵を三重に付け、所々に矢倉・井楼を上げ、塀の腕木の通りに、幅七尺の武者走りをつくり、父子の人数五、六千ほどで固めた」とあることで、幸村の築いた真田丸のようすがほぼ想像できそうである。

幸村は、城の南東隅に出丸を構え、自ら兵を率いて守ることを希望した。主戦場は、恐らく城の南面一帯となるであろうし、もし、山越えに大和方面から攻め登ってくる軍勢があるとしても、この南東隅の平野口を通らぬかぎり城内に攻め入ることはできぬのである。すなわち、この城のもっとも重要な地点が、この真田丸の位置であると見抜いたからであった。

この幸村の申出に対しては、秀頼譜代の側近の間に、いささかの疑義をさし挟む異論があったが、武略といい、家柄といい、幸村に匹敵する将は見当たらず、当人のたっての望みもあること故と、この出丸は、すべて幸村の手にゆだねられることとなった。わずかに伊木七郎右衛門が軍監として派遣され、石川肥後守康勝が加勢として真田丸の西後方に布陣することで、この一件は落着した。

大御所着陣

家康が駿府を出発したのは、慶長十九年（一六一四）十月十一日のことである。大坂挙兵の報せを受けた一日から、わずか十日後のことであった。その間、諸大名への指令は、いささかの手ぬかりもなくなし終えてあった。

この日は、家康の出陣を祝うかのような好天に恵まれた。家康の装束は、股引姿に羽織りがけ、足許は草鞋（わらじ）で固めるといった軽装で、まるで鷹狩りにでも出掛けるような身軽さであった。

あくる十二日には掛川着、十四日は浜松、十六日岡崎といった一日およそ五、六里の行程で、名古屋到着は、駿府出陣から六日後の夕刻となった。

家康の指令を受けた大名たちは、すでに、一糸乱れぬ活発な動きをみせていた。家康が駿府を発ったと同じ十一日、伊勢の諸勢を合わせた本多忠政が桑名を出陣、翌十二日、美濃勢を率いた松平忠明が亀山を、十三日には、藤堂高虎が津を発って伊賀の諸勢を集めた。佐和山の井伊勢は、早くも十四日に伏見着陣、十六日には尾張義直が名古屋を、森忠政が津山をそれぞれ出陣した。

家康は、その道中を楽しむかのように、悠揚迫らぬ脚どりで京都に入り、十月二十三日の夕刻に二条城に入った。同じ日、将軍秀忠は、伊達政宗・上杉景勝らの奥州勢の先陣のあとを追って江戸を出陣、家康が鷹狩りを楽しみながら、のんびりと軍を進めたのとは逆に、休息の時間も惜しんで遮二無二西上を続けた。そして、十一月九日に大津の膳所、翌十日に伏見城に入った。

二十余万の大軍を率いた秀忠の到着を待っていた家康は、翌十一日、早速、秀忠を二条城に呼び、本多正純・成瀬正成・板倉勝重・酒井忠世らの重臣を交えて軍議をこらし、十一月十五日を京都出陣の日と定めた。

十五日に二条城を発った家康は相変わらずの軽装で輿に乗り、木津・奈良・法隆寺を経る大和路をとって住吉に着陣、一方、秀忠は家康の歩度に合わせて、十五日枚方、十六日枚岡と、打合わせどおり河内路を経て、十七日の夕刻に平野の陣に到着した。

秀忠は、ただちに土井利勝を住吉の陣に遣わして連絡をとり、一気に総攻撃に移ることを力説させたが、家康は、それを押えて、じっくりと大坂方の出方を見守る持久作戦を指示したのだった。

家康は、自らの背後に、雲霞のごとくに集い参じた二十八万余の大軍に満足していた。いまだかつて、これほどの大軍を指揮したことはなかったと思い、同時に、これほど勝敗の帰趨の定まった戦さに臨んだこともなかったと思った。

家康は、自らが、すでに日本全土からの支援をえていることを信じて疑わなかった。この戦さこそが、民百姓から町人にいたる全ての人々を後楯として、応仁の乱以後、乱れに乱れた戦国の乱世に、真の平和を齎す大団円となることを希っているのだと思った。

真田丸攻め

鳴野・今福の合戦

家康が、秀忠の主張する強硬策を圧えて持久戦をとった作戦には、それなりの理由があったからである。

レオン・パシェスが著わした『日本切支丹宗門史』によれば、「内府様（家康）は、自分が大坂に来ただけで開城されるものと信じていた。彼にこの自信を持たせたのは、強力な軍隊よりも、久しく城中に巧みに放ってあった内通者がいたためであった。しかし、内府様の知らぬ間に、若干の謀反人が発見されて殺され、抵抗は意外にきびしかった」とある。

大坂方のなかには、かねがね幕府に内通していた者はいくらでもいたし、挙兵後は、ろくろく素姓の吟味もせずに、どしどし浪人の新規召し抱えをしたのだから、内通者は、それ以後もいくらでも送り込むことができたはずである。大坂方が、味方同士で疑心暗鬼し、つねに有効な連繋を欠いていたのは、そのためでもあった。

家康は、このことを念頭において、ことさらに神経戦的戦術を用い、拠点攻撃によって城内の

動揺を誘うという作戦を立てて戦端を切った。
すなわち、天王寺・茶臼山・今宮・伝法口など、大坂城を取り巻く十ケ所の要所々々に、城方と向き合った対城（ついのしろ）を築き、淀川の本流を堰き止めて、外濠の水源を涸渇させる策を命じたのである。
鴫野・今福は、この外濠の水の取入口にあたり、土嚢二十万俵や莫大な葦・茅の類が積みあげられて川どめ工事が始められると、城方では、どうしてもそのまま見過ごしておくわけにはゆかなくなる。
二十六日の未明に始まったこの合戦は、冬の陣での最大の激戦といわれるとおり、その日の夕刻にまでおよぶ長い合戦となった。
今福方面では、初陣の木村重成・老練の後藤又兵衛の城方が、寄手の佐竹義宣の軍勢を蹴散らし、第一・第二の柵を占拠するという勝利を収め、一方、鴫野方面では、渡辺糺・竹田永翁らの率いる一万二千の城方が、上杉景勝の五千の兵に押しまくられて大和川の外堤の線に退いて柵を構え直すという敗北に終わった。
この戦いは、結局一勝一敗の引き分けに終わったが、城方では、弱冠二十二歳の木村重成が男をあげ、後藤又兵衛の老巧ぶりにも絶大な信頼が寄せられた。また寄手では、上杉隊に、さすが謙信以来の勇猛ぶりとの讃辞が贈られたのだった。

奇策縦横

鴫野・今福の合戦を機として、寄手の動きは、次第に全線にわたって活発となる。
寄手は、竹束を楯とし、仕寄り道に身をかがめながら前進を続け、じりっじりっとその包囲網を縮めてきていた。そして、十二月初旬には、北は天満川、西は東横堀、南は空堀、東は猫間川の線、つまり、城方の惣堀の線近くにまでとりついてきたのである。
家康の本陣が住吉から茶臼山へ、秀忠の本陣が平野から岡山へ進められたのもこの頃である。すなわち、家康は、秀忠とともに、いよいよ大坂城とは目と鼻の所にまでつめ寄ったわけであった。
幸村が構築した真田丸の前には、小橋（おばせ）の篠山（ささやま）と呼ぶ小山がある。真田隊の兵が、毎日のようにその篠山へ忍んできて鉄砲を撃ち込むので、寄手の前田・松平・井伊の隊では、連日のように、三十人・五十人と死傷者が出る。
前田の将奥村摂津守は、この篠山を攻め取って手柄を立てようと、密かに手勢を率いて篠山に押し寄せたが、真田の兵は一人もいない。奥村が、してやったりと鬨の声を挙げさせると、それを待ちかまえていたかのように真田丸の塀の上に一人の武者が立ちあがった。驚いて鬨の声を中断した奥村の手勢に、その武者は、いきなり大音声を挙げて呼びかけてきた。
「只今篠山でときのこえをあげられたのは、加賀の軍勢とみた。追鳥狩りにでもこられたか。ふだんは雉子・兎の類も少しはいたが、おのおの方が大軍で城を囲み、昼夜騒動なさったので、み

などこかへ逃げ去ってしまって、いまは一匹一羽もいない。どうぞお引き取り下されい。ただし、このままではあまり御退屈だろうから、この出丸を一攻め攻めて御慰みなされ。このトリデを固めているのは、信州の住人、真田安房守の次男左衛門佐と申す浪人、はかばかしい備えもござらぬが、田舎の斧鍛冶に鍛えさせた矢の根少々用意しておる故、おのおの方重代の物具の実を御試しになってはいかが」

戯言に託した明らかな愚弄の声を耳にすると、奥村の兵は、その無念さが圧えられずに、われ先にと空堀に飛び込んで柵を破ろうと逸った。城中からは、矢・鉄砲が雨のように打ち注がれて奥村の兵は耐られずにうろたえ騒ぐ。

柵に登った例の武者が、「信濃山家の狩人が、雉子狩りにてかくこそうて、猪狩りには、とこそうて」とはやし立てる。他部隊の寄手は、これを聞いてどっと笑った。

前田隊の面目は、どうにもほどこしようがないのである。前田利常は大いに立腹し、命からがら逃げ帰ってきた奥村を即刻勘当してしまった。

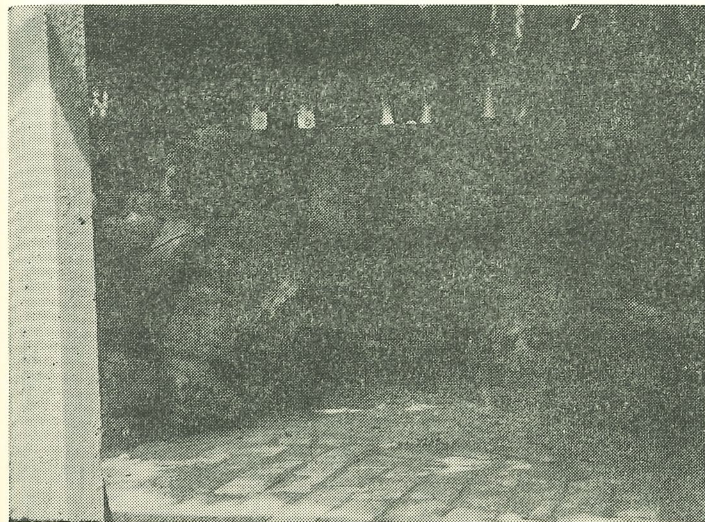
これは、『烈祖成蹟』や『幸村君伝記』に遺された話であるが、『大坂御陣覚書』や『山口休庵咄』にも別な話が記されている。

前田利常の先鋒本多政重・富正・成重らは、十二月四日の払暁、闇にまぎれて真田丸の堀際へ押し寄せた。このことを知った諸隊が、さては本多が先駆けかと、われ先にと城際へ押し出して

行った。真田丸では、かねてからこのことのあるのを予期していて、鉄砲や矢で、一斉に反撃してきた。この時、真田丸の西後方の城壁を守る石川康勝の兵が、誤って火薬桶の中に火縄を落とし、櫓が焼け落ちるという爆発を起こした。かねてから、城内に内応者がでる手筈だと聞かされていた松平・井伊・藤堂の諸隊が、その爆発を合図の狼煙と信じ込んで、われ勝ちに城際へ押し寄せた。楯や竹束も用意せずに、狭いところへ大勢でつめかけたので大混乱となり、城壁からの一斉射撃を受けて、たちまち多勢の死傷者をだした。その上、突如として木戸をあけて攻め込んできた真田隊の五百ばかりの手勢が、鬨の声を挙げて斬りかかってきたので、ますますその損害が大きくなり、堀に入った者は城へも登れず、後へも退けずに逃げ廻っているところを、さらに繰りだしてきた木村重成の軍勢によって、ついに一人残らず打ち果たされてしまったのである。

正しく、徳川の大軍が、神川の合戦や上田城の攻防で蒙ったと同じ苦い敗北の再現である。秀忠は、ただちに撤兵を命じたし、報告を受けた家康も「御気色少しく不快」の御ようすであったと『駿府記』は述べている。

この戦さの模様は、たちまち大評判となって諸方に伝えられたらしく、当時、京都で書かれたという『孝亮宿禰日次記』にも、「去る四日、大坂表で城責めがあった。越前少将（松平忠直）の勢四百八十騎、松平筑前（前田利常）の勢三百騎が討ち死した。そのほか雑兵の死者はその数を知らない」と記されている。



安居天神の境内にある真田の抜け穴

幸村は、この時、空堀にひしめく寄手に向かって柵の上から大木を落としたり、かねて用意の大岩を投げ込んだりといった楠一流の城砦戦法を用いたともいわれ、石川隊での火薬桶の爆発も、じつは狼煙とみせかけた幸村の奇略だったとさえいわれている。

いずれにしても、この真田丸での城方の大勝は、次第に包囲網を狭めてきた寄手の大軍に対して、一挙にその鬱憤を晴らすような久々の痛快事だったのである。奇策縦横の幸村の名は、いよいよその声価を高めたわけであった。

もぐら攻め

水道工事や道路工事の折に、思いがけない穴ぐらや隧道などが発見されると、大ていは江戸時代に掘

られた武家屋敷などの抜け穴だろうということにされる。大坂城を中心とした旧城内や惣構えのあった辺りでは、これらは、すべて幸村と結びつけられて「真田の抜け穴」と呼ばれた。

高野の九度山を訪れた時にも、かつては「真田の抜け穴」と言われる穴がいくつかあって、それらは、幸村が九度山の真田屋敷に蟄居していた頃、早掘りの訓練のために家臣たちに掘らせたものだろうといわれていたとのことであった。

現在、この「真田の抜け穴」の跡として遺されているのは、幸村の戦没碑のある安居天神境内と、宰相山三光神社の燈籠脇の二ヶ所であるが、以前は、玉造産湯稲荷の境内にも、全長五十間におよぶ穴が残っていたといわれている。また、御勝山（秀忠が陣を敷いたといわれる岡山）の史跡にも、以前は、それらしいいくつかの穴の跡があった。

安居天神境内の穴には、いまは子安稲荷の小さな祠が祀られ、三光神社の穴は、粗末な板囲いで蓋されたままになっている。

いずれもが、城内から真田が掘ったというよりは、寄手の側から掘ったのではないかと思われる。殊に、三光神社のあたりは、前項でのべた加賀宰相前田利常が、真田丸に面して陣を構えた場所であり、宰相山という地名もこれから起こっているのである。

家康は、この時、真田丸に面した前田・井伊・藤堂らの軍勢に、地下を潜って城内本丸の下まで穴を掘り、火薬類をつめ込んで爆発させ、一挙に大坂城を吹き飛ばしてしまおうというとんで

もない戦術を授けている。

これは、武田信玄などが、甲斐や信濃の城攻めの折に、幾度となく用いた「もぐら攻め」と呼ばれる戦術で、真田側では、もちろん、このことのあるのは承知の上であったから、あるいは、これを逆手に使って、得意のゲリラ戦法を展開していたのかも知れない。

真田丸では、家康のこうした戦法を気にするわけはなかったが、莫大な資材が集積され、一日一日と掘り進んでくる寄手のようすを望見する城方では、やはり、薄気味の悪い不安を覚えたことは確かである。これもまた、家康の、城方に対する巧妙な心理作戦だったのである。

難攻不落

だが、家康のそうした神経戦術にも拘らず、大坂城は、容易に落城のきざしをみせない。

家康は、この大坂の冬の陣において、名実ともに天下を掌握するというただそれだけのことが、如何に難事業であるかということを味わった。家康のつもりでは、天下は、すでにこの大坂の陣があってもなくても、明らかに家康のものであるらしい外観を備えていたはずである。

幾度かの合戦があり、また、随所で小ぜり合いが繰り返されながら、まだまだ大坂城はびくともしない。のみならず、損害は、遙かに寄手の側の方が大きいのである。

いまさらのごとく、あの織田信長が八年の年月を費やしてなお陥しえなかった石山の地の堅固さを思い知らされる思いだった。

家康は、小さな変化に富んだだけの、何処を向いても纒りのないような、それでいて、押し進んでいけば、次第に低いところへ落ち込んでいくような、その得体の知れぬ難波の地勢を呪った。そして、すでに何もかもでき上がってしまっている献立を前にしながら、どうしても手をつけられずにいる己の歯がゆさに堪えていた。

秀頼の、淀君の、そして、大野兄弟の、木村重成の、後藤又兵衛の、そのどの名よりも大きく真田幸村の名が家康の脳裡をかすめた。織田に譲り、豊臣に譲って、ようやく目前にしたこの天下を、なぜ真田ごとき一主将に妨げられねばならぬのかという思いがしたからであった。

張抜筒と銅連火

大筒・小筒

火縄銃のわが国への伝来は、天文十二年（一五四三）、種子島に漂着したポルトガル商人によってである。

当時は、戦国争乱の真最中で、諸大名は競ってこの種子島銃の入手と整備につとめた。伝来の地種子島や、商工業の中心地堺のほか、肥前の有馬、近江の国友・甲賀などに、多くの鉄砲鍛冶

が出現して需要に応じた。

美濃の斎藤道三が、長槍とともに用いて集団戦法に無類の強さを発揮したことや、織田信長が天正三年（一五七五）の長篠の戦さで、銃三千梃を装備して武田勝頼の騎馬隊を撃破したことは有名である。

また、紀伊根来寺の僧侶杉之坊が、種子島に渡って銃一梃を求め、火薬の製法と射撃法を学んで持ち帰り、のち、雑賀鉄砲衆を組織して一介の土豪を天下に名だたる一族にのしあがらせたことも著名である。石山本願寺が信長の八年間におよぶ攻撃に耐えきれたのも、その要害の地に加うるに、紀伊雑賀衆の鉄砲の威力に負うところが大だったのである。

火縄銃は、もともと、その玉の威力のみならず、やたらと大きな音をたてるところにも効果があった。

この城攻めでも、伊達隊が三四二〇梃、上杉隊が一四四七梃、細川隊が一四三五梃といった具合に、各大名が、それぞれ相当数の鉄砲を持ち込んでいたといわれる。それだけに、寄手の各隊が一斉に撃ち出す銃声は、まことに天地を引き裂くかとも思える物凄さであった。

これに対して、城方は、自費で鉄砲を持ち込めるわけもない浪人衆が大部分であったから、故太閤時代に城内に蓄えてあったものを使用するのが精一杯で、数のうえでも、射撃の腕でも、とうていそれに対抗しうるわけはなかった。わずかに、九度山時代から狩猟に親しみ、近在の猟師

数十人を引き連れて入城した真田隊だけが、これに抗しうる鉄砲衆を組織していたということである。

家康は、この多量の鉄砲のほかに、大筒と呼ばれる大砲の威力をも、この城攻めの神経戦に利用した。すなわち、この大坂の陣の始まる半年余りも前から、せっせと外国商人たちを通じて、この種の大筒や火薬・鉛玉などを買い込んでいたのである。

『台徳院殿御実記』の十二月十六日の条によると、「稲富（砲術方）が放ちし大筒、あやまたず淀殿の居間の櫓を打崩したり。その響き、百千の雷の落ちたるがごとく、側に侍りし女房七、八人たちまち打ち殺され、女童のなき叫ぶことおびただし」という有様で、それまでは、具足を帯びて城内巡視などをしていた強気の淀君も、さすがに恐怖心にとりつかれて和睦の機を覗うようになったという。

家康の砲撃戦術の真のねらいは、こうしたところに的を絞っていたのである。

疑心暗鬼

家康の用いた心理作戦は、次第にその効果をみせ始めていた。そのうえ、城内には、まだまだかなりの数の内通者がいるという噂もたって、ますます相互不信と疑心暗鬼の度を強めていった。

前田・井伊・松平の諸隊を向こうに廻して、真田丸であれほどの戦果を収めた幸村に対してさえ、いまだに、「関ケ原合戦で関東に敵対したとはいっても、真田殿は親がかりのことだから、

両将軍のにくしみも軽く、そのうえ、兄伊豆守(信之)・叔父隠岐守(家康使番、四千石、加津野市右衛門信尹)も将軍家へ奉公しているのだから奥意の程は計り難い」といった取沙汰をする者があるという有様であったから、他は、正しくおして知るべしといった状態だった。

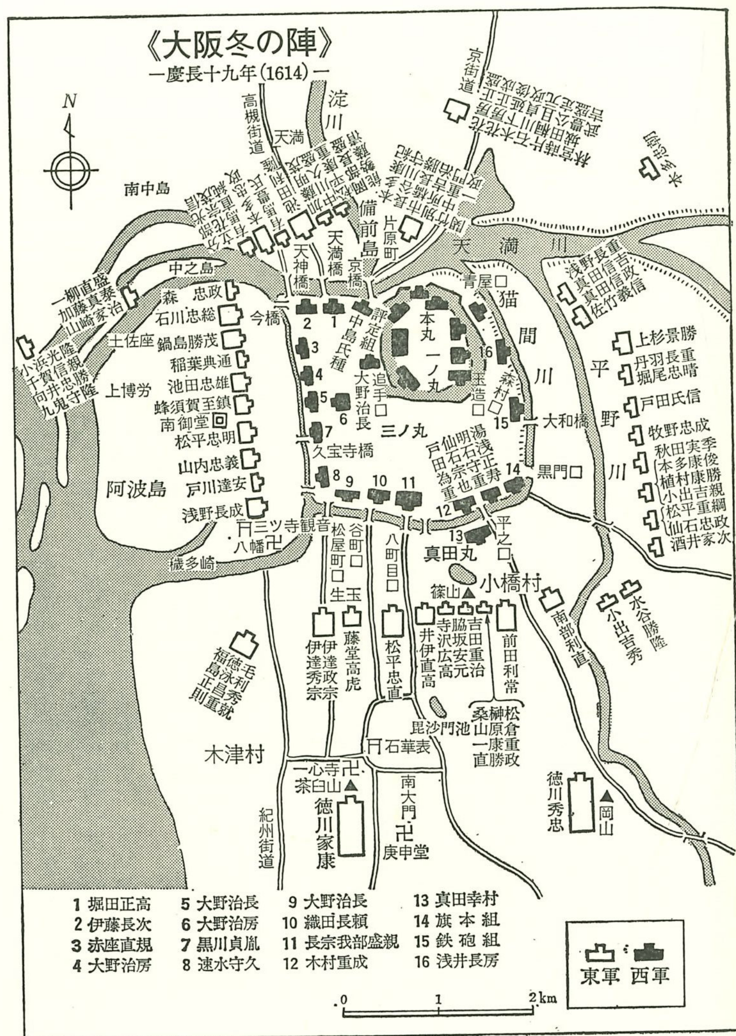
籠城戦には、まず人の和が第一である。互いが信じ合い、労苦をともにするといった覚悟が欠けていたのでは、とうてい長期間にわたって持ち堪えることは不可能である。

また、籠城には、外部からの援軍が必ずくるという心の支えも、やはり、欠かすことのできぬ条件の一つである。その二つのいずれもが、その時の大坂方には欠けていた。家康の心理作戦は、易々とその隙をついて城方の内部に喰い込んでしまったのだった。

地雷戦術

十二月十六日の夜半、塙団右衛門を将とする城方の一隊が、本町橋西詰に布陣する蜂須賀隊に夜討ちをかけた。

この塙団右衛門は、『立川文庫』では、身の丈に余る鉄棒を麻幹(おがら)のように軽々と振りまわす大豪傑として描かれているが、『山口休庵咄』によれば、じつのところは、せいぜい足軽大将といった程度の人物で、大坂入城の折など、「馬乗足軽覚えの者十騎づつお預け、物見役にて御座候」とある通り、当時も、大野治房の麾下に属して物見頭を勤めていたに過ぎない。団右衛門は、何とかこのあたりで男をあげねば城に籠った甲斐がないとばかりに、麾下の足軽共をひきつれて独断でこの挙におよび、不意を突かれた蜂須賀隊が二十人ばかりの死者のほかに、かなりの数の負



傷者をだしたのを見定めると、手勢をまとめてさっさと城内に引き揚げて来てしまったというのが実情である。そして御丁寧にも、かねて用意の「夜討ちの大将塙団右衛門」としたためた木札を城内の各隊に配って歩いた。

余りにも意図するところのみえ透いたその行為に、城方の者は、誰もが鼻白んだ思いで背を向けたが、主の大野治房としては、やはり、手柄は手柄として賞さぬわけにはゆかなかった。

この場合、こうした抜け駆けの功名は、籠城者の心理と統制を乱すものとして、むしろ厳重な注意を与えねばならぬことなのだが、すでに、籠城以来の激しい攻防戦によって齎された疲労が、そうした冷静な判断を下すことも適わぬまでに積み重ねられていたのだった。

幸村は、恥も外聞も構わず、ひたすら可能性という波に乗って自らの価値を知らしめようとした塙団右衛門の行為を肯定しようとは思わない。が、しかし、それすらもなしえないのが大部分の人間であることを思えば、必ずしも団右衛門を否定する気にもなれないのである。ただ、団右衛門が、果たして自らのその行為のあとに来るべき次の事態を予測しえていたか否かは尋ねるまでもないことだと思うのだった。

幸村は、「夜討ちには夜討ちを」と、寄手の側も、必ずや夜襲を仕掛けてくるであろうことを察し、密かに己の手兵を夜陰に乗じて城外に放ち、その要所々々にかねて用意の銅連火（地雷）をばらまかせておいたのだった。

案の定、夜討ちの仕返しをといきりたって攻め込もうとした関東方は、まんまとその網にかかって死傷算なき状態となった。すかさず、張抜きの大筒を持ち出して追い打ちをかけさせる。張抜筒も、銅連火も、幸村が、密かに九度山の閑居で研究を重ねてきた武器である。関東方の大筒にはかなわぬまでも、城方は、時ならぬ爆裂音に欝憤を晴らして歓声を挙げた。そして、これが、冬の陣の後半を飾るにふさわしい城方の久々の勝ちいくさとなったことはいうまでもない。

御本丸女中衆

城内には、十余万にのぼる軍勢のほかに一万ほどの御本丸女中衆がいたことは、前にも述べた通りである。

いつ何時、どうなるかも知れぬ城内に、一万人もの女中衆がいたということは、一体どういうつもりなのかと不審な思いがするのだが、当時の奥女中の記録である『おあむ物語』では、そのころの女性は、老いも若きも、敵味方のうちかわす大砲の響きで揺れ動く天守の中で、平気で火薬造りや弾丸造りに精だしていたというし、また、味方の兵が討ち取ってきた敵の生首にお歯黒を塗ったり化粧をほどこしたりといった細かい気遣いをみせながら、平然と生首の転がっている部屋で寝起きしていた、とも伝えている。

しかし、それは、所詮は、女の群集心理に支えられての異常事に過ぎず、一人が怯えだすと、たちまち、それが波のように広がっていく。あれほど気丈に思えた淀君までが、大筒の響きに恐れおののくようになると、誰もが和睦を望む思いに取りつかれて半狂乱の態となってしまう。

家康の策した心理作戦は、大坂城内の奥深く、ここでも、着々と実を結び始めていたのだった。

和議成立

信濃十万石の誘い

家康のさらにいま一つの心理作戦は、織田有楽・大野治長といった城方最上層部との和睦交渉である。

木村重成・後藤又兵衛の鴫野での勝利、真田幸村の真田丸での東軍大破、塙団右衛門の夜討ちと地雷火による圧勝という戦果はあっても、城方の形勢不利は誰の眼にも明らかな事実である。とすれば、和睦の交渉が成立するか否かには関わりなく、その交渉自体が、城内の士気を低下させる役割を果たすことになるのだ。

和議への誘いは、すでに、十一月の二十四、五日頃から持ちかけられていたといわれる。大野治長の部下だった捕虜が、家康によって城中に送り返されてきた目的は、家康の考えている和睦の条件を、直接、治長に伝えて説得を試みさせることであった。

さらに、数日後には、本多正純の使者が後藤又兵衛との会見を求めて城中に入った。また、塙団右衛門が夜襲を試みた前々日の十二月二十四日には、京都にいる家康の側室阿茶の局が、城中にいる常高院（淀君の妹）を訪ねて歓談している。

こうした一連の動きのなかで、家康の誘いの手が幸村におよばぬはずはありえない。家康側近の第一人者本多正純の許には、幸村の叔父隠岐守信尹（幸村の父昌幸の弟）がいるのである。

わざわざ申し入れます。真田左衛門佐が徳川家へ御忠節なさるよう、御才覚ください。そのために真田隠岐殿をそちらへ遣わされます。くわしいことは隠岐殿とよくよく御相談ください。左衛門佐の身上のことは、私が請合いますから、そのおつもりで、きっと御忠節なさるようお取り計らいください。隠岐殿と私との間にはへだたりは何もありませんから、御安心なさって相談してください。そのために私の自筆でこの手紙を書きました。こちらのことをけっして奇怪だなどとは思われますな。時期もちょうどよいと思いますから、急いで御手配ください。恐々謹言。

十二月十四日　　正純

本あわのかみ殿

これは、本多正純が、十二月十四日付で、前田家にいる弟政重に送った手紙である。恐らく、この手紙が、政重の手を経て、直接、幸村に届けられることを期待して書かれたものであろうと思われる。

『慶長見聞書』によれば、信尹は真田丸に幸村を訪ねて対面し、「その方の武名は、すでに天下に聞こえている。家康公に属したならば、信濃で十万石を下されるとのことである。御承知なら、本多上野（正純）から誓詞をよこすことになっている」とすすめた。

また、『真武内伝』にも同じ話が述べられており、幸村は、

「不肖の私を、過分の禄を以って招かれるのは、誠に有難いことです。しかし、秀頼公と、一旦約束を取り交わした以上、利欲をもって心をひるがえすことは、義士として恥ずべきことです。ことに、このたびの戦いは、勝利を得べき戦いではありません。幸村は、はじめから討死と思い定めております。万一、御和睦にでもなりましたら、領地の望みなぞはありません。叔父君の御扶持を受けてお仕えいたしましょう。しかし、戦さのある限りは秀頼公におつくしするほかありません。もはや、二度とはお越しになりませぬよう。これが今生の暇乞いです」

と語り、互いに涙を浮かべて別れたという。信尹は、その一部始終を家康に言上し、家康も、大いに感動したということである。

ともかく、幸村は、家康の誘いをきっぱりと拒絶したのだ。真田の家は、関ヶ原での西軍への加担にも拘らず、兄信之やこの叔父信尹によって立派に保たれているのである。幸村には、いまさら、父昌幸の蒙ったと同様な表裏者の汚名を浴びる愚を繰り返すいわれはない。というよりは自らの毅然たる拒絶によって父の汚名の濡れぎぬを晴らし、同時に、輝かしい武名によって真田の家の一層の隆昌を期すべきであるとの思いがこみあげていたに違いないのだ。

和睦の勅使

十二月十七日、茶臼山の家康の本陣に、二人の勅使が派遣されてきた。朝廷が、和睦の斡旋の労をとってもよいとの申入れであった。

秀吉は、生前、朝廷に対して、つねに太っ腹なところをみせて優遇措置を講じていたから、朝廷では、秀吉の死後も、豊臣家には並々ならぬ好意を寄せているというふうがみられた。

家康には、そうした朝廷の豊臣家への好意が気に喰わない。もし、朝廷の仲だちによって和睦が成立したとなれば、それだけで、朝廷の権威そのものが高まることとなろうし、同時に、その権威によって、和睦自体が、侵すことのできぬ神聖さを持つことになりかねない。

しかも、家康には、朝廷の力を借りるまでもなく、自らの手で和睦に持ち込めるあらゆる手を打ってきたという成算があった。

かつては、信長にしても、秀吉にしても、朝廷の権威を大いに利用することによって、自らの天下人としての権勢を強化させることに役立ててきた。

しかし、いまとなっては、家康には、もはやそのような姑息な手段を用いて権勢を伸ばさねばならぬ必要はないのである。家康は、朝廷からの勅使の申出を、きっぱりと拒絶したのだった。

客将無視

朝廷からの勅使が茶臼山の本陣を訪ねた翌日の十二月十八日には、和睦交渉は、はるかに慌しい動きをみせて最終段階に到達した。

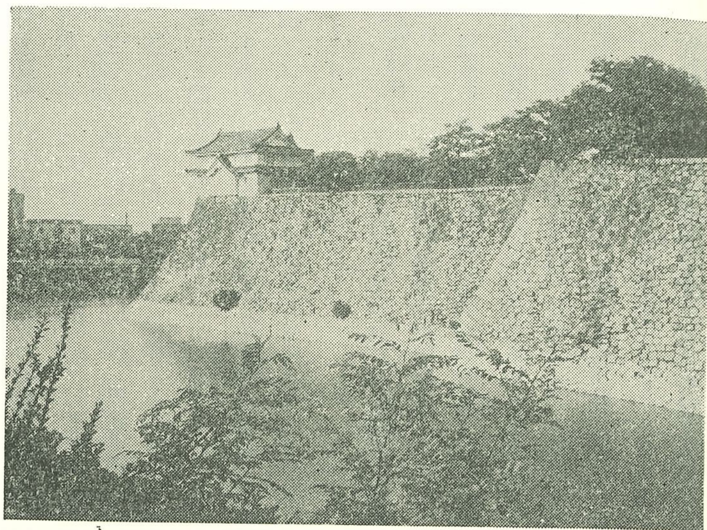
家康の側室阿茶の局と、側近の第一人者本多正純とが、淀君の妹で京極若狭守忠高の母でもある常高院と、はじめての正式交渉を持ったのである。

すなわち、寄手と城方とのいわゆる正式会談の名のもとに、和議は、客将たちの頭上を遥かに躍り越えてその成立の方途を打ち出そうとしていたのである。

本多正純の使者の申出を断わった後藤又兵衛の胸中も、叔父隠岐守信尹の誘いを拒否した幸村の心中も、いずれもが無視されたままに事が運ばれようとしているのだった。

いや、それは、総大将秀頼の意志をも、無理無体にねじ伏せようとしているとさえみえたのである。秀頼は、さすがに故太閤の第二世らしく、織田有楽や大野治長から聞かされる家康からの和睦の話には耳を貸そうとしなかった。

ただ、母淀君が、徳川方の大筒によって本丸の櫓を打ち崩された攻撃以来、その折の恐怖のた



大坂城の本丸内堀

めに、いつしか和睦説にとり憑かれてしまっていることには、かなり心を痛めているふうであった。

しかも、淀君は、秀頼の母としてばかりではなく、城内第一の実力者としても、和睦説を支持しようとしたのである。秀頼の生命を守るためなら、いますぐにでも人質となって江戸へ下ってもよいという母の立場と、強硬派の殆んどを占める客将への圧力とが期せずしてその権威を発揮したのだった。

かくして、この冬の陣の和睦は、家康の侍講林道春が、家康の出陣から和睦の成立までの経緯を記録した『大坂冬陣記』に、「十二月十九日、阿茶局・上野介（本多正純）、若狭守（京極忠高）陣所に至る。彼の

母常高院（淀君の妹）も城中より件の所に至り、また扱ひの儀を談合云々。晩に及び阿茶局・上野介帰り申していはく、大坂本城のみ、二之丸・三之丸は皆壊平すべし、然らば母（淀君）儀質たるに及ばず、修理（大野治長）・有楽（織田有楽）は人質を出すべし、大御所より本座（籠城中の譜代）・新座（新規召し抱えの浪人）異議あるべからず（咎めなし）の誓紙下されて、扱ひ相すむの由申上ぐ」と記されているとおり、あっけなくこの第二回の交渉によって妥結にいたる結果となる。

秀頼や、側近の木村重成、あるいは客将の後藤又兵衛・真田幸村らが案じた家康の腹黒さについては、いささかの穿鑿も協議もなされず、思いのままに、多勢の態勢の赴く方途に押し切られてしまったのだった。

十二月二十一日には、木村長門守重成が、秀頼の名代として茶臼山の本陣に出向き、家康直々の誓紙を受け取る。

血判取り

重成は豊臣秀次の近臣木村常陸助の子で、幼少の頃から聡明叡智の聞こえが高く、六角宰相義郷に招かれて実子のごとく寵愛されて育ったという。その生年が審らかでないのは、秀吉の養嗣子として関白の座にも登った秀次が、乱行の廉で職を奪われて高野に追われ、ついで自害を命ぜられた折に、父常陸助も秀次に殉じて切腹し、母右京大夫が妊ったままに故郷近江の馬淵に蟄居して重成を生んだためである。

五歳の頃から軍学を学び、孫呉の教えを修めて成長し、六尺を越える大兵となって、長槍の使

い手としては古今随一との噂さえあった。

しかも、母右京大夫が秀頼の乳母として淀君に仕えてのちは、秀頼の側近として、すなわち、その文武の才を買われて重用された偉丈夫であった。

重成は、この和睦の成立に当たって、秀頼の名代として立派にその責を果たしたばかりか、家康とも堂々とわたり合い、その誓書に捺された家康の血判の不鮮明さを詰って捺し直させる。

さらに、翌十二月二十二日、今度は、家康の使者が大坂城内に派遣され、秀頼ならびに淀君から、ふたたび謀叛を企てることはないとの誓紙をとる。

つまり、これで、和睦についての一切の手続きが完了したわけであった。

遺信に滲む幸村像

二ノ丸壊平

和睦の条件としては、さきに述べた『大坂冬陣記』の記載にあるとおり、大坂方は、本丸だけを残して二ノ丸・三ノ丸を取り壊すこと、そうすれば、淀君は人質として江戸へ下るにはおよばない。人質は、織田有楽と大野治長が差しだすこと。また、籠城中の

城方については、譜代の臣についても、新規召し抱えの浪人についても、ともに何の処罰もおこなわないという三点に絞られていた。

『大坂冬陣記』では、その最終的な交渉の模様を、「城中二之丸石垣・矢倉・堀以下、秀頼よりの人数を以てこれを壊ち埋むべきの由申上げられし処、大御所、仰せに曰く、よくよく念を入れられ之を崩すべし、但し奉行は若狭守（京極忠高）たるべき旨、仰せ渡さる云々」と伝えている。

つまり、惣構（三ノ丸の囲み）の石垣や矢倉の破壊は寄手の方でおこなうが、二ノ丸については、城方の人数によって行なうという取り決めがなされたのである。

この致命的ともいえる二ノ丸・三ノ丸の壊平が、じつは、家康からの要求ではなく、大坂方からの申出であるところに、如何にも合点のゆきかねる不審な思いがするのだが、これには、淀君や大野治長の密かな思惑が秘められていたわけなのであった。

淀君や大野治長の思惑では、寄手の側で破壊する惣堀その他は、もともとこの冬の陣の直前に急造したものに過ぎず、寄手によってどのように破壊されようとも、いざとなれば、またいつでも復旧することが可能であり、二ノ丸の堀や石垣・矢倉を城方で破壊するとの約束をとりつけておきさえすれば、いくらでも手加減を加えて時をかせぐことができるという見通しに立っていた。そして、なんとか理屈をつけてその壊平を引きのばしているうちには、家康も、老齢のこと故、健康を損ねていまほどの矍鑠さはみられなくなろうし、あわよくばその死を期待することす

ら可能なはずだというのである。

城方は、こうしたあまい皮算用の上にたって、家康にまんまと一杯喰わせたつもりでいたが、家康は、そうした城方の思惑は百も承知で、さらにその裏をかくような奥の手をみせたのである。

家康は、和睦成立の翌十二月二十三日から、ただちに突貫工事に移らせた。その禄高に応じて工事の人数を割り当てたが、本多・井伊・松平らの腹心の大名たちには、その割当ての人数をはるかに上まわる人数を出させて工事を急がせた。これをみた他の大名たちも、家康の覚えを悪くしては不利であるとの判断から、挙って、より多くの人数を繰り出して工事を急がせたのである。大名たちは、作業を三交代にも四交代にも強行させたから、わずか二日で城の南側一帯の惣堀の線は埋めつくされてしまうという驚くべき速さで工事は進んだ。

久々に訪れた平和を味わい、のんびりと手足をのばしていた城方は、呆気にとられて寄手の作業ぶりを見守っていた。

ただし、幸村については、『浪花武鑑評判』に、つぎのような逸話が述べられているので紹介しておきたい。

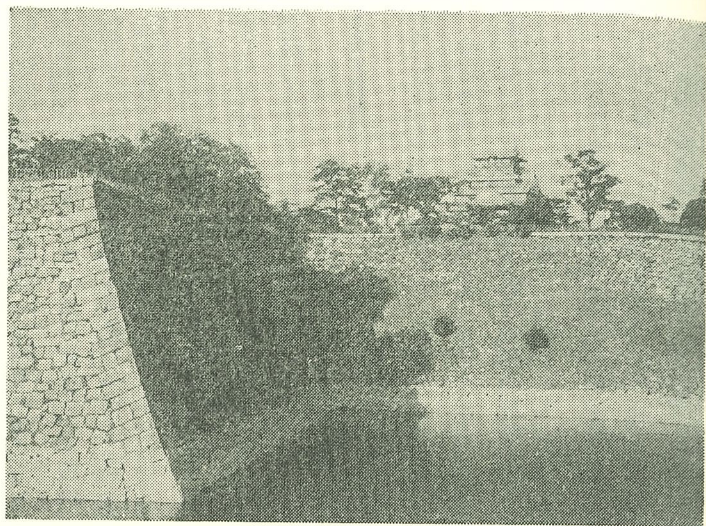
真田丸は、三ノ丸の外にあったから、寄手の作業でまっさきに破却されてしまった。材木は、翌日、秀忠の本陣岡山に運ばれる手筈だったが、幸村は、夜の間に塀や櫓の材木、並びに砦内の

建物の材木の全てを城中に取り入れてしまった。これを聞いた秀忠は、その日一日機嫌が悪かったということである。

ともあれ、家康は、この作業を満足気に見やり、各大名の任じた工事奉行を呼び集めて、「明年の春ごろまでは在陣の覚悟をしておけ」と、含みのある言葉を伝えたうえ、秘かに本多正純には、「惣構はいうにおよばず、二ノ丸の作業まで寄手の人数で済ませてしまえ」と命じたということである。

惣堀や三ノ丸の囲み・矢倉などの壊平は割合に簡単な作業で済むが、二ノ丸の堀は幅が四十間から五十間にもおよぶ故太閤自慢の造りであったから、工事はかなりの困難を伴うものであった。城方が、容易に作業に取りかかろうとせぬ虚に乗じて、家康の意を帯した本多正純は、「寄手方では約束どおり惣構を破却したが、城方では一向に作業が進まぬとお見うけする。二ノ丸は城方が破却するとの約束だが、これではいつ完了するとも見当がつかぬ。城方の作業が済まぬうちは、遠国から集まっている寄手の人数は、一向に帰国することもできず、大いに迷惑であるから、城方の作業の手助けをさせていただこう」と申し入れ、ただちに寄手の総人員を投入して二ノ丸の堀・矢倉・石垣などを毀し始めた。

驚いた城方は、それでは約束が違うとばかりにいきまいたが、家康は、すでに本多正純に意中を含めて二条城に引き揚げ、秀忠も岡山の本陣で居留守を使って、一向に真面目な返答をしよう



大坂城内堀から天主閣をのぞむ

とはしない。大野治長・織田有楽はいうにおよばず、淀君からも次々と使者が派遣されるが、本多正純は、言を左右にして要領をえぬふうを装いながら、その抗議にはおかまいなくどしどし作業を進捗させる。

城方は、ようやくにして家康の術中に陥ったことを悟るが、すべてがあとの祭りというほかはなく、余りにも城方を小馬鹿にした仕打ちだと地だんだ踏んで口惜しがるのが精一杯という実情だった。

こうした作業が約一ケ月にわたって続けられ、あと数日で全工程が終了すると見通しをたてた秀忠は、翌元和元年（一六一五）正月十九日に伏見城に入る。家康は、二条城で新年を迎えると、正月三日には、すで

に京を発って駿府への帰路についていた。
途々、大坂からの工事の進捗を知らせる報告をうけながら、鷹狩りなどで時日を費やし、ゆっくりとした足どりで駿府へ帰着したのが二月の十四日。秀忠も同じ二月の十四日に江戸城に帰着している。
和睦が成り立ち、戦いは一応治ったとはいうものの、家康は、今度こそは一気に秀頼を攻め滅ぼしてみせるという期待に、秘かにその老いの胸をはずませながら駿府へのゆったりとした道中を楽しんでいたに違いないのだった。

かくして大坂城は、『金地院崇伝書状』にもある通りの「堀埋まり、本丸ばかりにて浅間しくなり、見苦しき体にて御座候」といった哀れな裸城となったが、それで

よろず気遣い

も、しばしの平和が齎され、敵味方の区別なく、互いに交信し交流し合うことも可能となった。
幸村が姉村松（信州真田家の重臣小山田壱岐守茂誠の室）の子小山田主膳之知（ゆきとも）と幾たびかの面会を重ねたという事実は、幸村の故郷の姉への便りによって明らかである。

たより御ざ候まま、一筆申しあげ候。さても〳〵こんどふりよ（不慮）の事にて、御とりあひ（戦い）にあひ成り申、われ〳〵こゝもとへまいり申候。きつかい（奇怪）とも御すいりやう（御推量）候べく候。ただし、まづ〳〵あひすみ、われ〳〵もし（死）に申さず候。御け

さん（御見参）にて申たく候。あすにかはり候はしらず候へども（明日にも情勢がかわるかも知れませんが）、なに事なく候。しゆぜん（主膳）どのにも、さい〳〵あひ申候へども、こゝもととりこみい申候まま心しづかに申うけたまはらず候（ゆっくりお話をしたことはありません）。こゝもとなに事もなく候まゝ、御心やすく此もの（使の者）いそぎ、たちながら申入候まま、さう〳〵申候（取急ぎしたためました）。かさねて申入候べく候（重ねて後便いたします）。かしこ。

正月廿四日　さへもんのすけ

むらまつへ
まゐる

この便りには、二つの重要な事項が含まれている。その一つは、幸村の籠城が、真田の一族にあるまじき行為として、故郷の真田の家に迷惑がおよんではいないかと詫びていることであり、いま一つは、明日にも情勢が変わってふたたび戦さが持ちあがるのではないかと予期していることとである。
恐らく、幸村は、家康の駿府帰還の折にも、忍者霧隠鹿右衛門に密令を与えて、密かに家康の

動静を探らせていたに違いない。そして、家康の真意の何たるかをいち早く嗅ぎ当てていたに相違ないのだ。

幸村が、大坂方の再戦を予知し、すでに心に死を決していたことは、女婿の石合十蔵に宛てたつぎの便りからもその事実を知ることができる。

父子事御安事、作兵衛方迄御尋尤候。我等籠城之上は、必死に相極候間、此世にての面談は有レ之間敷候。何事もすへ（幸村の女(むすめ)）こと、心に不レ叶候共、御見捨無レ之やうに頼入候。委者惣右可レ申候。謹言。

二月十日　　真左衛門佐（花押）

石合十蔵殿

大坂冬の陣での武功の第一は、確かに真田丸の守将幸村であった。しかし、幸村は、この便りにもみられるように、温厚で柔和な人柄でもあったのである。

大言壮語する割には、その働きぶりが充分ではなかった他の武将たちより、無口で穏やかな態度からは予測もつかぬ目ざましい活躍を示した幸村の方が、秀頼からの厚い信頼をえたであろう

ことは明白である。

そして、それが、城中の諸将の妬みを受ける因となったであろうことも、また、容易に想像のつくことである。

東軍真田勢の将として城攻めの軍に加わっていた小山田之知は、故郷上田に帰陣した後、その後の幸村の身辺を見舞う便りを送る。

幸村は、その便りに対して、つぎのような返書をしたためてそれに答えているのである。

遠路預二御使札一候。其元相替儀無レ之由、具承、致二満足一候。爰元(ここもと)におゐても無事に候。可二御心安一候。我等身上之儀、殿様（秀頼）御懇比(ねんごろ)も大かたの事にては無レ之候へども、万気遣(よろずきづかい)のみにて御座候。一日一日とくらし申候。面上にならで委不レ得レ申候間、中々書中不レ具候。様子御使可レ申候。当年中も静に御座候者、何とぞ仕、以レ面申承度存候。御床敷(ゆかしき)事山々にて候。さだめなき浮世に候へ者。一日さきは不レ知候。我々事などは浮世にあるものとは おぼしめし候まじく候。恐々謹言。

三月拾日　　真左衛門佐

信繁（花押）

小壱岐様
同主膳殿
御報

尚々、別紙に可二申入一候へども、指儀無レ之候。又御使如二存候一、少用取乱申候。

早々如レ此候。何も追而具可二申入一候。以上。

「よろず気遣いのみ」多くて「一日一日とくらし」ている幸村が、この時、心に描いていた思いは、果たして如何なるものであったろうか？　「さだめなき浮世」に「一日さきは知れぬ」と覚悟を定め、「少なからず取乱した」城中の諸用を取りしきりながら、来たるべき再挙での華々しい『武』の昇華に向かって、歩を運ぼうとしていたのではあるまいか？

その証拠に、京都所司代板倉勝重は、幸村のこの便りに遅れることわずか二日後の三月十二日、いち早くも、大坂方に再挙の企てありとの第一報を駿府の家康の許に報じているのである。

幸村の病苦

幸村のこの時の三通の便りには、自らの健康状態に触れた言葉は一切使用されてはいない。大坂出陣以前の九度山からの便りに、「歯なども抜け、髪なども黒いところはあまりなく」とか、「遽かに年が寄って、ことのほかの病身となり」とか、「大草臥のありさま、御推察以上」とかといった調子で「うそかじけたる」さまを述べていたのとは大違いである。

恐らく、これは、幸村の病弱ぶりが一層深刻なものとなり、来たるべき再戦での死を期した活躍を遂行するためにも、決してその病苦を洩らしてはならぬとの思いに憑かれていたためではないかと推察される。

幸村の病は、恐らく労咳ではなかったのか？　死を予期した人物が、その病苦を乗り越え、凄まじいまでの働きを示してその死を飾ろうとする逸話は、古今東西、数多くの事例を挙げることができるのである。

幸村をその事例に当てはめようというわけではないが、幸村が、やはり病に苦しんだであろうことは、さきの九度山からの便りによって明らかであるばかりではなく、そのよろずに気遣いをみせる性格から推し量って、のちに述べる大坂夏の陣での道明寺の合戦への幸村の遅参の謎が、その幸村の病苦によってのみ解き明かしうる可能性を提示しているかに思えるからなのである。

再戦近し

冬の陣の和睦は、家康にとっては、二ノ丸・三ノ丸の破壊こそがその目途とするところであり、ふたたび起こるであろう戦いの時にこそ一挙に城方を潰滅させようとの目論みによるものであった。

だから、家康は、駿府への帰還の途次に、早くも近江の国友村に立ち寄って、百五十匁筒一〇梃・百二十匁一〇梃・百匁筒三梃の大筒を注文している。家康は、この時すでに七十四歳、誰の

目にも、明らかに事を急いでいるさまが読み取れるのだった。
とすれば、大坂方とてじっと手をこまねいているわけにはゆかぬ。ましてや、その統率は、有楽や治長の手で律しうる状態ではないのだ。血気にはやる連中のなかには、早速壊されたばかりの惣構の復旧にとりかかる者や、埋められた二ノ丸・三ノ丸の堀を掘り返しにかかる者が現われるといった始末だった。

世間には、早くも再戦近しの噂が広まり、近郷近在の住民たちの動きも日毎に慌しさを増していくようであった。

長門の萩にいた毛利輝元が、上方にいる家臣にあてて、「近く大御所がふたたび上洛されるとの風聞が流れているがまことであろうか。また、将軍の上洛についても同様な噂がしきりである。ともかく様子がわかり次第、くわしく報告してほしい」と指示したという話は著名である。

挙兵再び

有楽退城

大坂方のこの慌しい動きに対して、家康はふたたび無理難題を吹っ掛けてきた。血気の余りに惣構を復旧しようとしたり、二ノ丸・三ノ丸の堀を掘り返そうとしたことが、家康に、願ってもない口実を与えてしまったというわけだった。

こうした不穏な世情を打ち棄てておくわけにはゆかぬから、秀頼が大和へ国替えをするか、あるいは、大坂城での新規の召し抱え浪人たちを追放するか、そのいずれかの道を選ばぬかぎり、大坂方に恭順の意思があるとは認め難いというのである。

明らかに、家康の大坂方への挑発であり、無理矢理再挙へ追い込もうとした謀略であったが、大坂方は、まんまとその策に乗せられることとなるのである。

織田有楽や大野治長が、如何に口を極めて逸りたつ者どもを慰撫しようとつとめてみても、騎虎の勢いとなった城方の血気は、どう取り鎮める術もない段階にまで昂まりつめていたのだった。

織田有楽は、ついに、「城内では、もう誰一人として自分の意見に従ってくれる者はなくなった。これ以上城内に残っていても意味がない」といい残して城を出る。

だが、城内筆頭人としての大野治長だけは、この絶望的な危機に際しても、なおも、何とか豊臣家の断絶への暴挙を喰いとめねばならぬというその責務を擲ってはいなかったのである。

ところが、そうした危急存亡の折も折、治長は、宿所への帰路、事もあろうに城内で刺客に襲われ、幸い命をとりとめはしたものの、相当な重傷を負うという大事件が持ちあがるのである。

『駿府記』によると、治長を刺した下手人は、弟大野治房の従者であるとの噂が専らだったとされており、城内の内紛が、如何に深刻なものであったかが察せられる。

しかも、治長の重傷加療の間隙を突いて、城内の慎重論の悉くが封殺され、ついに秀頼再挙の陣触れが高らかに打ち鳴らされる結果となったのだった。

客将四天王

元和元年（一六一五）四月十三日、大坂城内本丸において、秀頼の再挙を決する大坂方の軍議が開かれた。

この軍議に客将として呼ばれたのは、長曽我部盛親・真田幸村・後藤基次・毛利勝永の四名である。いわゆる、客将四天王と呼ばれる四名だけが、辛うじて軍議に参加しうる資格ありとみなされていたわけである。

刺客によって深傷（ふかで）を負った大野治長も席に連なり、刺客を放ったと噂された弟の治房も加わっ

ていた。

『明良洪範』や『武徳編年集成』は、この時、幸村がつぎのような策を主張して容れられなかったことを伝えている。

「当城は天下の名城であるが、いまは本城の外は塁城がない。このうえは、秀頼公が早く上洛をとげられ、伏見城を奪って、ここに兵五千ばかりを抑えに置き、宇治・勢多の橋を引いて総軍がここに陣して威勢を示せば、味方に加わる者も多くなり、必ず御運が開けましょう。また、御運はともあれ、一度洛中の御政治を行なわれ、天下の主となられれば、末代までの名聞でございましょう」

長曽我部・後藤の両将が幸村のこの献策に同意したが、大野治長が強く反対し、譜代の将たちが固執する再度の大坂決戦策によって押し切られてしまったのである。

幸村は、衆議が終わって退出する時、「修理は、秀頼公を大事に思って御出馬を止めたのだろうが、さてさて戦いのことには疎い御仁だ。いたしかたない」と呟いたという。

『ヤソ会士日本年報』は、当時の本部への報告書が、「真田左衛門・後藤又兵衛及び、はなはだ善きクリスチャン明石掃部ジョバンニの三人が、野戦をもって勝敗を決することを協議した。城は二重の城壁を破壊されて防禦の方法がなかったからである。この優勢な軍隊の評判を聞いて、付近各地の商人は恐怖を抱き、各自、もっとも大切な品物を荷造りし、危険を逃れて付近の諸国

に避難している。また、秀頼が、その軍勢で帝都を占領しようとしているという風評が立ったので、都の人も恐れを抱き、その家を捨て、内裏の宮殿に入った。この内裏は、すべての日本人にとって、神聖にして犯すべからざる特権地であるから、その庭に天幕を張り、この大戦争の結末を見るまで、ここに留ることとした」と、その模様を伝えていたことを述べている。

秀頼の再挙の折の軍勢は、冬の陣での城方の人数を遙かに凌ぎ、じつに十七万以上の多きに達していたといわれる。城内筆頭人の大野治長が、城の蔵を開いて金銀・米などを思うままに持ち出し、新たに一万二千にのぼる浪人たちを、妻子共々大坂に住まわせたからだという。

このころ、高野山の衆徒や寺領内の地士たち多数が、大坂城に馳せ参じて真田の手に加わったという見落とし難い高野での記録が、高野山『高野春秋』の記載のなかの一つとして遺されている。

腰兵粮の心意気

家康・秀忠の指令のもとに、続々と馳せ集まる徳川勢の動きには、いささかの無駄も感じさせるところがなかった。

裸城を相手の今度の戦さが、短期決戦となるであろうことは、誰にも容易に予測されることであった。『大坂御陣覚書』では家康が、集まった軍勢に向かって、「今度は手間もいるまじく候間、惣軍小荷駄も無用につかまつり、三日の腰兵粮ばかりにてまかり出づべし」との指示を与え、自らの支度も、わずかに米五升・干鯛一枚・味噌・鰹節・香の物だけを用意させ、それ以外は、一

切余分に用意させなかったと伝えている。

そして、家康は、四月二十八日には、早くも大坂へ出陣しようと言い出した。秀忠が、加賀・越前・奥州の軍勢がまだ到着していないから、それらの到着を待って出陣した方がよいのではないかと反論すると、「いやいや、野合の合戦というものは、人数の多寡によって決するのではない。敵が何万いようとも、味方に二、三千もの軍勢があればそれで十分」と、さすがは名にしおう野戦の雄らしい自信と意気ごみで秀忠を煙に巻いた。さながら、若い秀忠と所を替えたような家康の急ぎようだったのである。

歴戦四十八回、およ



豊臣秀頼画像

そ六十年におよぶ経戦年数を持つ家康にとって、七十四歳の今度の戦いこそが、その生涯の最後を飾るにふさわしい大合戦であるだけ、その意気込みには凄まじいまでの気魄が籠っていたのだった。

先陣争いの功罪

家康・秀忠らの出陣は、結局は五月五日ということになったが、東西両軍の小ぜり合いは、すでに四月二十六日にその戦端を切っていた。

大坂城周辺での防戦のみでは勝機薄しとみた大坂方では、大野治房の兵約二千が暗峠（くらがり）を越えて筒井正次の守る大和郡山城を奪い、翌二十七日には町中に放火して引き揚げた。

さらに、翌二十八日には、今度は商人の町堺に攻め込んで火を放った。表向きは大坂方に協力するふうにみせながら、ひそかに徳川方にも通じていたことへのみせしめのためであった。

二十九日の明け方、泉南樫井（かしい）での合戦は、この大坂方と、徳川方の和歌山藩浅野長晟隊との遭遇戦で、いわば、大坂方の堺焼討ちの続きである。浅野家は、藩祖長政の正室が、故太閤の正室北政所（きたのまんどころ）の実妹であり、豊臣家とは、特に深い因縁がある。にも拘らず、前年の冬の陣にも、この秀頼の再挙にも応ぜぬばかりか、徳川方に加担して軍を動かすなぞもってのほかとの恨みが城方にはある。

大野治房を将とする二万の軍勢が城を出、寄手の大軍が集結せぬうちにこの浅野隊に先制攻撃を加えようというのが、この樫井の戦いの狙いだった。

総勢五千の浅野隊は同日早朝に和歌山を発して大坂に向かったが、優勢な大坂方が間近に迫りつつあることを知ると、にわかに兵を退いて地の利を占め、樫井を中心とした万全の迎撃態勢を整えてその先鋒の到着を待ち構えた。

この時の大野治房隊の先鋒が、塙団右衛門と岡部大学。二人は、互いに先陣の功を争い、本隊との連絡を無視して猪突猛進を続けていたから、優勢な本隊とは、はるかに距離を隔ててしまったことにも気付いてはいなかった。

待ちうけた浅野隊は、一斉にこの二隊の先鋒に雪崩れかかった。大学は手疵をうけて這々（ほうほう）の態で軍を退き、団右衛門はなおも突進して討死した。

大坂方の二万の本隊は、知らせを聞いて樫井に急行したが、浅野隊は意外な戦果に満足して和歌山へ引き揚げ、首のない団右衛門をはじめ、累々たる屍体の横たわる修羅場を眺めただけで大坂へ引き返した。

先陣争いの功罪には、合戦の大局を見渡すとき、測り知れぬほどの重要な意味合いがある。大坂方は、団右衛門という剛の者を失って、その貴重な戦力を落としたばかりか、あとあとの士気にも大きな影響を与える緒戦の勝利を徳川方に譲ったことになったのである。

赤胴赤指物

大坂城中筆頭人の大野治長は、合戦に備える各隊の求めに応じて、惜しみなく軍資金を支給した。この合戦が、豊臣家の存亡を決する最後の決戦であることは、誰もが眼を背けることのできぬ現実として肝に銘じていたからである。

真田の赤備え

幸村は、真田隊の全員に対して、指物・槍・刀剣・胴丸から手甲・脚絆にいたるすべてに、赤一色の軍装を整えることを指令した。部隊全体を、一つの色に統一して戦いに臨むことは、遠くは武田以来の伝統でもあったが、幸村には、それ以上に心に期することがあったのである。

すなわち、いまこそ、幸村の目指す真の『武』の何たるかを天下に知らしめる機が熟そうとしているのだ。そして、何にも増してその『武』の高揚にふさわしい色は、灼熱の陽光の輝きと、燃え盛る炎と、迸る血潮とを象徴する赤そのものでなくてはならない。

真田隊のこの赤一色の備えは、敵方の全軍に対して、また、陣を展げた味方の全てに対しても、その存在と奮迅の働きとを知らしめるに違いないのだ。

幸村は、自らの率いる軍勢が、あたかも、満開のつつじを見るかのごとく野を埋め、戦場狭しと疾駆する大絵巻を胸に描いていたのだった。

熟する戦機

寄手の大軍は、続々と、大坂の地を目指して迫りつつあった。

家康・秀忠の両巨頭が率いる主力部隊は、藤堂高虎の兵五千・井伊直孝の兵三千二百を先鋒とし、淀・伏見から河内路を進んで、茶臼山・岡山の両本陣にいたる作戦であった。

一方、奈良付近に集結した別働隊は、水野勝成の兵三千八百、本多忠政の兵五千を先鋒とし、松平忠明の美濃勢三千八百・伊達政宗の奥州勢一万がそれに続き、松平忠輝の率いる一万二千の越後勢が後尾を固めて進軍した。

家康は、大合戦に当たっては、つねに自軍を二分して戦場に向かわせるという策をとっている。大部隊を迅速に移動させるためには、目的地に向かって、二つに分かれた主力部隊が別経路をとって途中で合するのが上策であるというだけの理由ではなく、数少ない家康の敗戦、殊に武田信玄のために完膚なきまでに打ち破られた三方ヶ原の合戦の教訓が、敢て家康にそのような策をとらせるのである。

関ヶ原の合戦では、中山道を進んだ秀忠の軍が、途中、上田城に拠った真田昌幸・幸村父子に進路を妨げられて合戦の間に合わず、家康の率いる東海道部隊が思わぬ苦戦を余儀なくされて難渋したが、それでも、お家滅亡の窮極の危機に直面させられるというほどのことではなかった。

しかし、三方ヶ原の敗戦では、徳川の家は危うく潰滅の憂き目に曝されるところだったのである。

ともあれ、家康の作戦では、大和路を進んだ三万五千の軍勢は、道明寺付近で河内路を辿る十三万余の本隊と合し、平野・住吉方面から、城南に展けた広漠たる大坂平野に入って、家康が最も得意とする野戦に移るという手筈であった。

五月五日に京都を発した河内路の本隊は、家康・秀忠を擁して南下を続け、その日は四条畷の古戦場に程近い星田に第一夜の陣を敷いた。

また、同日奈良を発した大和路の別働隊は、関屋・亀の瀬の峠を越えて河内に入り、河内路からの本隊に歩度を合わせて、その夜は国分付近に野陣を張って翌日の合流に備えることとしたのである。

かくして、戦機は正に熟そうとしていた。寄手方の各陣所には、樫井の合戦での幸さきのよい緒戦の捷報が伝えられ、その戦意が一層煽りたてられたことはいうまでもなかった。

客将軍議

大部隊による合戦では、先制攻撃を仕掛けることが、まず何よりの大事とされる。

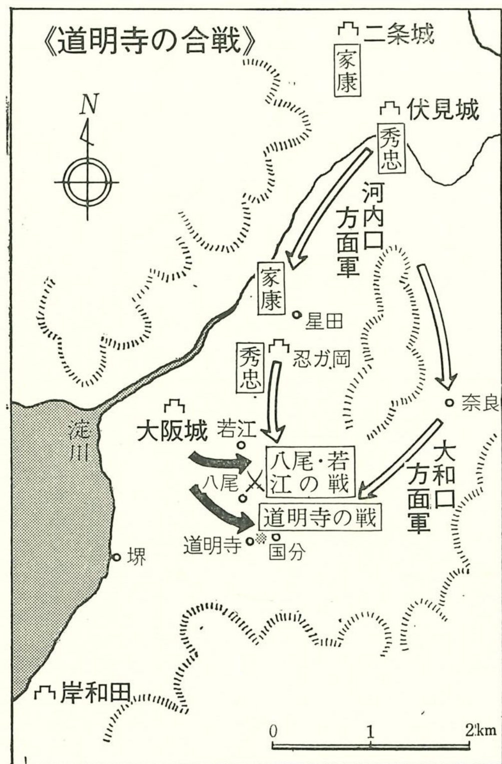
五月五日、天王寺付近に陣を構えていた真田幸村・毛利勝永の両将は、平野の陣所に後藤又兵衛を訪ねて、この先制攻撃についての策を凝らした。

冬の陣の折にもそうであったように、寄手の大軍が二手に分かれて大坂に迫ってくるだろうこ

とは眼にみえている。

三名の客将の軍議は、この二手の寄手が合流を果たす以前に、いち早く、そのいずれかを叩かねばならぬということで一致した。そして翌日の払暁を期して道明寺に合し、国分付近に展開して大和路からの軍勢を迎え撃とうという作戦が定められた。

だが、この作戦は、大坂方が、寄手の軍を大和路からの唯一の難所といわれる関屋・亀の瀬の狭隘な峠道に迎え撃ってこそ、初めて思惑通りの戦果が期待できるというに過ぎない。寄手の軍が、すでに国分付近での布陣を終えてしまったその時点では、勝敗の帰趨は



必ずしも大坂方に有利であるとはいい難いのである。
名だたる三名の客将の軍議が、何故このような見込み違いをしたのだろうか？　大坂方には、やはり、これらの客将を活かしえぬ何かがあったのであろうか？

この客将の軍議に先立つ城中での評議の模様が、徳川方の内通者によって、細大洩らさず家康に伝えられていたこともその因の一つであろう。だが、それにも増して大坂方の作戦に齟齬を齎した要因は、互いに主張を固執して我を張り合うという冬の陣以来の城内の不統一がその最たるものだったのではなかろうか？　しかも、その作戦の資料となるために蒐集した敵方の情勢が、内通者によって逆移入された偽りの情報であったとしたなら、城方には、やはり、勝機が廻ってくる機会は乏しかったに違いない。

すなわち、家康側の作戦は、つねに大坂方の作戦の一歩あるいは二歩前を着実に見透しながらたてられていたのだった。

道明寺の合戦

五月六日の子の刻(午前零時)に、後藤又兵衛は、二千八百の手兵を率いて平野を発った。

明け方近くに葛井寺(ふじいでら)に達した後藤隊は、毛利隊・真田隊の到着を待つ傍ら、斥候を放って敵情を探らせた。あに図らんや、大和路からの徳川の軍が、早くも眼前に迫って戦陣を張っている。驚いた又兵衛は、毛利・真田の友軍を待つゆとりもなく戦端を開かせた。

又兵衛は、すでに関屋・亀の瀬の峠を降りたっている敵方の軍勢を目前にみて、このまま、河内路からの大軍に合流させてしまってはならぬと思ったのだった。

関東方が陣を張る国分付近には、小松山と呼ばれる丘陵がある。後藤隊は、この小松山に登って鉄砲を撃ちかけた。時刻は、寅の刻(午前四時)を廻ったばかりだった。銃声を聞いて、関東方の先鋒松倉重政・奥田忠次らが小松山を奪おうとして攻めのぼってきた。

後藤隊は、三千に満たぬ寡勢で関東方の大軍と対等に戦い、奥田忠次を討ち取り、松倉重政の軍をも打ち破る戦果を挙げたが、さらに間を置かせず攻め上ってきた目に余る伊達隊の大軍には抗し切れなかった。

『伊達政宗記録事蹟考記』には、ついに小松山を西へ下り、最後の突撃を敢行しようとした又兵衛が、深田に騎馬の足を奪われ、徒立ちになって進むところを、伊達隊の鉄砲に胸を撃ち抜かれて討死する一部始終が記されている。後藤隊の従者が、又兵衛を担いで引き揚げたので、伊達隊は、ついにその首を取ることができなかったとも付記している。

時刻はすでに巳の刻(午前十時)に近く、後藤隊は、明け方からの六時間余にわたって執拗な死闘を繰り返したわけであった。又兵衛の奮戦が永く後世の語り草となったのは当然のことである。

薄田(すすきだ)隼人の率いる一隊が道明寺に到着したのはこの頃である。隼人は、冬の陣の折に、自らの

守る博労ヶ淵の砦を寄手に乗っ取られる不手際を演じ、城方の間にとかくの噂を立てられていた汚名を雪ごうと覚悟を決めていたから、三尺三寸の大太刀をふりかざし、自ら軍勢の先頭に立って、当たるを幸い斬りまくるという鬼神をあざむく奮戦をした。だが隼人の働きが如何にめざましいものであっても、所詮は多勢に無勢の劣勢を覆えすことはできない。又兵衛同様、数度の死闘をくり返した後、あえなく道明寺磧（がわら）において討死した。

しんがり戦法

八尾・若江の戦

同じ五月五日の子の下刻（午前一時）に大坂城を出た木村重成は、兵四千七百を率いて若江に向かった。やや遅れて城を発った長曽我部盛親の兵五千も、その側面から久宝寺を経て八尾方面に進んでいた。

この八尾・若江の一帯は、長瀬川・玉串川に挟まれた湿地帯で、道らしい道は殆んどなく、幾条かの畷道が、わずかに村人たちの通路になっているという地勢だった。

京都から淀を経て河内路に入った寄手の主力部隊が、大和路を進んでくる別働隊と合流するた

めには、わずかに生駒の山裾を縫って南北に通ずる東高野街道を南下する経路があるだけである。

折角の大部隊も、大部隊としての存分の活躍は不能であるとみた重成と盛親は、寄手の本隊が大和路軍との合流点である道明寺に達する以前に、その側面から攻撃を仕掛けて損害を与え、あわよくば、家康・秀忠の本陣をも突き崩そうと計ったのである。

ところが、夜明け前に、早くも前述の後藤又兵衛の国分への銃撃が始まり、河内路の先鋒藤堂隊・井伊隊が急遽同方面への南下を開始した。

前日来の雨もよいの空は晴れあがってはいたが、生駒の山並みに沿った山裾の一帯は、深い地霧にすっぽりと包み込まれて、それこそあやめもわかたぬ闇同然といった状態だった。

城方の長曽我部隊・木村隊と、寄手方の藤堂隊・井伊隊とは、その深い地霧を隔てて、互いに隊列を並べ合うようにして南下し続けていたのである。

このことに、最初に気づいたのは寄手方の藤堂隊であった。高虎は、前夜、家康から、この日は一路道明寺へ急ぐことを命じられていたので、一瞬開戦をためらったが、敵の大軍を眼前にしては、もはやそのような躊躇は赦されぬと決意し、その旨を報せる使者を後方に送ると、ただちに戦闘を開始せよとの命を下した。

藤堂隊と長曽我部隊・井伊隊と木村隊の激闘は、たちまち一望の湿地帯の全面に亘って繰り展

げられた。

泥まみれの死闘は、午の刻（正午）を過ぎる頃まで続けられた。藤堂隊では、重臣の藤堂高刑・氏勝・良勝・良重ら、部将六名が枕を並べて討死した。

『薩藩旧記』は、この戦いの結果を、「高虎殿の家中で、役にたつほどの人々は残らず討死をとげられた由」と伝えている。藤堂隊の損害は、それほどまでに大きく高価なものだったのである。

一方、木村隊と干戈を交えた井伊隊の損害も尋常ではなかった。重臣山口修理亮重政の嫡男伊豆守重信が木村長門守重成と組み討ちの死闘を演じて討ち果たされたのもこの時である。山口重信は、木村重成の妹婿で、肉親相討つ戦場の悲劇が、ここでもその非情な運命をこの義兄弟に負わせている。

だが、その木村重成も、午近くまで続いた激闘の末、井伊隊の部将庵原朝昌の長槍に刺されて討死した。重成は、この時二十三歳の若さであったが、すでにこの合戦での死を覚悟して、自らその甲冑に名香を焚き込んでいたといわれる。

二人の墓は、旧十三街道に面して、真向かいに向き合うような形で建立され、そのいずれを指すともなく『無念塚』という呼称で呼ばれている。

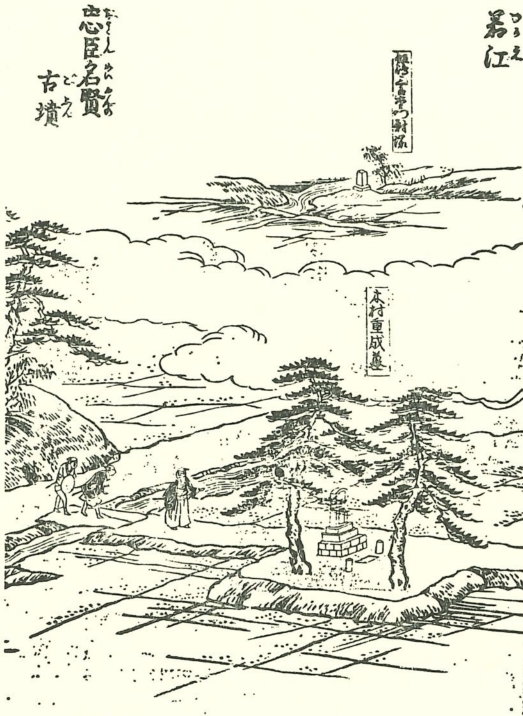
このように、寄手の損害は大きかったが、城方の損害も、またそれに劣らぬ手痛さであった。

木村重成をはじめとして、井伊隊のあげた首級は三百五十余、藤堂隊のあげた首級も五百八十余の多きを数えた。

真田隊遅参の謎

一方、同じ午の刻（正午）過ぎまで続いた道明寺の合戦場に、毛利勝永・真田幸村の両隊が到着したのはその頃である。

勝永は、その日の払暁、三千の兵を率いて天王寺の陣を発ったが、葛井寺付近までくると、後藤・薄田両隊の残兵が続々と前線から落ちのびてくるのに出会った。それらの兵を収拾しながら、勝永は、この葛井寺に陣を敷いて幸村の到着を待った。



木村重成討死の地若江（河内名所図会）

巳の下刻(午前十一時)ごろになって、真田隊がようやくこの陣に駆けつけてきた。幸村は、「深い霧のために、不覚にも時刻をとりちがえ、そのため、あたら後藤・薄田らを討死させてしまった。残念ながら、秀頼公の御武運も極まったと思われる」と、勝永と手を取り合って嘆いたと伝えられるが、この真田隊遅参の謎については、多くの史書の殆んどが、その真実に触れようとはしていないようだ。

当日は、確かに霧が深く、行動が自由でなかったには違いないが、後藤隊は、夜明け前には平野から小松山に達していたし、若江・八尾方面へ出撃した木村・長曽我部隊と相前後して大坂城を発った薄田隊も、巳の刻(午前十時)ごろには、すでにこの道明寺での合戦に加わっているのである。

従って、幸村遅参の最大の理由は、後藤・薄田らとの連絡の齟齬、あるいは後藤・薄田らの猪突をとどめえなかった意志の疎通の欠如を第一として挙げている。

また、一説には、幸村が、己の武名を後世に遺すために、その最大の競争相手である後藤又兵衛を、あえて見殺しにしてしまったという極論さえある。

だが、ほとんどの史料では、そのいずれをもとらずに、この日の濃霧が、真田隊の行動を妨げたための遅参として簡単に処理してしまっている。あるいは、わざとそのことには深入りせずに済ませようとしているのかも知れないが、これでは、余りにも通り一遍な感じがして物足りな

い。幸村の遅参には、必ずや何らかの必然的な理由があったはずだからである。

前夜、後藤又兵衛の平野の陣で、毛利勝永を交えて翌日の動きについての軍議を終えた幸村は、天王寺への帰陣の途次に、密かに徳川方の動きを探らせてあった霧隠鹿右衛門からの報告を聞いた。幸村には、その時、大和口からの寄手の大軍が、すでに関屋・亀の瀬の峠を越えて国分に陣を敷いていることが判ったはずだ。幸村は、すぐにも、後藤・毛利・真田の三軍が力を合わせ、片山・小松山・玉手山の丘陵に轡を並べて、一挙にこの寄手の大軍を大和川べりの隘路に追い落とすことを考えたに違いない。

幸村は、ただちに、鹿右衛門に、必ずや、毛利・真田の両軍が到着するまで、後藤隊の手勢のみで攻撃を仕掛けぬようにとの伝言を伝えさせようとしたのである。

幸村は、鹿右衛門を又右衛門の平野の陣に向かわせたあと、その場に蹲るようにして血を吐いた。九度山以来案じ続けていた病魔が、籠城以後の辛労の末に、こうした形で襲い掛かってこようとは思わなかった。体全体がけだるくはあったが、すべてが夜霧の柔らぎに包み込まれたように苦痛を伴っては来なかった。離間・裏切・不統一・焦燥・嫉妬・不信・狂奔といったさまざまな城内での出来事が、遠い追憶の中の一こま一こまでもあるかのように蘇ってくる。

幸村は、己の病を、誰にも悟らせてはならぬと思った。思えば大坂への出陣以来、いや、父昌幸とともに上田城を明け渡して以後というもの、幸村には、ほとんどのことが意のままには運ば

なかった。だが、その意のままにならぬことを踏み越え乗り越えていくところにこそ、自らが登りつめねばならぬ最も高き『武』の王座があるのだと思えた。

翌朝、病軀を鞭打つように戦線に馳せ参じた幸村は、又兵衛が、華々しく寄手の大軍と戦って討死したことを知った。勝永と手をとり合って秀頼の命運のつきたことを歎いたのはそのためである。

家康と伊賀忍者との繋がりは、織田信長と足利将軍家との関わりよりもさらに以前からのものである。又兵衛の許に走らせた信濃忍者の鹿右衛門は、家康の放った伊賀者たちの手によって討ち果されたか、あるいは、討ち果たされはせぬまでも、ついに又兵衛の許に伝えようとした幸村の伝言を阻まれたかのいずれかであったのだろう。

誉田の戦

さて、毛利勝永の軍と合した真田隊は、誉田廟（応神天皇陵）の東に進んで徳川方と相対した。

全員、赤一色の具足に身を固めた三千余の真田隊は、さすがは真田と、敵味方の全ての称讃をほしいままにする働きをみせる。このときの真田の相手は、精鋭無比を謳われる騎馬鉄砲隊八百を先頭とする万余の伊達政宗の大軍であった。その戦法は、展開した先頭の騎馬鉄砲隊が、駿馬を馳せながら馬上から砲火を浴びせ、打ちたてられた陣備えの乱れに乗じて、すかさず突撃して蹂躙するという集団戦術を得意とし、いかなる部隊も容易にまともには立ち向かえぬという猛攻

ぶりで鳴り響いていた。

だが、幸村の戦法もまた絶妙である。兵は機に臨んで変ずべきものであるが、幸村の戦術は、自然をもって不自然を撃つところに真価があるのだ。立木を利用し、わずかな丘の起伏を利用し、草の繁みも、丘の傾斜も、溝も、岩陰も、それらのありとあらゆる自然に身を潜めて伊達隊の接近に耐え忍ぶ。そして、騎馬鉄砲隊が眼前に迫ったその瞬間に、はじめて「かかれ」の号令とともに旗が振られる。いまかいまかと待ちに待った将兵が、一斉に槍を揃えて突きかかり、その側面に躍りかかる。

思わぬ逆襲に足並みを乱したのは伊達隊の方であった。たちまち敵味方入り混じっての乱戦となったが、得意の戦法に齟齬をきたした伊達隊は大きな損害を蒙って押し返された。真田隊は一団となって縦横に突きかかり、そして斬りかかっていく。幸村の子大助も、股に槍傷を受けながら敵の首をとり、馬の鞍にさげて奮戦した。

さすがの伊達政宗も、真田隊のこの猛撃におそれをなし、味方の損害の増大に驚いて兵を退いた。幸村も、その伊達隊を深追いさせず、合図とともに軍を返した。

この真田隊の勇猛ぶりと、早朝来の長い戦いの疲れにひるんだ徳川方は、道明寺から誉田に連なる石川沿いに陣を退いて動こうとしない。

一方、真田・毛利の大坂方も、誉田廟から葛井寺への丘陵を背に不気味に鳴りを鎮めて対峙し

たまま時を過ごす。

大坂方の連繋の悪さは、後藤・薄田両雄の討死という不祥事を招いたが、こうした事態は、必ずしも大坂方だけに限られた欠陥ではない。大部隊の合戦には、この種の不手際は、必ずといっていいほど付き纏うものである。

徳川方の大和路勢の後詰を受け持つ松平忠輝隊は、この日、諸隊に遅れて奈良を発し、途中開戦の報を伝え聞いて、急遽国分に向かって駆け通してきた。その強行軍の疲れもあってか、松平隊は、ついに一戦をも交えずに陣を敷いたにとどまった。

これについては、血気にはやる若い忠輝が伊達隊に代わって戦いをはじめようとしたにも拘らず、その老臣たちが、日も漸く傾き始めているので、もし戦いを挑んで夜になるようなことがあれば、地理を諳んじている敵に対して、味方の不利はいうまでもなく、あるいは敗戦となるやも知れない、それよりも、むしろ明日の城攻めで大手柄をたてる方がよいといって、強引に忠輝の意をひるがえらせたという話が伝わっている。

また、一説では、伊達政宗が、自軍の功名を忠輝隊に横取りされたのでは面目が立たぬと、味方討ちさえ辞さぬ構えで阻止してしまったともいわれている。

『北川覚書』の伝えるところでは、「政宗分別に、只今引足の敵に御かかりなられ候はば、少将殿（忠輝）即時に御勝あるべく候、さ候はば今朝政宗の人数の骨折候も、脇へなり申すべくと、

かくのごとく異見申上げ候」というわけである。

ともあれ、こうした状況で、両軍の対峙は未の下刻（午後三時）ごろまで続いた。大和路勢の全軍の統率を命じられていた水野勝成が、家康の譴責を恐れて、しきりに攻撃の再開を促したが、三万五千の徳川方は、ついに動こうとはしなかったのである。

撤退指令

未の下刻（午後三時）ごろになって、黄母衣の使番（秀頼の使者）と、筆頭人大野治長からの使者が駆けつけてきた。

八尾・若江の戦いでの木村重成の討死と、長曽我部盛親の敗戦を伝え、ただちに軍をまとめて城中にたち戻ることを指令してきたのである。

早朝来の激戦で、後藤・薄田らの勇将をはじめ、多くの死傷者を出して戦力の低下を自覚していた大坂方は、この指令を潮時に、ひとまず大坂へ引き揚げる策をとる外なかったのである。

だが、撤退の殿は、合戦以上にむずかしいものである。退くと悟れば襲い掛かるのが戦いの常であり、一旦膠着をみせた戦線では、なおさら至難な技といわねばならない。やはり、幸村以外には、この殿をつとめられそうな者はいない。

しかし、この後退の時にも、いずれの隊がしんがりをつとめるかで、大坂方の諸将の間には我こそはという争いがあったというし、真田隊がしんがりと決したことで、幸村の名が一層高まるであろうことを妬んだともいう。大坂方は、この期になっても、なおも、その結束の何たるかが

把握しえてはいなかったのである。

幸村は、諸隊を整然と後退させ、自らの赤備えの手勢にも、悠然と歩を運ばせながら、「関東勢百万も候え、男は一人もなく候」と呼ばわったといわれている。

大坂方の後退をみて、徳川方の総司令官ともいうべき水野勝成が、伊達政宗にその追撃を要請したが、政宗は損害の増大を理由にそれを拒否した。後詰の松平忠輝が、この時にこそ大坂方と一戦を交えようとして伊達隊との交替を申し入れたが、政宗はこの申出も断わった。そして、伊達隊の前方に出ようとした者は、味方と知りつつ、邪魔者は討てと命じて悉くを討ちとってしまった。

つまり、当時の武士気質というものは、城方といわず、寄手方といわず、誰もが功名を競うばかりで、全体のために行動するといった連帯意識は、殆んど持ち合わせてはいなかったというのが、その実態だったのである。

幸村・大助父子の訣別

決戦前夜

誉田の合戦での立役者は、何といっても真田である。しかも、その赤備えのいでたちが、一層果敢な奮戦ぶりを際立たせたのだ。徳川方の手勢の誰もが、その赤備えの一団に畏怖の念を抱いたことは間違いない。

もし、撤退の折のしんがりの一隊が赤備えの一団でなかったとしたら、政宗は、恐らく城方の背後に追撃の火の手を挙げることを命じたであろうし、他の徳川勢も、挙ってその退路に追い縋ろうとして猛攻を加えたに違いない。

が、ともかく、城方は続々と前線を離れて帰陣した。毛利・真田の両隊が先頭となって茶臼山に陣を敷き、大野治房が岡山方面の指揮官になって陣を張った。

大坂城内本丸では、帰陣した各隊から送り届けられる敵方の首が、秀頼じきじきの実検に供されていた。藤堂高刑・良勝・山口重信ら、名のある部将たちの首は、三方(さんぼう)に乗せて実検に供したうえ、三ノ丸追手門にさらすという扱いを受けた。

城方は、この日の戦いで木村重成・後藤又兵衛・薄田隼人らを失ったが、それでも兵力の損耗は千数百に過ぎず、なおも意気盛んに翌日の応戦準備に全力を挙げていた。

一方、徳川方では、家康は枚岡に、秀忠は千塚に宿営して翌日の決戦に備えた。その日の戦闘で損害の大きかった藤堂隊と井伊隊を後詰に下げ、夜明けとともに進軍を開始せよとの命を与えて野陣を張らせていたのである。

その夜の城内での軍議は、慌しく、ごく短時間のうちに打ち切られた。

最後の軍議

誉田の合戦から引き揚げたばかりの毛利・真田の両将は茶臼山の陣にあって姿をみせず、大野治長・治房兄弟を中心とした評定では、わずかに翌日の決戦には、家康・秀忠の本陣へ決死の突撃を仕掛けてその首をあげ、一挙に頽勢を挽回すること、茶臼山・岡山から南へは決して進出することなく、敵方を充分に引き寄せたうえで戦うことの二点が申し合わされただけであった。

たしかに、城方には、まだまだ五万に余る兵力があり、一人々々の兵達の目には、それらが、あたかも、数知れぬ大軍であるかのごとくに映じていた。しかも、兵士達の士気には、いささかの衰えもみられぬのである。

しかし、徳川方の擁する兵力は十六万。その数においては、優に大坂方の三倍を越えている。兵士達には判らずとも、全軍を統率する立場にある者たちには、その劣勢がひしひしと身に迫っ

てくるのである。

短い評議の間にも、伝令がひっきりなしに城内に飛び交い、慌しいその足音は、絶え間ない木霊となって寄せては返した。

茶臼山の陣

茶臼山の真田の陣には、夜目にも赤い陣幕が張り廻らされていた。篝火に映しだされた赤備えの武器や具足が、さながら暗夜に浮かびあがった幻の花叢（はなむら）のようにあでやかであった。

幸村は、その夜、嫡男の大助を呼び寄せ、翌朝、卯の下刻（午前七時）を期して城中に入り、秀頼公のじきじきの御出馬を促す使者となることを申しつけた。

大助には、すでに手兵の一部を与えてその指揮を執らせていたが、翌日の最後の決戦には、是非とも秀頼の陣頭指揮が必要だと考えていた。そのためには、大助を、あえて人質として城中に差し出してもよいと思った。

楠公父子の訣別には、湊川への出陣を目前にした正成が、嫡子正行を桜井の駅に呼び寄せて後事を託すというゆとりがあった。だが、幸村・大助父子には、そのゆとりすらもがないのである。あるのは、ただ、翌日の決戦に、それぞれが、事態のあるがままに華々しく討死するという一事だけであった。

決戦の火ぶた

五月七日、いよいよ最後の決戦の日が訪れる。

前夜枚岡に宿営した家康は、この日、寅の刻（午前四時）に陣を払って平野に向かった。また千塚にいた秀忠は、真夜中に陣を畳んで道を急ぎ、途中、若江・八尾の激戦の跡を視察の上、巳の刻（午前十時）過ぎには、平野の陣の家康に追いついて最後の軍議に移っていた。

秀忠は、今度こそ主戦場の天王寺口をと望んだが、家康は、頑としてこれを許さず、冬の陣の場合と同様、家康が天王寺口、秀忠が岡山口とその部署を定めた。

天王寺口の先鋒は本多忠朝、岡山口の先鋒は前田利常と定めて伝令を出し、十五万五千と称せられる寄手の大軍は、大小さまざまな旌旗をなびかせ、色とりどりの具足を輝かせて、進撃の命の下るのを待ち構えていた。

各隊の陣地が、禄高一万石ごとに正面一間と定められた軍令をみても、寄手の軍勢が、如何に所狭いまでにぎっしりと布陣していたかがうかがえる物々しさであった。

これに対して城方では、前日の誉田での戦いの疲労を癒すいとまもない真田幸村が茶臼山に、その東方、四天王寺南門を中心とした一帯に毛利勝永、さらにその東、毘沙門池を背にした備えに大野治長が陣して天王寺口に面し、大野治房が岡山口の総大将となってその両翼に遊軍を置き、明石全登が船場別働隊を率いて寄手の背後を突くという万全の手筈でその開戦を待ちうけた。

城方の総勢は五万五千。だが、秀頼は、大助を使者として差し遣わした幸村のたっての要請にも拘らず、その陣頭には姿をみせない。

この朝、岡山口の総大将大野治房からは、出陣の各将に対して、つぎのような指示がなされていた。

重ねて申し遣わす。敵が押し寄せて来ても、茶臼山・岡山より前へ軍を出したならば、必ず不覚を取るから、このことを侍共によくよく申し付け、もしこの命に背く者があったら死罪を申し付



秀忠が陣を敷いた岡山（御勝山）

けよ。昨日の合戦も、余りに遠方へ進出したために不覚を取った。今日の合戦こそ大切である。主馬（治房）一人の手柄になっても、惣軍の負けになっては仕方がないから、軍法を堅く申しつけよ。

なお、真田・毛利と申しあわせ、軽率に合戦をはじめぬよう注意せよ。今日一大事、天下わけめの合戦であるから、抜け駆けのないよう、軍法を守ることが大切である。ともかく、敵を引き寄せて戦ったならば、必ず必ず味方に利運があろう。

すなわち、茶臼山・岡山の線で寄手の軍を待ちかまえ、十分に引き寄せておいてから、全軍火の玉となって突撃し、家康・秀忠を倒して一挙に勝利を決しようというのが、城方の最後の決戦の構えだったわけなのである。

火の玉戦術

合図の狼煙

最後の決戦を前にして、城方の陣は、不気味な昂ぶりを秘めた沈黙に静まり返った。全軍の鼓舞を命じられた筆頭人の大野治長だけが、慌しく各陣所の視察に当たった。

治長は、茶臼山の真田の陣へも姿をみせた。幸村は、治長に詰った。「秀頼公は、なぜ御出馬なされませぬ。今朝（こんちょう）、大助を進言の使者として差し遣わしたことはお聞きおよびでございましょう」

幸村には、秀頼の陣頭指揮を差しとめた張本人は、この治長以外にはありえないという気がしてならなかったからである。

「今日こそ天下分け目の合戦となりましょう。秀頼公の御出馬こそ、士卒の意気を奮いたたせる最大の力です。どうか、修理さまからもお勧め下さい。東軍は、天満・船場方面には攻め寄せぬようです。船場にいる明石掃部助（全登）を、今宮を経て瓜生野へ進出させて下さい。明石が合

図の狼煙を上げましたなら、幸村は、正面から大御所の本陣に攻めかかります。大御所はきっと旗本の勢を出して戦いましょう。明石が、その虚に乗じて、背後から大御所を撃てば、必ず勝利が得られましょう」

治長は、幸村の策に耳を傾け、「必ずや、そのことを明石の許に連絡しよう。また、秀頼公のじきじきの御出馬をも、この修理からすすめてみよう」と約束した。

幸村は、治長が何の躊躇もなく城内に馬を返すさまを見送りながら、秀頼の出馬を阻止している隠然たる力の正体は、一体何だろうかと思索せずにはおれなかった。

血染めの鎧直垂

決戦は、午の刻（正午）を回った頃に火蓋が切られた。

天王寺口の先鋒本多忠朝は、徳川四天王の一人として隠れもない本多平八郎忠勝の次男で、親に劣らぬ豪勇をもって自ら任じた荒大名であった。過ぐる大坂冬の陣では、玉造口（城の東口）への攻撃を命じられ、その攻め口の変更を願い出て、「お前は親の平八郎に似ぬ ふつつか者だ。柄が大きいばかりで役にはたたぬ」と、家康から、さんざん罵言を浴びせられたという経緯があり、それを一世一代の恥辱として己が胸に刻みつけていたのだった。

したがって、忠朝は、この合戦にこそ、その一代の恥辱を雪ぐために、阿修羅の奮戦を示してくれようと心に決していたのである。忠朝は、先鋒を命じられたことが、千載一遇の好機であると死を決意し、軍監からの出撃の命を待たず、真先かけて前面の毛利勝永の陣に挑み掛かって行っ

たのだった。

兵庫県宍粟郡山崎町の本多家には、当日忠朝が着ていたという黒ずんだ血痕のついた鎧直垂が、その時の凄惨な死闘を物語るかのように、いまもなお大切に保存されているという。忠朝は、覚悟の討死を遂げることによって、家康の不興をつぐない、無事その家を末代まで残したのである。つまり、血染めの鎧直垂こそが、本多家にとって、かけがえのない尊い家宝となったわけなのであった。

茶臼山の北にある浄土宗鎮西派の坂松山高岳院一心寺には、この本多出雲守忠朝の墓が、九基の戦士の塔に囲まれて現存している。『大坂夏の陣戦士の墓』と呼ばれるこの一角の墓石には、小野勘解由塔・青山五左衛門塔・加藤忠左衛門塔・大屋作左衛門塔・山崎半右衛門塔・中根権兵衛塔・石川半弥塔・臼杵七兵衛塔・大原長五郎塔の文字が見られ、いずれもが、この合戦に、忠朝とともに毛利勝永の陣に突撃して華々しく討死した家臣たちのものであろうと推察される。

猪武者越前勢

天王寺口の本多・毛利両隊の間で戦端が開かれたこの日の合戦は、およそ夕刻にいたるまでの長時間にわたって繰り展げられる。

合戦は、全くの混戦・乱戦で、敵味方の区別もつきかねるほどの死闘が続き、数に優った徳川方が、漸く勝を収めたというのがその実態である。

寄手の武将として合戦に加わった細川忠興は、この合戦の帰趨を、「半分は此方、半分は大坂

方勝にて候ひつれども、此方の御人数、数段多くこれあるにつき御勝になる」と、『細川家記』に書き記している。

すなわち、大坂方は、正しく捨身の勇をもって、長く日本合戦史にのこる驚異的な奮戦をみせたのである。

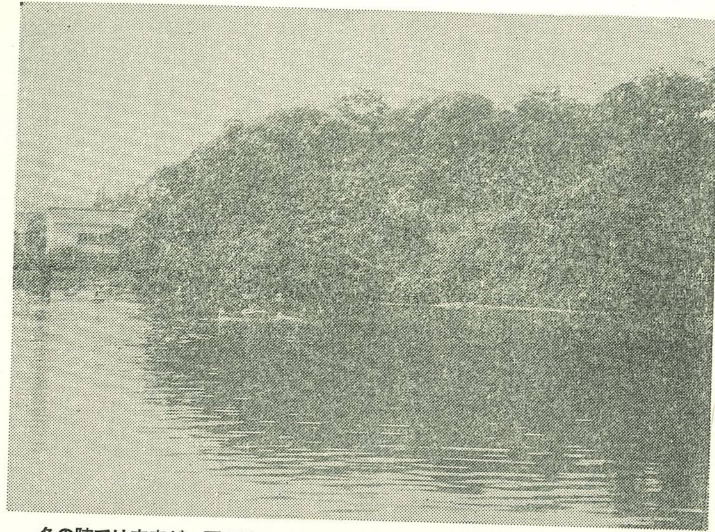
寄手の軍で、最もめざましい活躍を示したのは、松平忠直に率いられた一万三千の越前勢であった。この合戦のあと、京・伏見・大坂などで、

かかれかかれの越前兵
たんだ掛かれの越前兵
命しらずの褄黒（つまぐろ）の旗

という小歌が流行したのをみても、それがわかる。

忠直は、家康の次男結城秀康の長子で、越前北荘（福井）六十七万石の太守である。前日の八尾・若江の戦いに、先鋒の藤堂・井伊両隊が苦戦しているのを眺めながら、軍令を守ってあえて戦線に加わらなかったところ、その夜、家康の陣に呼びつけられて、「越前の兵は昼寝でもしていたのか。ものの役にたたぬ腰抜けどもめ」と、こっぴどい罵言を浴びせられた。

家康からの命令は、使番と称する家康直属の使者によって伝えられ、同時に、各部隊には、必



冬の陣では家康が，夏の陣では幸村が陣を敷いた茶臼山

ず家康・秀忠が任じた軍監が巡遣されてきている。この使番と軍監との連絡が充分でなかったために、忠直は、うずうずしながら藤堂・井伊隊の奮戦を見守っていたに外ならない。もちろん、軍監は家康の代理であると思えばこそ、我慢に我慢を重ねていたわけである。

忠直にしてみれば、家康の暴言はもってのほかの恥辱である。軍令を守ったために腰抜け呼ばわりされるとは心外千万とばかりに、この日は、あえて軍令を破ってでも大暴れに暴れまくろうと決心していた。

とにかく、戦場においては、本陣と最前線との連絡がうまくとれず、その命令が全く異なった指示として伝わる場合が往々にしてあるものなのだ。忠直の場合も、家康の

意志に反した架空の指令が、もっともらしい軍令として越前隊の出撃を遮っていたに違いない。

家康はそうした経緯を調査もせず、こっぴどく忠直を罵倒したということになる。七十を過ぎた家康は、老骨の頑固さで、かなりわがままなお天気屋になっていたに違いない。だから、その場その場の感情次第で、とんでもない大目玉を喰らわしたりほめそやしたりすることがあったのだろう。

いずれにしても、忠直は、家康の暴言が頭にきていたから、軍令も何もあらばこそ、死んで汚名を返上しようとばかりに、城方に向かって、正しく無謀とも思える猛攻を挑み掛けていくのである。

しかし、この猪部隊の越前勢についても、『武徳編年集成』の一部には、猛進直前の逸話として、つぎのような興味ある状況が述べられてある。

——松平忠直隊の先頭は、さながら「躑躅（つつじ）の花の咲きたるが如く堂々の陣を張る」赤備えの真田隊を指呼の間に望む地点にいたると、大いにその勇猛ぶりを恐れて立往生するという状態になった。忠直は、立ちながらに湯漬を食い、冑をかぶり直しながら、「めしを食ったからには餓鬼道に落ちる心配はない。死出の山を越えるのもたやすいぞ」とたわむれてみせた。大将のこの勇猛さに、士卒の意気も大いにあがった——。

越前隊は、このあと、その城方最強の真田隊とわたりあい、ついに、大坂城への一番乗りを果

たすという抜群の手柄に向かって猪突猛進していくのである。

人質推参

越前隊の突進をみて、茶臼山の西に陣する城方の福島・吉田・石川の諸隊が銃撃を始めた。幸村は、「船場から明石掃部助が背後に廻り、合図の狼煙をあげるまではと、わざと開戦を延ばしているのに、何という軽率な行動をとるのだ」といって制したが、一向に銃撃をやめようとする気配がない。

また、治長が幸村の策を入れ、秀頼の出馬を促すために馬を返して城中に入ったというのに、いまだに、その秀頼の出陣も実現しない。

幸村は、「私の一族が、みな関東方に仕えているので、秀頼公は、私を疑って出馬されぬに違いない」と考え、改めて、わが子大助を人質として本丸へ帰すことを決意した。

真田家の史書『烈祖成蹟』は、このくだりをつぎのように記載している。

——大助は、父とともに討死したいと哀願したが、幸村は、「士たるものは、謀叛の疑いを受けるのは恥である。お前が私といっしょに死んだら、誰が私に二心のないことを明らかにしようか。行って秀頼公と生死をともにせよ」と、強いて大助を諌めた。大助は、泣きながら城中の秀頼の許に推参した——。

幸村は、大助を城中に赴かせると、もはやこれまでと意を決し、真田丸以来の僚友伊木七郎右衛門遠雄らを招いて、「いつまでこうしていても仕方がない。いざ、最後の合戦を挑もう」と申

し合わせて席を立った。

御陣衆逃散

真田疾風隊

幸村は、緋縅（ひおどし）の鎧、鹿の角の前立に白熊付きの冑をかぶり、日頃秘蔵した河原毛の馬に、六連銭の紋を打った金覆輪の鞍を置き、紅の厚総をかけていた。

幸村を中心に、真田与左衛門・御宿越前守・江原右近・多田藤弥・大谷大学・名島民部・長岡与五郎・槇島玄蕃・藤掛土佐・本郷左近・早川主馬助・福富平蔵・渡辺内蔵助・伊木七郎右衛門ら、総勢一万余人が、前面の敵に向かって突撃した。

真田隊の前面には、松平忠直の率いる一万三千の猪武者が陣を敷いている。真田隊は、真丸な火の玉となって突進する。越前隊も必死である。大将は若いが、部将には名だたる老巧の士が多い。

まさに、最強軍と最強軍との鉢合わせである。いずれの兵も、決して後へは退こうとしない。互いに損害は続出するが、それを乗り越え、また踏み越えて、真田隊はなおも阿修羅のように突進

する。疾風となり、火の玉となって駆け続ける。

真田隊は、ついに家康の本陣になだれ掛かる。誰が誰なのかも判らない。赤備えの一団が、凄まじい形相で斬り掛かってくる。本陣を警護する旗本たちは、まさか自分たちが直接斬り結び合わねばならぬ事態になろうとは、夢にも思わなかったに違いない。余りの恐ろしさに、なだれを打って本陣に逃げ込もうとする。家康の本陣は、たちまち大混乱に陥ってしまう。

ともかく、合戦というものは、命をとるかとられるかである。人間、誰しも命の惜しくないものはいない。その命の惜しい人間が、何故命をかけて合戦するのか？　命をかけたその後に、それに値する何かがえられるという目算があるからこそ、その何かに賭けるのである。

本多忠朝や松平忠直は、己の恥辱を雪がんとして命を張った。城方の譜代の臣は、豊臣の家を、ひいては己の家を守ろうとして命を張った。だが、大部分の者は、己の巻き込まれたその場の状況が、窮鼠却って猫を嚙む、つまり、たち向かわねば、己の命が絶たれると直感したからこそ命をかけて戦ったのだ。

旗本衆は、それらのどの一つにも当てはまらない。とすれば、三十六計逃ぐるに如かずと、われ勝ちに算を乱すのは当然であろう。ましてや、相手は名にしおう赤胴赤指物の真田勢なのであるから……。

踏み躙られた馬印

この合戦の島津藩の報告によれば、家康の御陣衆は、「五月七日に、御所様の御陣へ、真田左衛門仕かかり候て、御陣衆追ひちらし、討ち捕り申し候。御陣衆、三里ほどづつ逃げ候衆は、皆々生き残られ候」という態たらくだったという。

また、『山下秘録』の伝えるところでは、「真田は、五月七日の合戦にも、家康卿の御旗本さして一文字に打ちこむ、家康卿御馬印を臥さする事、異国にはしらず、日本にはためし少なき勇士なり」ということになる。

このことは、徳川方の記録としても、「茶臼山の方から崩れてきた旗本たちによって、鑓がふみにじられてしまった。いっしょにいた旗奉行もそれにまきこまれ、せっかくの家康公の旗まで、味方にふみつぶされてしまった。ふと見ると、家康公のそばには、騎士は小栗忠左衛門久次が一人いただけだった。家康公の旗が崩れたのは、三方ヶ原の戦さ以来のことだ」といった具合に『三河物語』の大久保彦左衛門にまで認めさせてしまっているのである。

『細川家記』では、細川忠興が、国許へ送った便りのなかに、「七日の合戦に、味方の歴々の将も、逃げない者はまれであった。笑止なことである。人により、平野・久宝寺・飯守あたりまで逃げた者もある」と書いて、その腑甲斐なさを誇った由が述べられてある。

奇襲再び

真田のこの疾風戦法は、『楠公遺訓』亨の巻第十三に書かれた「十死一生の戦法」を、正に地でいったものである。『楠公遺訓』では、この戦法をつぎのように書き記して

いる。

先ず、兵を五人組とす。三百ある時は、三手に分つべし。一手に四騎の将あり。三段に駈入りて敵の陣を破るべし。先手は一文字に駈通るべし。二陣右より駈通りて先手と合せよ。三陣左より駈通らば、先の二手亦両方へ颯と分れて一手を救い、合せば又先のごとくに分れて合せよ。合して分るる時は、鯨波を一声づつ揚げよ。敵崩るる時は、三手合して鯨波を揚ぐべし。敵の大将を討つべしと心懸くべし。是れ十死一生の戦法なり。

真田隊の行手には、死が待ち構えているばかりである。ただ、あるのは、敵の大将（家康）を討つことである。その一事によって、あるいは十死に一生をうる道はあるやも知れぬが、いまは、ひたすら、死に向かって突き進むべき時なのだ。

家康の本陣は、この真田の猛攻に遭って、総くずれにくずれさった。家康がこの危難を脱しえたのは、決して、三河以来の旗本衆の働きによってではないのだ。うろたえ慌てふためいたこれらの旗本衆が、三方ヶ原以来臥せたことのない家康の旗や馬印を、押し倒し踏み躙ってしまったという醜態が齎した偶然にほかならなかった。

だが真田隊は、ふたたび、この家康の旗と馬印に果敢な突撃を繰り返そうとして、越前隊の真

只中に集結し終えていたのである。
　家康は、自らもまた、この真田の突撃に常軌を失して逃げ迸ろうとしていた事実を悟った。自らの思慮のなかでは、どう解釈しようもないこの不安と恐怖を、家康は、自らの心に、醜く染みついた黴のように不気味に感じた。

家康の恐怖

　家康の率いた諸国の精鋭が、この大坂の戦場のすべてをぎっしりと埋めつくして、勝利の神は、すでに紛れもなく徳川の頭上に微笑みかけようとしているのである。その雲霞のごとき大軍のなかで、真田はまさに消え失せようとする一つの点になり果てていたはずではないのか？　幸村の父昌幸には、たしかに二度まで苦杯を舐めさせられた経験がある。しかし、それは、あくまでも、あの山深い信濃での城攻めにおいてである。そして、その昌幸は、すでに身罷ってこの世にはいない。真田への恐れは、一旦は、難なく意識の底から拭い去りえたはずではなかったのか？
　しかるに、いま、この広々とした大坂の地で、しかも、家康が最も得意とする野戦において、何故、これほどまでの怯えに襲われねばならぬというのか？
　幸村は、確かに昌幸の子にふさわしい武将であり、軍師である。しかし、その幸村の強さは、その火戦と、その密集部隊と、その伏兵と、すべてを統帥したところの用意の周到さにあったはずではないのか？
　家康には、己が、どうしてこのような不条理な幸村の突撃によって死の危機に曝されねばなら

《大阪夏の陣》
—元和元年(1615)—

元和元年五月七日正午前後の東西両軍
東軍　西軍

ぬのかが理解できない。幸村が、そこにおいて、比類なき『武』の最高峰を披瀝しようとしているそのこと自体が、家康には何としても理解しえぬ奇怪事なのだ。つまり、幸村は、家康にとっても、やはり、捉えどころのない虚像の軍師にほかならなかったのかも知れない。

家康は、幸村が、夢といわず、現（うつつ）といわず、そのいたるところから赤い六文銭旗を翻して討って出てきそうな錯覚に陥れられて身震いした。すでに日本全土を領し、その大軍を擁しえた家康にとって、幸村は、まさに解すべからざる存在として、その現実を蝕み続ける魔の象徴であるかのように思えるのだった。

我こそは幸村なり

突入三たび

寄手の将兵が、すべて本多忠朝や松平忠直の手勢のような働きをしていたら、この合戦は、もっと早く片がついていたに違いない。

もちろん、城方のなかにも、早々に旗を巻いて逃げ出した者は数知れずあった。真田隊の後詰として出陣していた山口休庵の『大坂御陣山口休庵咄』の記述にもそのことが覗える。

――真田左衛門は、茶臼山に赤のぼりを立て、一色赤装束で陣をすえました。その東に毛利豊前、そのつぎに大野修理・同主馬、その東に織田雲生寺（頼長）がおりました。一番の合戦は、真田が越前衆に切りかかり、織田雲生寺が横あいにかかり、大野修理・明石掃部ののぼりも入り乱れて、越前衆をつきつぶしました。二度目の合戦は、毛利豊前が一番に越前衆に切りかかり、真田が横あいにかかりましたが、その時、もはや、雲生寺ののぼりは一本も見えませんでした。討死されたのか、逃げられたのか、ついにわかりませんでした。大野修理・同主馬も大坂城へ引き揚げました。そののぼりは一本もみえません。真田左衛門が茶臼山から貝を二つ吹き、下知をし、敵を四、五町おいまくりました。旗本衆とみえる新手の一隊が、真田の備（そなえ）へ乗り込み、互いに追いまくり、追いもどされして、攻め合いました――。

金目当ての、あるいは恩賞目あての手勢が、如何に多かったかがうかがい知れるというものである。

つまりは、細川忠興がいうように、「此方の人数が、数段多かったから勝った」のであって、家康側近の手になる『駿府記』にさえ、「関東勢少し敗北の処」、将軍自らが指揮をとり、進撃したので、ついに勝利をえたと書かれてあるとおり、家康・秀忠の意気ごみにもかかわらず、寄手の働きぶりはまことに腑甲斐ない状態であり、その勝ちっぷりも、極めて危なっかしいものだったのである。

真田隊は、寄手のこの弱点をついて、一度ならず、二度ならず、三度にわたって家康の本陣に突入した。もしも、この真田隊の前面が、越前衆のような猪部隊でなかったとしたら、あるいは、さすがの家康も、豊臣家崩壊を目前にしながら、その死物狂いの突撃によって討ち果たされていたかも知れぬのである。

幸村の奇蹟

真田隊のこの突撃は、家康の心胆を寒からしめるにふさわしい、とてつもない異常事さえ持ち込んできた。

家康は、確かに「我こそは幸村なり」という叫び声を耳にしたのだ。それは、あたかも、万雷の轟きであるかのごとくに家康の胸を貫き通した。

だが、命知らずの越前衆が、群がり寄るようにして討ち果たしたその叫びの主の首級は、幸村とは、およそ似ても似つかぬ薄汚れた騎馬武者の髭面だった。

「我こそは幸村なり」という叫びは、二度目の襲撃の折にも耳にした。赤備えのその叫びは、まるで、その場に雷が落ちたかのように、群がる雑兵どもを追い散らした。つぎからつぎへと、それは、無数の叫びの矢となって旗本衆のなかに斬り込んできた。どれが本当の幸村なのかは判らない。一人の幸村が斃れれば、また別な幸村が現われるのである。

これこそ、幸村の奇蹟といわずして何といおうか？　六文銭の旗じるしは、わずかな窪地の萱の根にも潜んでいた。一塊の土くれの陰にも潜んでいた。そして、無数の幸村が家康をめがけて

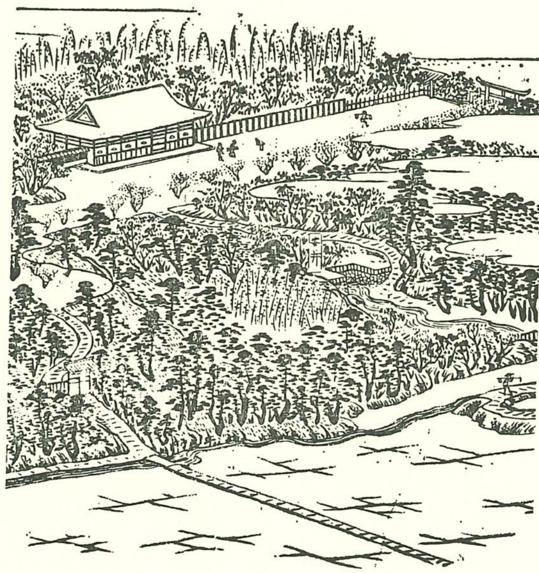
挑み掛かってくるのだった。

切腹寸前

三度目の襲撃は、正に家康を絶望の淵に追い落とそうとするかに見えた。

『ヤソ会士日本年報』は、この時のことを、「内府（家康）も失望に陥り、日本の風習にしたがって腹を切ろうとした由、確かなこととして伝えられている」と書いている。

家康にはとうてい信じ難いことだったが、真田は、確かに三度にわたって家康の本陣になだれ掛かり、ついには、家康のいる陣幕のなかにまで攻め込んできたのである。家康が、いまは、これまでと切腹寸前の窮地に追い込まれたことも、恐らくは、隠しおおすこ



幸村戦死の地といわれる安井天神（摂津名所図会）

とのできぬ事実だったに違いない。

幸い、家康は、この時も、辛うじて皺腹を掻き切らずに済んだ。そして、幸村が、ついに越前衆の奮闘の前に矢折れ刀尽きたことも伝え聞いた。

にも拘らず、家康は、何故かそのことが信じられない。何時また、「我こそは幸村なり」というあの魔性の声が聞こえてこぬとも知れぬのである。

それが、全くの仮想に過ぎぬことは解っていた。だが、拭おうとすればするほど、なおのこと広がりを増す不気味さが不可解だった。そして、その一つの不可解が、さらに無限の不可解を呼び寄せようとするのだった。

幸村討死

幸村は、家康の本陣への三たびの突入に手傷を負い、本道から二町ほど離れた田の畔に腰を下ろして傷の手当をしていた。

前日来の激戦に全力を使い果たし、身も心も綿のごとくに疲れていた。あたりは、果たしてこれが戦場の一角なのだろうかと疑いたくなるほどの静寂さに包まれていた。撃ち合い、斬り結び合う戦場のどよめきが、遠い海鳴りのように伝わってくるだけであった。

幸村は、よくぞこれほどまでの働きがなしえたものだと思う。これでよいのだ。すべてが終わったのだ、と自らにいい聞かせる。何もかもが、遙かな追憶の彼方に吸い寄せられていくのである。

熱いものが胸から込みあげ、いささかの苦痛も伴わずに吐き出されていく。血の色は、身に纏った如何なるものよりも赤く鮮かにきらめいて見える。

いずれにしても、死は目睫に迫っている。又兵衛が、隼人が、そして重成が華々しく名を輝かせたと同様、いや、幸村という名は、そのいずれにも増して麗々しく口伝えられるに違いないのだ。

と、不意に、焼けつくような痛みが脇腹を走った。幸村は、何の痛みも覚えずに吐き続けていた己の血の滴りのうえに被いかぶさるようにして倒れた。

幸村は、これで間違いなく、二度と醒めることのない眠りにつくことができると思った。脇腹の痛みは、ますます激しさを増していたが、すでに思い遺すこともない安堵感がその夢見心地を支え通していたのだった。

夏の陣の戦死者は、大坂方だけで二万に近かったといわれている。幸村は、越前隊の鉄砲頭、西尾久作によって討たれた。

「真田左衛門佐、合戦場に於いて討死。古今にこれなき大手柄。首(しるし)は越前宰相殿鉄砲頭(がしら)取り申し候。さりながら、手負ひ候ひて臥(たお)れ伏して居られ候を取り候に付、手柄にも成らず候」と細川忠興は記している。

時に、幸村四十九歳。真田勘解由・大塚清兵衛・高梨主膳・海野小平太・望月善太夫・禰津小

六・山岡軍平・柏田玄仲・角輪佐吉・利光久兵衛・沼田清次郎・真田権太夫・森川隼人・滝川平太夫・丹生弥二郎・星田勘平・馬淵六郎太夫以下、譜代の士百四十五人も、悉くこの合戦で戦死した旨が、『銕醤塵芥抄』に述べられている。

真田日本一の兵（つわもの）

大坂落城

この日、秀頼は、梨子地緋縅の鎧を着け、太平楽という駿馬に梨子地の鞍を置いて乗り、太閤以来の切割ののぼり二十本、茜の吹貫十本、玳瑁（たいまい）の千本槍を前後に従えるという凛々しい出立ちで、城方将兵の士気を鼓舞するため、一旦は、自ら天王寺表へ赴こうとして桜門外の堀端まで駒を進めた。

だが、この時、早くも前線の不利が伝えられ、そのまま本丸に引き返した。幸村の子大助が、負傷の身で前線から駆けつけ、自らを人質として秀頼の出馬を願う旨の幸村の要請を伝えたが、速水甲斐守守久らの側近が引き留めたために、ついに武将らしく戦場に臨む最後の機会を失してしまった。

和睦交渉の折などにみせた毅然たる態度から推して、秀頼を一概に愚将ときめつけることはできぬが、なにしろ、一度として戦いの場に臨んだことのない二十三歳の貴公子であり、母淀君の意にはどうしても逆らえぬという気の弱い一面があったから、七十四歳の老齢で最前線に近い本陣で指揮をとった家康や、自ら先頭に立って敵中に進撃しようとした秀忠に比べると、やはり、その腑甲斐なさが眼につくのである。

すでに、火の手もあがり、収拾のつかぬ混乱に陥ってしまった落城間際の城中を、秀頼は、側近の速水甲斐守らに護られて千畳敷御殿へ、さらに天守へ、そして、そこにさえいたたまれずに、二ノ丸山里曲輪の矢倉に籠ったのである。つき従う者は、大野治長ら、わずかに二十八人であったという。『慶長見聞書』は、この時のようすを、

――蔵の内に秀頼籠り給ひける前までは五、六百人従ひてけるが、皆落ち失せて二十八人となりぬ。大野修理簾中（千姫）に向ひ奉り、淀殿並に秀頼公の御命助け給ふ様に、両公（家康・秀忠）へ仰上げらるべく候とて、刑部卿の局（つぼね）と女中一人つけ奉り、南部左門・堀内主水を添へて出し奉りぬ――。

と伝えている。つまり、大野治長は、最後の手段として、家康の孫娘千姫を城から出して家康・秀忠のもとへ送り届け、その代償として、秀頼と淀君の助命を乞わしめようと計ったのである。

『山口休庵咄』や『大坂陣物語』には、このあと、千姫が輿に乗り、南部左門・堀内主水らに付き添われ、東軍の陣中を通って坂崎出羽守の陣にいたり、さらに、堀内主水が、坂崎出羽守と友人だったよしみで、坂崎出羽守を案内人として家康の陣にいたったことが述べられてある。
家康は、可愛い孫娘千姫の無事な姿をみると、それこそ涙を流さんばかりにして喜んだが、さりとて、それと引き替えに秀頼母子の命を助けるわけにはゆかぬと、翌日、井伊直孝を城中に送って秀頼主従の切腹を命じる。
前夜来、期待と不安でまんじりともしえなかった秀頼母子は、寄手の激しい砲撃が始まると、さすがに覚悟はしていたとみえ、自ら矢倉に火を放って自決した。
矢倉は、たちまちにして焼け落ち、焼け跡には、真黒になって誰が誰とも見分けのつかぬ焼死体が残った。ここに戦いのすべてが終わり、さしもの栄華を誇った豊臣家も、わずか二代にして滅亡し去ったのだった。
威勢のよい寄手の勝ちどきや、引きもきらぬ諸大名の祝辞に、家康は、はじめて長年の労苦を忘れる思いがしたであろうが、当時の世評は、必ずしも家康の仕打ちを快しとはしなかった。
京都のさる公家の日記の一節には、「秀頼公八日御腹御切候由、毎人皆哀傷せざるなく候」と書かれ、こうした世評が、幸村の奮迅の活躍への讃辞と相まって、先にも述べたような京わらべ歌や「秀頼・幸村生存説」を流布させることとなるのである。

大助の自刃

さて、父幸村の命によって、人質として城中に推参した真田大助は、秀頼の小姓高橋半三郎・土肥庄五郎・高橋十三郎の三名とともに、見事に切腹して秀頼の死に殉じた。
父幸村が、三たびにわたって家康の本陣に突入し、赫々たる働きをみせて討死したことを伝え聞いた大助は、自らも潔く秀頼に殉死しようと覚悟を決め、秀頼・淀君らの籠った入口に座りこんで最後までがんばり通した。
秀頼側近の速水守久が、そうした大助のようすを憐れみ、「貴殿は譜代の家臣ではないから、秀頼公の最期を見届ける必要はない。



大坂城天主閣（復興）

まして、一昨日、誉田で太刀打の功をたて、股に鑓疵を負っている。もはや、ここにとどまる必要はない。早々に落ちのびられよ」と薦めたが、大助は、その言葉を聞き流したまま、蔵の入口に藁を敷き、食事もとらずに座り続けた。

大野治長が最後の時がきたことを知らせると、大助は、前述の三名の小姓とともに、武具をぬぎ、西に向かって手を合わせたのち、念仏を高らかに唱えながら、互いに声を掛け合って、一斉に刃を突きたてて切腹した。

この時、自害したのは、秀頼母子をはじめ、大野治長父子・速水守久父子・津川左近ら譜代の士二十人、大野治長の母大蔵卿、木村重成の母宮内卿ら女中衆六人、新座衆毛利勝永ら六人、合わせて三十二人であった。

『烈祖成蹟』によれば、大助は、その時十六歳、「新座衆」の末席に名を連ねて、まことに潔い自刃であったとされている。

また、『明良洪範』という書物には、大助の自刃についてのつぎのような逸話が述べられてある。

——徳川の旗本石谷(いしがや)貞澄という者が、秀頼らの自害した場所へいってみると、多くの死体のなかに、具足を脱いで、佩楯(はいだて)（ひざよろい）だけを着けた死骸があった。生捕りの者に尋ねると、「これは真田大助です。自害の時、側の者が『佩楯をお取りなさい』というと、『大将たる者の

切腹には、佩楯をとらぬものと聞いている。私も真田左衛門佐の子だ』といって、佩楯をとらなかったのです」と説明した。「弱輩ながら、さすがは左衛門佐の子だけあって、落命の折に、そのようなことに気のつくけなげさよ」と、見る人は皆、感涙にむせんだという——。

刀折れ矢尽きるまで戦って討死した幸村といい、人質として推参した身で潔く切腹した大助といい、その死は、いずれもが、まことに清々しい美しさをさえ感じさせてくれるのである。

東軍真田隊

父昌幸の遺領上田で十万石を領した幸村の兄信之は、関ケ原の合戦以後も、模範的な徳川の忠臣として幕府に忠勤を励んでいた。

大坂の陣に当たっては、この信之のもとへも、出陣を命ずる幕府老臣の連署状が届けられた。当時、信之は病臥中で、幕府へもその旨が届けてあったので、連署状には、「貴殿御病気で参陣できぬときは、御息河内守殿（信吉）へご人数をつけて、早々に、江戸表へお越しになるよう取り計らってほしい」旨が付記されてあった。

信之の長子河内守信吉・次子内記信政は、兵を率いて江戸へ行き、本多忠朝の指揮する二番隊に編入された。

この真田隊は、十一月十一日に京都に着き、忠朝の後備えになった。城の東北、天満川と平野川にはさまれた所で、冬の陣では、鳴野・今福の合戦があった要衝である。

が、しかし、真田丸に拠る幸村の手勢とは直接干戈を交えることなく和睦を迎え、大坂城の堀

埋めなどの寄手の工事を行なったうえで帰国している。

そして、翌年の夏の陣にも、信之の病が回復せぬまま、ふたたび信吉が代理となって東軍に加わった。信吉らは、四月十日に将軍秀忠にしたがって江戸を発った。信吉・信政らは、井伊直孝の組下になり、四月二十八日に天王寺口に着陣している。

『真田氏大坂陣略記』は、この折の真田隊の陣立てを、つぎのように書き記している。

真田河内守信吉（十九）・同舎弟内記信政（十八）・矢沢但馬頼之ハ、信州上田之士卒ヲ将立也。禰津主水幸豊ハ、上州沼田之士卒ヲ将立也。纒ハ、成沢勘左衛門、幡ハ恩田越前、左備之鉄砲頭ハ鎌原伊右衛門、右備之鉄砲頭ハ湯本源左衛門、持鑓之石突持ハ田中忠右衛門、馬之口添ハ、左ハ西沢正兵衛、右ハ豊島三郎右衛門也。河州之介添者木村土佐・羽田筑後、亦内記介副者原監物・矢沢源右衛門也。中備ハ禰津主水、左ハ矢沢但馬、右ハ禰津伊予信直也。

この東軍真田隊は、五月七日の最後の激戦では、本多忠朝と並んで天王寺口の先陣となり、毛利勝永の軍と激闘の末、二十九人の首をえて、三十二人の戦死者を出している。東軍全体としては、戦死者よりは取った首の方が遙かに多かったのだから、相当無理をして、奮戦したふしが覗える。幸村が、城方について幕府に敵対している手前、信州上田の真田隊は、無二の徳川方であることを事実をもって示そうとして、あえてこうした損害を辞さなかったのである。

しかし、幸村の率いる城方の真田隊が、余りにもめざましい働きを示して世評を独占してしまったために、この東軍真田隊の活躍は、すっかり影の薄いものとなって霞んでしまった。

但し、『薩藩旧記』が、幸村の率いる真田隊を、「真田日本一の兵（つわもの）、いにしへよりの物語にもこれなき由、惣別これのみ申す事に候」と称讃したことが、その同族としてのこの東軍真田隊の評価をも高めることとなったのである。

つまり、幸村が大坂の陣の軍師として、佳名を後世に喧伝されたことは、同時に信州真田家の家名をも天下に広めたわけであった。

国松君の斬首

五月八日の大坂城落城後、秀頼の最期を確かめた家康は、この日の申の刻（午後四時）ごろ、焼野原と化した大坂を発って京都に向かい、秀忠もまた、翌九日に岡山の陣を引き払って伏見に去った。その秀忠の軍列には、大勢の城方の婦女子たちが捕虜として混じっていた。

人々は、改めて戦いの無残さを思い、容易にその恐怖から抜けだすことができなかった。何故なら、大坂方の落人の詮議は、殊のほかに厳しく、毎日のように、五十人・百人という多勢の落武者たちの首が刎ねられたからである。京都と伏見を結ぶ街道の両側には、こうした落人たちの首をさらすための棚が造られ、何千・何万という首が並べられたといわれている。

そんな最中（さなか）に、秀頼の二人の子供が探し出されて捕えられた。秀頼と千姫との間には子供はなかったが、秀頼が別の女に産ませた一男一女が、ちょうど七、八歳の可愛い盛りを迎えていた。女の子は、尼として鎌倉の東慶寺へ引き取られることで、ようやく命は助けられたが、国松と呼ばれる男の子は、哀れにも、車に乗せられて京中を引き廻されたうえ、六条河原に引きだされて首を討たれた。

当時の武将のなかでは、珍しい文化人であるといわれた細川忠興は、その手紙の一節に、つぎのように記している。

――秀頼様若君、八つにならせられ候を、伏見の町にて探し出し、昨日（二十三日）御生害に候、目もあてられざる次第に候――。

七人の影武者

首実検

家康は、大坂落城の折には、冬の陣の時のような包囲網を敷かず、城の北方天満口には、全く兵を配さなかった。城兵が退路を断たれて、窮鼠却って猫を嚙むような

反撃に出ることを恐れ、わざと北口を開けておいたのだと『ヤソ会年報』は述べている。

したがって、城方の落人は、この天満口から、京都方面に敗走し、五月八日の秀頼らの自刃の頃には、夥しい数の敗戦者が京の町へも流れ込んでいたのである。つまり、京都所司代板倉勝重の注進状に、「落人、一万も二万も京辺土へ参り候」と書かれている通りの状況だったのである。

五月十一日には、長曽我部盛親が、山城八幡の辺りで捕えられ、二条城の門前に晒された末、十五日、六条河原で斬られた。十四日には、大坂町奉行水原石見守が、二条城付近に潜んでいる所を捕手に襲われて斬り死した。二十日には、城中筆頭人大野治長の弟道犬治胤が、京都の大仏辺で捕えられ、のち、堺に送られて殺された。

家康の策した各個撃破、すなわち、これらの落人を個々ばらばらにして捕えるという方法は、こうして、予期以上の功を奏したわけであった。

また、幸村の友軍であった山川帯刀や北川次郎兵衛のように、男山八幡滝本坊にかくまわれ、自ら名乗り出たために命を助けられた者や、無事にこの危難を切り抜けて地方に落ちのび、のちに諸大名に召し抱えられることとなった者も相当数あった由である。

『土屋知貞私記』は、「城中物頭にて、方々へ有り付き、あまねく人の知る者」として、二十四人の名を連ねている。

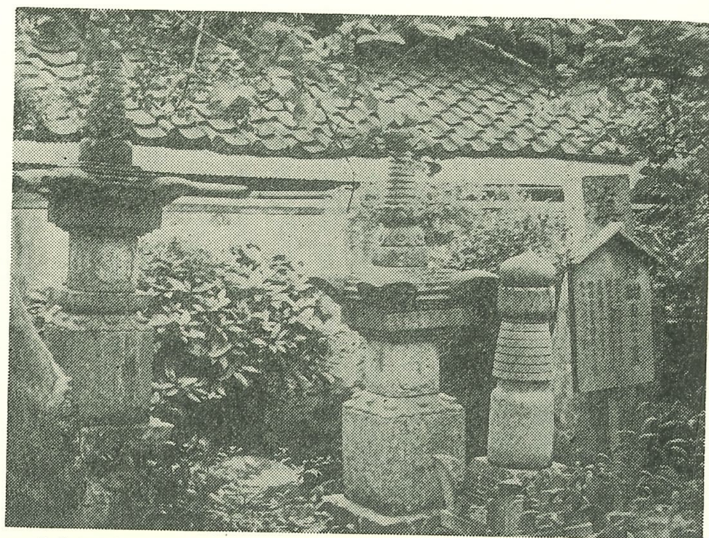
幸村の首は、秀頼らが自殺した八日、戦場で家康の実検に供された。家康は、真田左衛門佐と

いう首をみると、「この首は、前歯が欠けているか」と聞いた。越前隊鉄砲頭という身分で家康に拝謁を赦された西尾久作が、そのじきじきの言葉に畏って、「前歯は、確かに欠けております」と申し上げると、家康は、さらに「勝負は」と尋ねた。西尾は、無言で平伏したままであった。「よい首をとったな」と家康が言葉をかけ、西尾は面目をほどこして退出した。家康は、そのあと、側近の者に、「西尾は、勝負しなかったらしいな」と洩らしたという。

「この徳川家にも、あの真田の赤備えのごとき軍兵が従えられたならば」と感歎したり、幸村を討ち取った者には五万石でも十万石でも与えるといって怖れたりしていた家康は、西尾ごとき鉄砲頭が、幸村と尋常の勝負をして討ち果たせるはずはないと見抜いていたに違いなかった。

御宿監物を討ち取った野元右近も、家康のじきじきの目通りを赦された。若い頃の御宿を知っている家康は、「御宿めも齢をとったものだな」といい、その最期のようすを尋ねた。野元が、「なぜか、手向かいはいたしませんでした」と答えると、家康は、大いに野元を褒め称え、黄金と時服を与えて退出させた。

家康は、このように、戦場においても、また二条城に引き揚げてのちも、精力的に首実検に立ち会った。恐らく、何が何でも豊臣家を根絶やしにせねばならぬという老いの執念がそうさせたのであろうと思われる。



九度山の真田庵にある幸村・大助の墓

旗本詮議

長宗我部盛親・水原石見守・大野治胤といった大坂方の主だった将たちが処刑され、秀頼の子国松も斬首されて、大坂の役の戦後処理もあらかた終わったという見透しがつくと、家康は、閏六月十七日、二条城に旗本一人々々を呼び出して取調べを始めた。

『駿府記』には、「今日、かの合戦の時、崩逃の族を議せられて、一人宛御前において召し出し、その時何処に在りや否やを問はしめ給ふ。おのおの申し開く族これあり。或はまた申し上ぐるところ分明ならざる族これあり」と書かれてあり、家康には、いまさらながら、五月七日の激戦での旗本たちの醜態が我慢ならなかったようすが覗える。

『三河物語』の著者である大久保彦左衛門も取調べを受けた。彦左衛門は鑓奉行で、旗奉行とともに家康の本陣にいた。鑓奉行・旗奉行というのは、数多くの鑓や旗印を保持する人馬の指揮官である。家康は、七日当日、鑓や旗の立っているのをみなかったといって大いに立腹し、彦左衛門を問いつめた。彦左衛門は、「私は鑓奉行ですが、たしかに旗は立っていました。御鑓もそこにありました」と答えたが、家康はいきりたち、杖で彦左衛門の平伏している畳をどんどんと突いて、「そんなはずはない。誰も見た者はないぞ。旗は立ってなかったのだろう」とどなった。

「茶臼山の方から崩れてきた者どもが、御鑓や御家中の旗・鑓などを踏みくずしましたが、大御所の御旗だけは立っていました」と彦左衛門がいうと、「弓矢八幡、わしが逃げたというのか」と家康は怒った。家康の馬印は金のふくべに金ののうれんのついたもので、旗は白小旗が七本であった。これらの旗は、実際には押し倒されていたのだが、彦左衛門は、絶対に立っていたと嘘を押し通してしまったのである。

三方ヶ原で一度崩されたことはあるが、その後は一度も崩されたことのない家康の旗が、この最後の合戦で崩れたとあっては、その恥をいつの世にか雪げよう。だから、たとえ首をはねられても、崩されたといってはならぬと彦左衛門は覚悟を決めていたのである。皆逃げたくせに、旗を見なかったなどと証言するとは何たることだと憤慨しながら、それでも、彦左衛門は、必死に旗本たちを弁護した。

取調べだけでは充分ではないと、家康は、八月二十四日には、改めて、旗本同士の入札まで行なわせ、厳重な処罰で旗本たちに報いたのだった。

これらの旗本たちの醜態が、真田隊の猛攻によることは誰の目にも明らかであった。よせ集めの牢人部隊が、誇り高い三河武士たちを散々な目に遭わせたのだから、外様の大名たちが、「真田日本一の士」と称讃し、「旗本たちは、三里ほども逃げた者が皆助かった」などと書きたてて溜飲を下げたのも、またむべなるかなという思いがする。

六文銭の誇り

仙台藩伊達六十二万石の重臣片倉小十郎重長が、幸村の娘を妻として、その家紋を六文銭に改めたことはさきにも述べた通りである。

松代藩第三代目の当主幸道が、仙台家を訪れた折に、自分と同じ六連銭の紋をつけている重臣がいるので、驚いてその事情を尋ねると前述のような事情だったことがわかり、幸道は、その家老職片倉沖之進にねんごろな言葉を与えた。片倉家では、松代藩主から事情を尋ねられたことを光栄として、改めて松代藩を訪れたうえで謝意を表したということである。

この片倉家の祖といわれる小十郎重長は、奥州第一の豪勇といわれた伊達政宗が、片目で引き込み思案だった幼少の頃に、ようやくお守役の職にありついたという小身者に過ぎなかったが、その後は政宗の懐刀としてその擡頭に力をつくし、大坂の陣でも、伊達隊の武将としてめざましい活躍をみせるという人物である。小十郎は、この大坂の陣の折に、幸村の女（むすめ）を捉えて妻とし、

己の武功のうえに、幸村という名将の血をひく名家としての門地をも手中にし、その幸村の名声にあやかって家紋も六連銭に改めたというわけであった。

この一事をみても、幸村の名が如何に高く称揚されたかが判るが、この六文銭の誇りは、五月七日の合戦にも遺憾なくその効果を発揮した。

幸村は、決戦前夜の五月六日、従士たちを集めて、「私は亡父の遺志に随い、一国の主ともなって各々への加恩もすべきところ、天運もつき、明日はこの地において討死と決した。各々方は、私のために二心なくつくしてくれて誠に有難いが、皆、信州に妻子のある身である。だから、私には構わず、早々に帰国して妻子を育てるがよい。私は、秀頼公の請いを受け、武門の義理として死を希っている。これが今生の名残りである」と諭した。だが、従士たちは、異口同音に、「われわれは、御先祖より御厚恩に預かっている者です。今日お暇を賜わるというのならば、一同切腹して相果てます」と答えた。そこで、一同は盃を傾けて、翌日の奮闘を誓い合った。

五月七日の決戦に、六文銭旗を押し立てて、まっさきに家康の本陣に斬りかかって果てたのは、幸村の影武者穴山小助だったという。小助は、自ら「我こそは幸村なり」と名乗り、万代ヶ池の岸で、太刀をくわえ、まっさかさまに泥のなかへ身を投じて死んだという。

幸村は、決して、影武者を作ってわが身を危難から庇おうとしたのではない。幸村の従士たちが、進んで幸村の名を語ったに過ぎないのだ。だから、自ずと生じた幸村の影武者が七人あった

か、あるいはその倍あったかは知らない。ともかく、そう名乗って出さえすれば、敵も味方も、まるで雷に打たれたように四方に飛び散ってしまうのである。

幸村は、このことによって、ついに真田幸村という個人的な個性ではなく、共同人間、または抽象人間としての無数の新しい個性になってしまったのだ。「我こそは幸村なり」と叫ぶことで、誰もがその瞬間に幸村自身のような武将となり、英雄となりえたという事実こそが、真田幸村の目指す『武』の王座そのものであったのではないのか？

六文銭の誇りは、このような無我の境地を伐り拓いて戦場を疾駆し、そして、不退転の英雄の名のもとに、一世を風靡してしまったのである。

元和偃武（げんなえんぶ）

家康は、大坂の役での旗本の詮議を終えると、今度は、軍功のあった東軍の諸将への論功行賞を施行した。

松平忠直・弟忠昌・直昌の越前衆が、五月七日の激戦でたてた殊勲は大であると賞し、忠昌には一万石を与え、さらに翌年九万石に加増した。家康は、直昌にも一万石を与えたが、何故か忠直には領地の加増を行なっていない。折角の大功にも拘らず恩賞の少なかったことに憤慨した忠直は、その後『忠直卿行状記』にみられるような乱行を繰り返して、ついに改易のうえ豊後に流されることとなる。

浅野長晟は樫井の戦いでの功を賞せられて三万石余の加増、藤堂高虎・井伊直孝も、八尾・若

江の戦いでの戦功により、それぞれ五万石を加えられた。そして、戦死者には、遺族にその遺領が与えられ、小笠原秀政の子忠政のように、父の功によって五万石を加えられた者もあった。

信州上田の真田家では、藩主信之は病のために参陣しなかったが、長子信吉、次子信政が名代として参戦し、この時の顕彰では特に賞せられることはなかったが、その後、元和八年（一六二二）には、四万石を加増されて上田から松代へ移り、沼田三万石とあわせて十三万石余の大大名となった。信吉が父信之に先だって死ぬと、その子信利が沼田領を継ぎ、信之の二男信政が第二代の松代藩主となった。信利の沼田領三万石は、失政のために天和元年（一六八一）に改易されたが、信政の子孫が受け嗣いだ松代領十万石は、その所領を安堵したまま明治維新にいたるのである。

家康は、大坂の役の一応の処理を終えると、八月四日に京都を発ち、二十三日に駿府へ帰った。秀忠は、家康に先立ち、七月十九日に京都を出て、八月四日に江戸城へ帰着している。この間、朝廷では、家康の内申によって、七月十三日に元号を元和と改元した。つまり、この日以前の元号は、正しくは慶長二十年ということである。

この改元は、家康が、豊臣家の覆滅による天下統一を記念して申請したものであることは明らかであり、これ以後、幕末にいたる二百五十余年の長い年月、徳川幕府に正面切って歯向かうものもない平和な時代が続くこととなるのである。この年のことを、元和偃武（げんなえんぶ）の年というのはそのためである。

真田幸村考

『武』の意義

真田幸村のこうした生涯を考える時、幸村の思想の根底に根ざした『武』とは、一体如何なるものであったのかという疑問が湧く。

「武士道といふは死ぬ事と見付けたり」と説く、例の『葉隠』の思想とは、やはり、いささか異なった一面があるようである。幸村が、大坂の陣で死を決意していた真意は、必ずしも豊臣家への忠節のためではなかったし、ましてや黄金二百枚・銀三十貫という金品に惑わされたためでもなかった。

とすれば、幸村は、ただ、起るべくして起った大坂の役という必然のためにのみ、かくも壮烈に自己を捨てて戦ったのであろうか？

中野秀人氏は、『真田幸村論』の中で、幸村のことを、「古今東西にその類を絶した武将」と説き、「ナポレオンや、ビスマルクや、太閤秀吉や、また優に蜜蜂の唸声をも凌ぐ偉大なる 英雄」

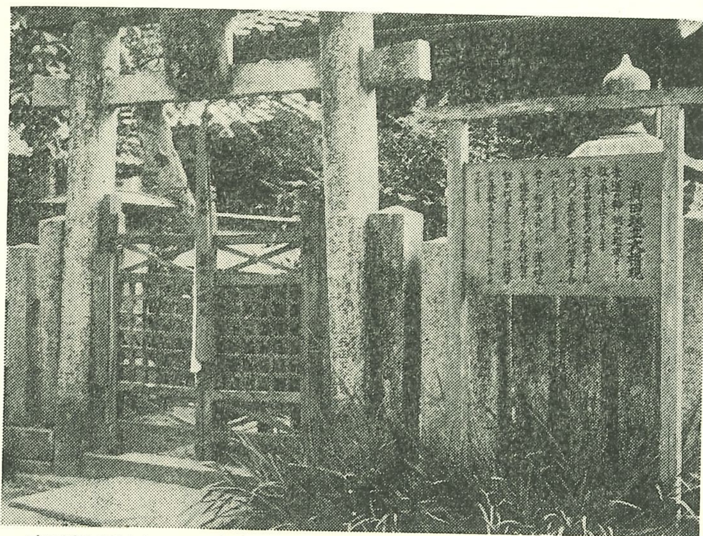
と称している。しかも、「その『武』たるや、既に抽象的普遍性に於て、一つの営みであり、聖なるものである。もしも彼の『存在』を考えることが出来ないならば、すべての英雄は抹殺されなければならない」とまでいい切っている。

聖なる『武』とは、果たしてありうべきものなのか否か、すべての英雄を抹殺しなければならぬほどの『存在』であったのかどうかは、本稿の極むべき課題ではないが、せめて、幸村がその生涯において示そうとした『武』の意義だけは探り当ててみたい気がする。

恐らく、幸村は、大坂の陣という一つの偶発的な出来事のなかに、己の人生に最もふさわしい生き方を把み取るための場を見いだして、その残された半生を賭けてみようとしたのではあるまいか？

つまり、幸村は、織田・豊臣・徳川と引き継がれた天下統一への歩みと、秩序を求め、平和を願うひたすらな世情の流れとに対応して、天下人として自他ともに許す家康への積年の意地を通し、抵抗とは、真の平和とは如何なるものであるかを示すことこそが、まことの『武』の意義であることを顕示しようとしたのではあるまいか？　別ないい方を借りるならば、幸村は、『武』を揮うことによって『武』の意義を探ろうとしたのではなく、そうした表現によってしか己の人生の意義を把握する方策がなかったのかも知れない。

『武』とは、もともと人君が干戈の威力によって兵乱を未発にとどむるという義である。つまり、



真田庵に祀られている真田地主大権現

『武』は、真の勇気以外の何物であってもならないのだ。

その兵乱を未然に防ぐべきはずの人君家康が、あえて、豊臣方を挙兵に追い込んだ不徳に対して、幸村は、無意識のうちにその非を詰るべく立ちあがったのかも知れない。幸村は、その故にこそ、家康をして、あわや切腹という窮地にまで追い込むことができたに違いないのだ。

最後の武人

幸村は、確かに、下剋上と争乱に明け暮れた戦国時代の最後の武人であったといえる。ただ、幸村には、幸か不幸か、全くといってよいほど、大坂の陣を除いては、その活躍の場が与えられなかった。そして、その最後にして唯一の場である大坂の陣に、見事にその武人

としての面目を発揮したのだ。つまりは、あの北条の囲みを突き破った初陣も、関ヶ原の合戦の折の上田城の攻防も、所詮は、この大坂の陣での活躍のための序幕に過ぎなかったのである。

わが国の戦国時代は、室町時代の後半から安土桃山時代にいたるまでの時期、すなわち、応仁の乱の余波が地方に広がり、各地で戦国大名が分国を地盤に、強い封建支配をはじめたころ（一四八〇前後）から、織田信長が室町幕府最後の将軍足利義昭を奉じて京都に入り、形式的にではあるが一応の統一政権を樹立する基礎を築いた永禄十一年（一五六八）ごろまでの約一世紀を指すものであると考えられている。

幸村は、その信長が上洛を果たした前年、永禄十年（一五六七）に、武田信玄の近臣武藤喜兵衛（真田昌幸）の次男としてこの世に生を受けたのである。したがって、幸村の生きた時代は、まさに戦国群雄割拠の争乱から江戸幕府による中央集権体制への移行期そのものであったということができる。そして、その間、すべての人々は、常に新しい秩序と統一を求めて生き続けてきた。人々の心に、焦躁・狂奔・離間・不信・裏切・謀叛といったあらゆる悪を憎む風潮が生まれ育っていった推移は当然の帰結である。下剋上が必要悪として認められた時代が、ようやく終焉の時を告げるわけである。

小田原の北条、越後の上杉、甲斐の武田、駿河の今川、近江の浅井、美濃の斎藤、伊勢の北畠、越前の朝倉、尾張の織田、三河の松平（徳川）、備前の宇喜多、出雲の尼子、安芸の毛利、土

佐の長宗我部、豊後の大友、薩摩の島津、奥羽の伊達と、戦国大名の名を挙げれば際限もないが、戦いに明け、戦いに暮れた、それら戦国大名たちのなかに、どれほどの真の武人が存在したであろうか？

前節でも述べたように、『武』の意義が、干戈の威によって兵乱を未然に防ぐことであるとするならば、『武』とは、必ずや侵略そのものであってはならない。

しかし、統一への過渡期的なその時代においては、あるいは、その侵略すらが『武』でありえたことがあったかも知れない。戦いは戦いに逆らい、戦いを阻む人間精神の昂揚を失う時、是非曲直もなく、大義名分もなく、また弓矢の誉をも失うのである。

家康は、確かに偉大なる武人であったかも知れない。だが、家康は、決してその終生を武人として押し通したわけではない。晩年には、明らかに政略家への変貌をなし遂げてしまっているのである。豊臣秀吉もまた然りである。さらには、天下統一の覇者となりえたか、あるいは、その膝下に臣従したかには関わりなく、伊達が、上杉が、毛利が、島津が歩んだ道も、等しく政略家への変貌の道であった。

とすれば、戦国の武将としての矜持を死にいたるまで貫き通した織田信長こそが戦国最後の武人だったのであろうか？　そして、武人なるが故に政略家とはなりえず、明智光秀の謀叛によって本能寺に果てたのであろうか？　こうした見地から幸村を見直せば、幸村は、確かに戦国最後

の武人としての資格を備えてくる。幸村は、己の置かれた流人という立場において世情の推移を瞠め、家康の非に対する必然的な『武』への道を選んだのであるから——。

が、しかし、九度山での十四年間の蟄居生活が、幸村に与えた影響が如何なるものであったかは、容易に探り当てることのできぬ謎であるとの見方も成り立つ。と同時に、幸村の九度山での生活が、決して、『立川文庫』その他にみられるような、家康打倒の執念一辺倒でなかったことも確かである。とすれば、幸村は、やはり、世情の推移の必然として、生まれいずべくして生まれた戦国最後の武人だったと言いうるのではないだろうか？　すなわち、戦国時代は、まさしく幸村の『武』によって一大団円を結びえたと看做さなければならないのである。

虚説俗説

幸村を取り巻く妄談巷論の類は、それこそ枚挙にいとまがないほどである。しかし、これらの妄談巷論を、単なる虚説であり俗説であると決めつけることは、必ずしも当をえた解釈であるとは言い難い。

『真田三代記』が江戸中期に書かれた軍記として、また、『立川文庫』が大正年間に刊行された講談として、庶民の心にそこはかとない夢を与え、勇気を抱かせた書であるという効果は大きい。のみならず真田幸村の活躍と、埋もれた歴史の真実とを伝えた功績もまた多とせずばなるまい。

例えば、幸村が、冬の陣のあと、秀頼の再挙にいたるわずかな平和のひと時、武田家での同輩として旧友同士であった越前少将松平忠直の家臣原隼人助貞胤と旧交を温めた逸話が、『武林雑

話』や『旧伝集』などに見られるのを取りあげてみよう。

——冬の陣が和談になると、幸村は、原隼人を招待して馳走をした。幸村は、小鼓を取りだし、嫡子の大助に曲舞を二、三番舞わせたあと、茶を点じてもてなした。幸村は、「このたびの合戦で討死いたすべきところを、こうしてお目にかかれたのは嬉しいことです。不肖ながら、一方の大将を承ったことは、今生の思い出であり、死後の面目とも存じています。御和睦も一時のこと、やがては、また戦いがはじまりましょう。われわれ父子も、一両年のうちには、討死と思い定めております。御覧下さい。床に飾ったあの鹿の角を打った兜は、真田家重代の宝で、父安房守（昌幸）からこの信繁（幸村）に伝えられたものです。最後の戦いには、この兜を着けて討死いたすつもりです。もし、この兜を御覧になられたなら、信繁の首と思し召して、一遍の御回向をお願いします。君のために討死するのは武士の習いですが、伜大助は、これぞと思うことにもあわず、一生浪人暮らしのまま、年十五になるが早いか、戦場の苦と埋れること、誠に不憫に思えてなりませぬ」と涙ぐんだ。隼人も涙を流して、「ああ、武夫ほどはかないものはありません。戦場に赴く身は、いずれが後先と定めえましょう。必ず冥途でおあいしましょう」と語りあった。その後、幸村は、白河原毛のたくましい馬に、六文銭を金で摺り出した鞍を置いて引きだし、ゆらりと乗って乗り回し、「もし重ねて合戦があったら、御城は破却せられたことゆえ、必

ず平場の合戦となりましょう。天王寺表へ乗りだし、東方の大軍と渡り合い、この馬の息のつづくかぎり戦って討死すべしと存じ、秘蔵いたしております」といって馬からおり、これが今生の暇乞いと、また盃を指し、夜半におよんで立ち別れた。果たして、翌年五月七日、幸村は、その兜を着け、その馬に乗って討死した――。

この所伝が、史実であるかどうかは別として、如何にも幸村にふさわしい話であるという気がするのは事実である。

こうした類の逸話が、幸村の人柄を知るうえに、重要な手がかりとなることはいうまでもない。幸村が、夏の陣を前に、すでに死を覚悟していたことや、たとえ、敵味方に分かれてはいても肉親や旧友への深い情愛は、変わらず持ち続けていたことなどが読み取れるのである。

大坂夏の陣でのあの獅子奮迅の働きが、こうした情愛を乗り越えたうえにおいてなされたということが、幸村の生き方へのより深い同情となり、より悲惨な最期への称讃となって、庶民たちの胸を搏つことはいうまでもない。

由来、わが国の庶民たちは、超人的な武勇を示してのちに、悲惨な死に甘んじる武将を好み、そのくせ、それらの英雄の死を生存説にすり変えてしまおうとする。源為朝生存説、源義経生存説、真田幸村生存説のいずれもが然りである。

生存説のあるが故に、虚説俗説とみなされ勝ちなこれらの妄談巷論に、いま一度眼を当て直して、歴史上の真実を見出そうとすることも、また、われわれ現代人に課せられた責務のような気がするのである。

虚像の軍師

この書の表題には、『虚像の軍師』という表現を用いたいと思った。しかし、「虚像の軍師」とは、如何なる意味を持つことばであるかは詳述しえない。

幸村は、その風貌や姿勢から推し測ると、むしろ、『軍師』という表現が当たらぬ人物であったような気もする。何故なら、関ケ原の役に当たって、兄信之と袂を分かって父の意に従ったことも、十四年にわたる九度山での蟄居生活に甘んじたことも、秀頼に乞われて大坂城に籠ったことも、いずれもが、とてつもないお人好しだったために歩まねばならぬ道だったのかも知れぬからである。

京都町奉行与力の神沢貞幹が著わした『翁草』には、「真田信仍（幸村）ことは、千載人口に遺る奇策幾百千ぞや。そもそも信州已来、御当家（徳川家）に敵する事数回、一度も不覚の名を得ず。御当家の斑猫（はんびょう）（毒虫）なりと世に沙汰せり。――あゝ、当世の英雄、信仍に非ずして誰ぞや――。絶等離倫、一世の人物、今に至りて婦童もその名を聞きてその美を知る」と書かれてあるが、幸村は、果たして、こうした幕府の役人にまで称えられる庶民の英雄としての自らへの評価を予期しえたであろうか？

幸村の一生は、むしろ不遇の一語につきるかも知れない。父とともに過ごした高野配流の十四年間は、男としての壮年時代を、ほとんど仕事らしい仕事もせずに過ごすという無為のなかに自己を閉じ籠めてしまったし、大坂の陣で城方に加わったことを、自ら「きっかい」な行為と国許への便りにもしたためているあたり、周囲の人々や後世の庶民たちが考えるほどには潔く身を処しえたとは思っていないからである。

ただ、幸村にとっての仕合わせは、大坂の陣という晴れの場をえて、その人生に最後の華を咲かしえたことだけが唯一のものだったのではないだろうか？　しかも、それが、信州の真田本家に禍いを齎すどころか、却って、その名声をも高めることとなったのであるから……。

このように、幸村の歩んだ生涯は必ずしも目標に向かって計画的に拓かれた道を踏破したものではなく、やむなく選んだその行動によって、たまたま希代の英雄という座に着かされてしまったという観さえあるのだ。つまりは、幸村には、やはり、『虚像の軍師』という呼び方が最もふさわしいのではないかと思えるのである。

真田太平記補遺

真田風雲録

『真田三代記』は、『太平記』との比較によって論じられる場合が多く、なかには、『真田三代記』のことを『真田太平記』という者さえある。もちろん、戦記としてもそうであるし、真田一族と楠公父子、殊に幸村と正成との生き方の対比においてもその傾向が顕著である。

だが、その背景となる時代には自ずと異なった要素が多いこともまた当然のことであろう。すなわち、建武の中興における争乱と戦国群雄時代の争乱とは、その要因から終局にいたる全てが異質であるといわねばならない。そして、その後に起こる朝廷と足利幕府との争い、豊臣家と徳川幕府との争いにおいてもそうである。

正成は、帝への孤忠のために戦ったが、幸村は、必ずしも豊臣への忠節のために戦ったのではない。正成の背景には、厳然としたヒロイズムと尽忠の思想が存在するが、幸村は、裸一貫で一途に天下の『武』を戦おうとしたに過ぎないのである。

『真田三代記』が『真田太平記』でありえない理由はそこにあるのだ。幸村の用いた兵法が、楠の用いた兵法に類似していることも、あるいは、寡兵よく大軍を打ち破ったという、ただその一点においてのみの一致であるのかも知れない。とすれば『真田三代記』は、福田善之氏の戯曲の題名にもみられるごとく、むしろ、『真田風雲録』とも呼ぶべきものなのであろう。

幸村の家族

幸村の法名は、「大光院殿月山伝心大居士」といい、その墓は、信濃の松代、高野山麓の九度山、京都の嵯峨野の三ヶ所にある。

幸村の死後、その家族は四散したが、『左衛門佐君伝記稿』等によれば、つぎの通りであるといわれる。

幸村の妻　豊臣秀吉の近臣大谷刑部吉継の娘で、天正末年か文禄年間ごろ幸村に嫁いだ。九度山蟄居にも、大坂籠城にも幸村と行動をともにし、大坂落城の直前、元和元年（一六一五）五月二日、紀州伊都郡に忍んでいたところを浅野長晟の手の者に捕えられて家康のもとに連行された。黄金五十七枚と、秀頼が幸村に与えた国俊の脇差を持っていたため発覚した。その後の消息については不明だが、その位牌や墓が娘の嫁ぎ先石川家ゆかりの京都嵯峨野の竜安寺大珠院にあるところから、この石川氏に扶持されて余生を過ごしたと考えられている。

すへ　母は、幸村の家臣堀田作兵衛興重の妹。作兵衛の養女として石合十蔵道定の妻となった。堀田作兵衛は、幸村に従って大坂に入城し戦死した。石合家は中山道長窪宿の本陣となり、子孫も現存している。十蔵は寛永十六年に大坂方の落人をかくまったとの嫌疑で江戸へ召喚されたが、無罪赦免となった。すへは、寛永十九年十二月二十八日に没し、禅宗長安寺に葬られている。

いち　信州で生まれ、九度山で死んだ。大谷氏腹の長女で、「蓮華定院書面」には、「左衛門殿御子惣領於市様、此人九度山にて御死去」とある。



九度山町の真田祭（真田十勇士の行列）

梅　仙台藩士片倉小十郎重長の妻。片倉家は仙台藩の重臣で、重長は武名高く、鬼小十郎と言われ、白石城一万五千石を与えられて、子孫は明治にいたって男爵となった。この片倉家が家紋を六文銭に改めたことはさきにも述べたが、葬地白石当信寺の寺紋も六文銭である。

あくり　蒲生源左衛門郷真の妻。郷真は蒲生氏郷の重臣で、陸奥三春三万石を領したが、主家断絶のため浪人となった。

大助　幸村の長男、大坂城で秀頼に殉死したことは前述の通りである。九度山で生まれた四人の幸村の子女のなかでの最年長であった。

しょふ　かね　いずれも九度山にて出生。うち一人が石川備前守光吉に嫁ぎ、のちに、その縁によって、菩提寺の京都竜安寺大珠院に幸村の墓を建てたという。

大八　ある年の端午の節句に、京都で石合戦に加わって、石に当たって死んだ。「蓮華定院書面」にも「五月五日、京都に於て印地打ち成され、御死去候」とある。

真田十勇士

真田幸村について述べる場合、如何に架空の物語であるからとはいえ、真田十勇士のことに全く触れずに済ませるというわけにはゆかない。

この「真田十勇士」という呼び方は、『立川文庫』が、『常山紀談』によって伝えられる「尼子

十勇士」からヒントをえてはじめて用いた言葉であろうといわれている。

「真田十勇士」というのは、猿飛佐助・霧隠才蔵・三好清海入道・三好為三入道・穴山小助・由利鎌之助・筧十蔵・海野六郎・根津甚八・望月六郎の十人であるが、このうち、『真田三代記』にすでにその名がみられるのは、三好清海入道・三好為三入道・穴山小助・由利鎌之助・海野六郎・根津甚八の六人である。そのほか、霧隠才蔵の原型と思われる霧隠鹿右衛門が、大坂冬の陣の折に、家康が淀城から奈良へ移ることを探りだす忍びの者として登場しているが、他は、いずれも十勇士という人数に合わせるために作りだされた人物であろう。

ちなみに、前記『常山紀談』から「尼子十勇士」の名を書き出してみると、山中鹿之介・藪原茨之介・五月早苗之介・上田稲葉之介・尤道理之介・早川鮎之介・川岸柳之介・井筒女之介・阿波鳴戸之介・破骨障之介の十人である。その氏名だけから受ける感じでは、むしろ、「尼子十勇士」の方が作りもののような気もするが、この方には、かなりしっかりとした史料があり、『立川文庫』にあるような荒唐無稽さでは取り扱われていない。

『立川文庫』の大ヒットは、何といっても猿飛佐助と霧隠才蔵の両忍者に負うところが大である。この二人が一方は甲賀忍法、他方が伊賀忍法の達人であることも奇妙な取合わせで、これがこの小冊子の成功の一因でもあったと思われる。

『立川文庫』は、このあと、「三好晴海入道」とか「塙団右衛門」・「後藤又兵衛」といった大坂

城ものを出版する一方、「忍術自雷也」その他の忍術ものをも指向する。そして、さらに、「水戸黄門」・「宮本武蔵」などの漫遊記ものも手がけて、十年間におよそ二百冊もの小型文庫本を刊行する。内容は、すべて大衆好みの講談もので、講談小説の読者層を一挙にかっさらって出版界を席巻した。この風潮は、現在のマンガブームにも似た勢いで全国各地の小・中学生をも耽読させ、ついには、この文庫本の読書禁止令まで出るほどの流行となった。現在の壮年以上の読書家の殆んどが、一度は愛読した経験を持つとさえいわれている。

真田祭

真田昌幸・幸村が蟄居を命ぜられた高野山麓の九度山は、人口一万余りの町である。

紀ノ川の水運が盛んであった昔は高野への登山口として、観光と開発のブームに乗ったいまは高野山への有料道路の入口として、いつに変わらぬ重要な役割を果たしている。この町の特産物は、日本一を誇る富有柿と紀州みかんの果樹園で、その生産量は、富有柿二百万貫、紀州みかん七十万貫といわれている。

しかし、この町の最大の誇りは、真田家の菩提寺である真田屋敷跡の善名称院真田庵と、年に一度の真田祭大法会の催しである。

この真田祭は、以前は、大坂夏の陣での幸村の戦没の日に因んで、毎年五月七日に催されていたが、最近では、五月五日の子供の日に、町を挙げての観光行事として盛大に挙行されるように

なった。

当日は、六文銭の旗印を掲げた真田十勇士の面々が、鎧冑に身を固めて馬にまたがり、戦国時代さながらの絢爛たる装いで町中をねり歩くという豪華絵巻を繰り展げる。行事は、年々盛大さを増していくが、この日以外は、真田庵は、じつに静かな落ち着いた尼寺である。院内には、真田地主大権現が祀られ、真田昌幸公の墓、真田幸村公碑、幸村・大助両公の墓のほか、真田家臣の墓もあり、昌幸・幸村父子の育てた牡丹園や、幸村公の雷封じの井戸などもある。そして、さらに、思わず脚を止めさせる二基の句碑が、訪れる人々のそこはかとない旅情を慰め、真田屋敷の遙かなる往古の佇いをも偲ばせてくれるのである。

炬燵して語れ真田が冬の陣（蕪村）

あとがき

近藤 精一郎

『真田幸村』との初めての出会いは、もう四〇年以上も昔のことになります。子ども心に思い描いた幸村像は、すごいという一語に尽きました。もちろん、『立川文庫』という講釈本を読んでのことです。

当時は、今のように劇画やアニメから物語の面白さに移るというのではなく、字が読めるようになると、直接活字を辿ってみるというのが大半の子どもたちの行き方だったように思います。童話を読みあさる子もいましたが、そのほとんどは、女の子だったのではないかという気がします。だから、男の子は、すぐに冒険物語とか時代活劇とかに飛びつき、その魅力にとり憑かれたようです。それも、親にかくれてこっそりと読むのが、また格別の楽しさに思えたからなのではないでしょうか？

落ち行かば地獄の釜を踏み破り
　あほう羅刹に事を欠かさん

三好為三入道が立ち腹を切りながら詠んだという辞世の歌が、今も不思議なほどの鮮明さで思い出されます。猿飛佐助や霧隠才蔵・三好晴海入道らの縦横の活躍は、劇画やアニメで見るのとは比較にならぬ緊迫感で子ども心を魅了していたようです。『真田十勇士』とはみんな顔なじみで、その背後に『真田幸村』というとてつもない偉い大将が控えていたという印象が、今も強く心に焼きついています。

こうした子どもの頃の記憶が拭い切れぬままに、真の幸村像に迫るというのは容易なことではありませんでした。図書館に通いつめたり、関連のありそうな書物を買い漁ったりして調べれば調べるほど、『真田幸村』という人物の難解さと不可解さとに突き当って悩まされました。

もともと、私は、歴史学者でもなければ、郷土史家でもありません。そんな私が、歴史小説としてではなく、史実に則した人物論としての『真田幸村』を書こうというのですから、苦労に苦労を重ねなければならなかったのは当然だったのかも知れません。真田六文会の方々をはじめ、多くの方々のアドバイスや激励を受けながら、ようやくの思いでまとめ上げたのがこの本です。

まだまだ不充分なところも多いと思いますが、ともかく、高野配流後の『幸村』の脚どりを追って歩きました。歴戦のあとを辿って大阪城や茶臼山一帯を徘徊しながら、さまざまな情景を脳裡に描いたり打消したりもしました。

いずれにしても、『幸村』の活躍は、今も私の心の中に生き続けています。いや、今後も永遠

に消え去ることがないに違いありません。

本書の刊行に当って、さまざまな面で御支援御鞭撻をいただいた諸兄諸賢に、改めて心からのお礼を申し上げます。

真田幸村関係略年表（死没者は、本書関係者のみにとどめ、他は省略。没年齢の明らかな者は、カッコ内に記入）

西暦	年号	月	主要事項	死没者
一五六七	永禄一〇		幸村生まる。父昌幸、母山之手殿。	
一五七三	天正元	四	武田信玄陣没する。	武田信玄（五三）
一五七四	二	五	19幸村の祖父幸隆没する。 幸隆の長子信綱が真田の家督を嗣ぐ。	真田幸隆（六二）
一五七五	三	五	21武田勝頼、織田・徳川連合軍と長篠に戦って大敗する。この戦いに信綱が戦死し、昌幸が真田の家督を嗣ぐ。	真田信綱（三九）
一五八二	一〇	三	21武田勝頼、天目山に敗れ、田野に自害して武田氏滅びる。	武田勝頼（三七）
		四	8昌幸、織田信長に馬を贈り、臣従の意を表する。	

西暦	年号	月	事項	没年
		六	織田信長、本能寺において明智光秀に討たれる。	織田信長（四九）
		七	北条氏直が信濃に侵攻。昌幸、北条に属する。	
		九	28昌幸、徳川家康に属する。	
一五八三	一一	四	昌幸、上田城を築く。	
一五八四	一二		昌幸、上杉景勝に属し、のち叛く。	
一五八五	一三	七	15昌幸、上杉景勝に臣従を誓う。	
		八	幸村、人質として春日山に赴く。	
		閏八	昌幸・信幸（信之）父子が、徳川軍を神川の合戦に破り、次いで丸子にも破る。	
		一〇	17昌幸、豊臣秀吉に臣従を誓う。	
一五八六	一四	一一	幸村、大坂に出仕する。	
一五八九	一七	一二	信幸(信之)、徳川家康の許に出仕する。	
		一一	北条氏の兵、真田の名胡桃城を攻め、秀吉が怒って小田原征伐を命ずる。	
一五九〇	一八	三	昌幸・信幸・幸村父子、小田原攻めに加わる。	
一五九一	一九	七	秀吉、真田父子に名護屋在陣を命ずる。	
		九	24秀吉、「朝鮮征伐」を命ずる。	
一五九二	文禄元	八	3豊臣秀頼生まる。	
一五九四	三	一一	2幸村、従五位下左衛門佐に任ぜらる。	
一五九八	慶長三	八	28朝鮮への再出兵中に秀吉没する。	豊臣秀吉（六三）
一五九九	四	一	20豊臣秀頼、大坂城に移る。	
一六〇〇	五	五	3徳川家康、上杉景勝の会津攻めを諸大名に命ずる。	
		七	21石田三成挙兵の密使が、上州の真田の陣にも訪れる。	
			昌幸・幸村と信幸とが、犬伏の陣で東西に分かれる。	
		九	6徳川秀忠の軍が、真田の拠る上田城を攻めて敗退する。	
			15関ケ原の合戦に東軍が勝利を収める。秀忠軍はこの合戦に遅れる。	石田三成（四一）

		一二	13昌幸・幸村父子、上田城を明け渡して高野に向かう。	
一六〇三	八	二	12徳川家康、征夷大将軍に補せられる。	
一六〇五	一〇	四	16家康が隠居し、秀忠が将軍職を世襲する。	
一六一一	一六	三	28豊臣秀頼、二条城で徳川家康と会見する。	
		六	4昌幸、高野山麓九度山に没する。	真田昌幸（六四）
一六一二	一七		このころ、幸村入道して好白と号す。	
一六一四	一九	七	家康、豊臣家鋳造の鐘銘に疑義を挟み、方広寺供養の延期を命じる。	
		八	片桐且元、弁明のため駿府に下るが、家康に体よくあしらわれる。	
		一〇	1片桐且元、豊臣家より追放され、茨木の居城へ退去する。	
			家康、大坂征討令を発する。	
			10幸村、子大助らと共に大坂に入城する。	
		一一	15家康・秀忠、大和路と河内路から大坂に	

			出陣する。	
			26木村重成・後藤又兵衛の軍が、今福の戦いに東軍を破る。鳴野の戦いでは、城方の軍が上杉景勝の軍に敗れる。	
		一二	4前田利常・松平忠直・井伊直孝らの軍が、幸村の守る真田丸を攻めて大敗する。	
			6家康、本陣を茶臼山に進める。	
			16塙団右衛門が、夜討ちを仕掛けて寄手の軍を破る。	
			17家康、朝廷からの和議斡旋を断わる。	
			19冬の陣の和議が成立する。	
			22和睦の誓紙交換が完了する。	
			23大坂城惣構の壊平作業始まる。	
一六一五	元和　元	一	19壊平工事ほぼ成る。	
		三	12京都所司代板倉勝重、大坂の再挙を家康に報告する。	

		四	6家康、再び大坂征討令を発する。 9大野治長、大坂城中で刺客に襲わる。 25諸大名が続々と京都に着陣、大和・河内路から大坂に進撃を始める。 26城方の軍が大和方面に出没し、寺院や町に火を放つ。 28城方の軍が堺の町を焼き、更に南進する。 29払暁、樫井で初めての合戦が行なわれ、城方の先鋒塙団右衛門が討死する。	塙団右衛門
		五	5家康・秀忠の本隊が京都を出陣する。 6道明寺・誉田方面で、明け方から城方と寄手の大激戦が展開され、後藤又兵衛・薄田隼人らの城方の勇将が討死する。その後、両軍が対峙し、幸村が城方の殿を受け持って撤退する。八尾・若江方面でも、明け方から激戦が続き、木村重成が戦死する。 7正午頃、本多忠朝隊と毛利勝永隊が衝突し、全戦線での死闘が始まる。真田幸村隊が家康の本陣を襲い、御陣衆逃散するも、遂に松平忠直隊の多勢に敗れて幸村戦死。夏の陣の趨勢がほぼ決する。夕刻、寄手が大坂城内に攻め込み、二ノ丸落ちる。夜、千姫が城を出る。 8秀頼・淀君、城中の矢倉で自害。大助も秀頼に殉ずる。 23秀頼の子国松、六条河原で斬首、豊臣家滅びる。 13家康の申請により元号を元和と改める(元和偃武)。	後藤又兵衛 薄田隼人 木村重成（二三） 本多忠朝（三四） 豊臣秀頼（二三） 淀君（四九） 真田大助（一六）
一六一六	元和 二	四	家康、天下統一のすべての宿願を達成して大往生。久能山に葬られる。	徳川家康（七五）

現存遺跡遺品等一覧（本書に特に関連の深いもののみを記載し、他は省略）

遺跡

松尾城（天白城）趾	長野県真田町	
真田山城（松尾新城）趾	長野県真田町	
砥石城趾	長野県上田市	
上田城趾	長野県上田市	国指定史跡
海津城趾	長野県松代町	
名胡桃城趾	群馬県月夜野町	
沼田城趾	群馬県沼田市	
岩櫃城趾	群馬県吾妻町	
真田出丸跡（三光神社境内）	大阪市天王寺区	
真田神社（上田城本丸）	長野県上田市	

真田地主権現（真田庵境内）	和歌山県九度山町	
真田屋敷跡	長野県真田町	県指定史跡
松代藩文武学校	長野県松代町	国指定重要文化財
上田城博物館（上田城二の丸）	長野県上田市	
真田邸	長野県松代町	
真田信綱・昌輝戦死碑	愛知県長篠町	
真田幸村戦死跡之碑（安居天神境内）	大阪市天王寺区	
真田庵	和歌山県九度山町	国指定重要文化財
蓮華定院（真田家菩提寺）	和歌山県高野町	
真田墓地	和歌山県高野町	
真田藩主御霊屋（長国寺境内）	長野県松代町	国指定重要文化財
真田幸隆墓（長谷寺）	長野県真田町	
真田信綱墓（信綱寺）	長野県真田町	
真田昌輝墓（西墓地）	福井県福井市	
真田昌幸墓（長谷寺）	長野県真田町	
〃　（真田庵）	和歌山県九度山町	

真田昌幸夫人〈寒松院〉墓（大輪寺）	長野県上田市
真田信之墓（長国寺）	長野県松代町
真田信之夫人〈大蓮院〉墓（芳泉寺）	長野県上田市
〃　〃（正覚寺）	群馬県沼田市
〃（勝願寺）	埼玉県鴻巣町
真田幸村墓（長国寺）	長野県松代町
〃（真田庵）	和歌山県九度山町
〃（龍安寺）	京都市右京区
真田信吉墓（天桂寺）	群馬県沼田市
真田歴代藩主之墓（長国寺）	長野県松代町
真田大助墓（真田庵）	和歌山県九度山町
真田幸村・大助供養碑（長国寺）	長野県松代町
真田幸村夫人〈隆清院〉墓（龍安寺）	京都市右京区
真田幸村長女阿菊墓（西蓮寺）	長野県長久保町
真田幸村三女阿梅・次男大八墓（当信寺）	宮城県白石市
真田幸村六女阿菖蒲墓（田村墓地）	宮城県白石市

真田幸村三男幸信墓（妙慶寺）	宮城県岩城町
真田幸村四男之親墓（真田家墓地）	香川県寒川町

遺品

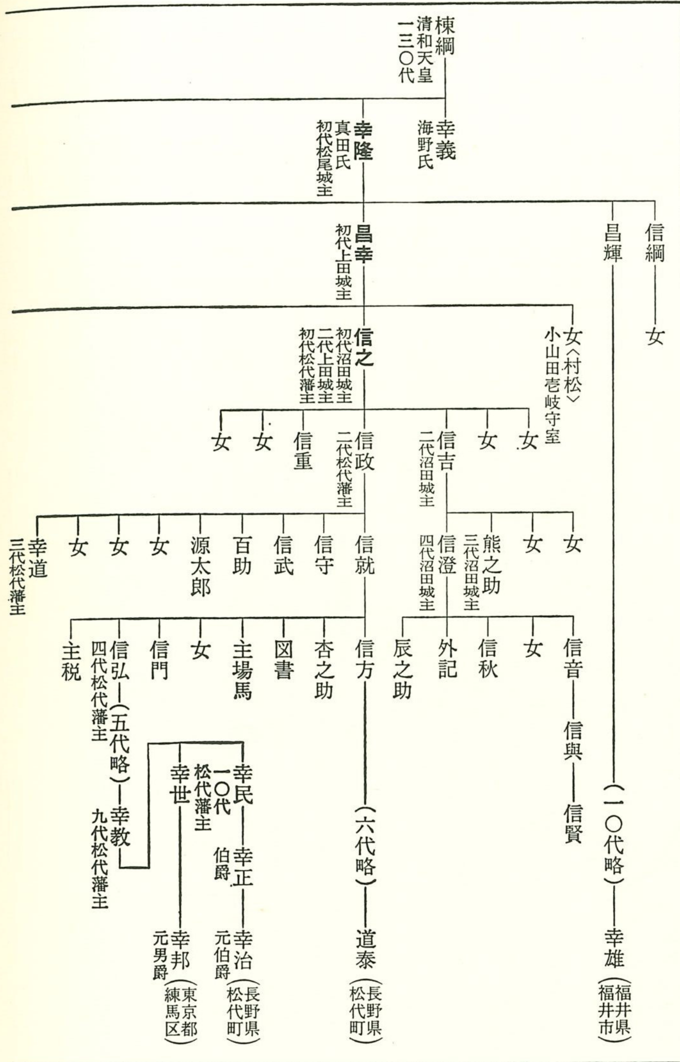
武田信玄より真田幸隆宛領地状	天文十九年七月二日付
北条氏邦より真田昌幸宛書状	天正十年三月十二日付
豊臣秀吉より真田昌幸宛書状	天正十一年十月十七日付
徳川家康より真田信之宛書状	慶長五年七月二十四日付
石田三成より真田昌幸宛書状	慶長五年七月三十一日付
真田昌幸より長男信之宛書状	慶長八年三月二十五日付
真田幸村より実姉村松宛書状	慶長二十年一月二十四日付
真田幸村より小山田壱岐守宛書状	慶長二十年三月十九日付
首級隠しの胴（真田信綱着用）	信綱寺蔵
血染の陣羽織（真田信綱着用）	信綱寺蔵
角丸の鎧甲冑（真田昌幸着用）	上田城博物館蔵

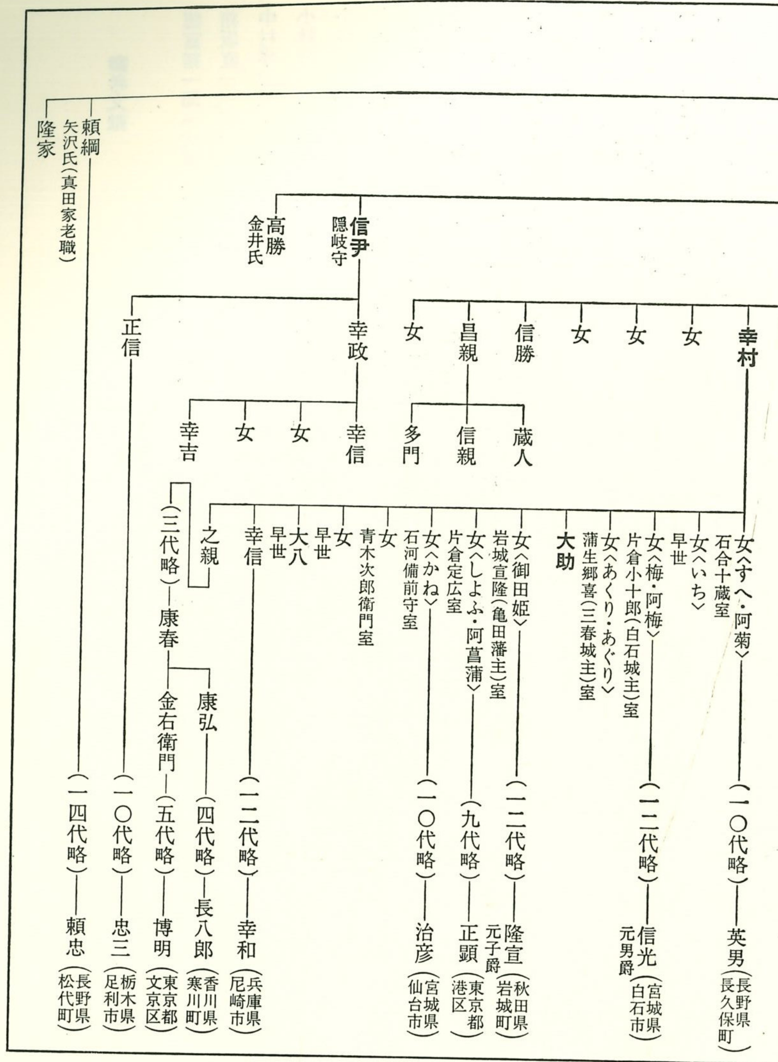
昇梯子の鎧（真田昌幸着用）　松代真田家蔵
萌黄縅胴丸鎧（真田信之着用）　松代真田家蔵
鉄二枚胴具足（真田幸村着用）　大阪城天守閣蔵
青江の太刀（真田信綱使用）　松代真田家蔵　国指定重要美術品
三原の太刀（豊臣秀吉より拝領）　松代真田家蔵
真田の三名剣（徳川家康より拝領）
　銘吉光・銘正宗・銘義弘　松代真田家蔵
銘正宗の短刀（真田幸村使用）　真田庵蔵
大坂陣の槍先（真田幸村使用）　真田庵蔵
銘国綱の薙刀（真田幸村五女御田姫使用）　妙慶寺蔵
銘兼道の大小（真田幸村三男幸信使用）　妙慶寺蔵
真田幸村夫妻の位牌　妙慶寺蔵
真田幸村五女御田姫〈顕性院〉位牌　妙慶寺蔵
真田幸村三男幸信位牌　妙慶寺蔵

絵図その他

真田幸隆画像　長国寺蔵
真田昌幸画像　上田城博物館蔵
真田信之画像　松代真田家蔵
真田幸村画像　真田博明氏蔵
大坂冬の陣屏風　国立博物館蔵
大坂冬の陣真田出丸屏風　国立博物館蔵
大坂夏の陣屏風　大阪城天守閣蔵
大坂落城図　日光東照宮蔵
大坂陣大名屋敷割図　三津木国輝氏蔵
真田丸陣構図　大阪城天守閣蔵
冬の陣布陣図　陸軍参謀本部編
夏の陣布陣図　陸軍参謀本部編

真田系図（本書関係を中心にまとめ、後裔の現住地をも併記。）





参考文献

徳富猪一郎「大阪役」（民友社『近世日本国民史』家康時代中巻）
猪坂直一「真田三代録」（理論社）
中村孝也「真田三代記」（博文館）
小林計一郎「真田史料集」（人物往来社『戦国史料叢書』②）
小林計一郎「真田幸村」（人物往来社『日本の武将』64）
小林計一郎「真田一族」（新人物往来社）
戸川残花（桑田忠親監修）「三百諸侯」（新人物往来社）
岡本良一「大阪夏の陣・冬の陣」（筑摩書房）
中野秀人「真田幸村論」（学芸書林『現代文学の発見』第十一巻）
「日本史探訪・真田幸村」（角川書店）
「九度山町史」
「真田庵略縁起」
「楠公遺訓」（岡島佐太郎編）
「日本の歴史」（中央公論社）
「日本歴史大辞典」（河出書房）
「日本史辞典」（創元社）
「日本百科大事典」（小学館）
「摂津名所図会」
「河内名所図会」
「和泉名所図会」
「真田氏の四六〇年」（真田六文会編）

（著者略歴）

近藤精一郎（こんどう・せいいちろう）
大正15年大阪生まれ。気象大学校卒。
気象技術員を皮切りに，28年間の教壇生活を経て，吹田市教育委員会社会教育課長，吹田市立中央図書館長を歴任，昭和59年４月末勇退。
日本著作権協議会会友。兵庫歴史研究会会長。
文芸同人誌「直線」を主宰。「航路」同人。
編著書　「文学教室」（日月書院）
著書　「非常持出」（六月社）「なにわ塚物語」（創芸出版）
現住所　伊丹市高台１―149―19

軍師　真田幸村

昭和六十年二月二十五日　新装第一刷発行
昭和六十年四月二十日　新装第二刷発行

著　者　近藤精一郎
発行者　菅　英志
発行所　新人物往来社
東京都千代田区丸の内三―三―一（新東京ビルヂング）〒一〇〇
電話東京（二一二）三九三一（代表）　振替東京六―一五一六四三
印刷所　明邦印刷
製本所　小泉製本
落丁本・乱丁本はおとりかえします



©近藤精一郎　Printed in Japan　（定価はカバー・帯に表示してあります）

ISBN 4-404-01254-3 C0021

＊好評の既刊書

戦国

戦国細川一族―忠興と長岡与五郎興秋

豊臣・徳川の二大勢力のはざまで、名族細川はいかに自家保存を計ったか。朝鮮出兵―関ヶ原前後―大坂陣に至る合戦と政治を描き、ガラシャの次子興秋の悲運の生涯をも追求。

戸田敏夫著●四六判2000円

駿河今川一族

九代今川義元は京都進出を企図するも永禄三年桶狭間で信長に敗死。本書は、初代範国から十代氏直にいたる今川一族興亡のドラマを今川氏研究第一人者が史料を駆使し描く労作。

小和田哲男著●四六判2000円

真田一族

敏腕な政治力と一族の団結によって戦国の表舞台に躍り出た真田一族。幸隆・昌幸・幸村・信之の人間像に迫り、智謀と意地とで生き抜いた真田四代を描く一代戦国史話。

小林計一郎著●四六判1200円

出雲尼子一族

江州佐佐木一族から出て山陰に君臨した尼子一族が、大内・毛利氏、と死闘をくり返しつつ、山中鹿介らの奮戦も空しく亡びゆく歴史を描く。

米原正義著●四六判1800円

関ヶ原役―合戦とその周辺

天下分け目の合戦を、両軍戦力の基礎たる経済の実態を明らかにしつつ、権力争奪戦の底にうごめく庶民の犠牲と苦悩とを描き出す。――家康・三成激突の舞台裏を衝く異色の書。

松好貞夫著●四六判1300円

定本武田勝頼

武田勝頼は、武田家を衰亡に導いた愚な武将として評価されてきた。本書は新資料を駆使して、悲運の武将勝頼の生涯を余すことなく世人の前に公開した武田氏研究の決定版。

上野晴朗著●四六判函入2500円

武田・上杉軍記

武田信玄、上杉謙信の宿命の対戦を中心に、両雄の人物、治績を詳細に対比し、さらに勝頼、景勝の運命をも描く。系図・地図・写真多数。

小林計一郎著●四六判2000円

宮本武蔵―その実像と虚像

宮本武蔵ほど著名でありながら、その実体が謎に満ちた人物はいない。武蔵を同郷の先輩として仰ぐ著者が武蔵由縁の各地を踏査、新資料によりその実像を描く。

棟田博著●四六判1200円

宮本武蔵の生涯

不世出の剣聖宮本武蔵三三〇年忌にあたり、一度も敗れたことなき波瀾万丈の事蹟と、不断の修業の積み重ねによる人間形成の過程をあますところなく描いた絶好の書！

中西清三著●四六判1300円

宮本武蔵のすべて

吉川英治の不朽の名作『宮本武蔵』によって知れわたり、その著『五輪書』『兵法三十五条』で剣の極意を後世に残した武蔵をあらゆる角度から分析。家系、剣技、書画、試合等。

岡田一男・加藤寛編●四六判2000円

新人物往来社の本